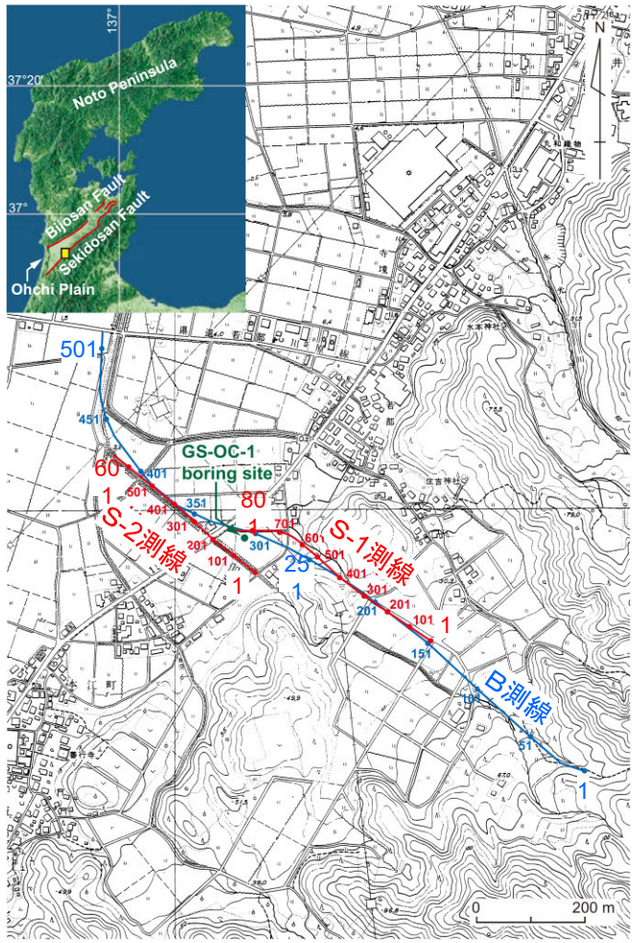
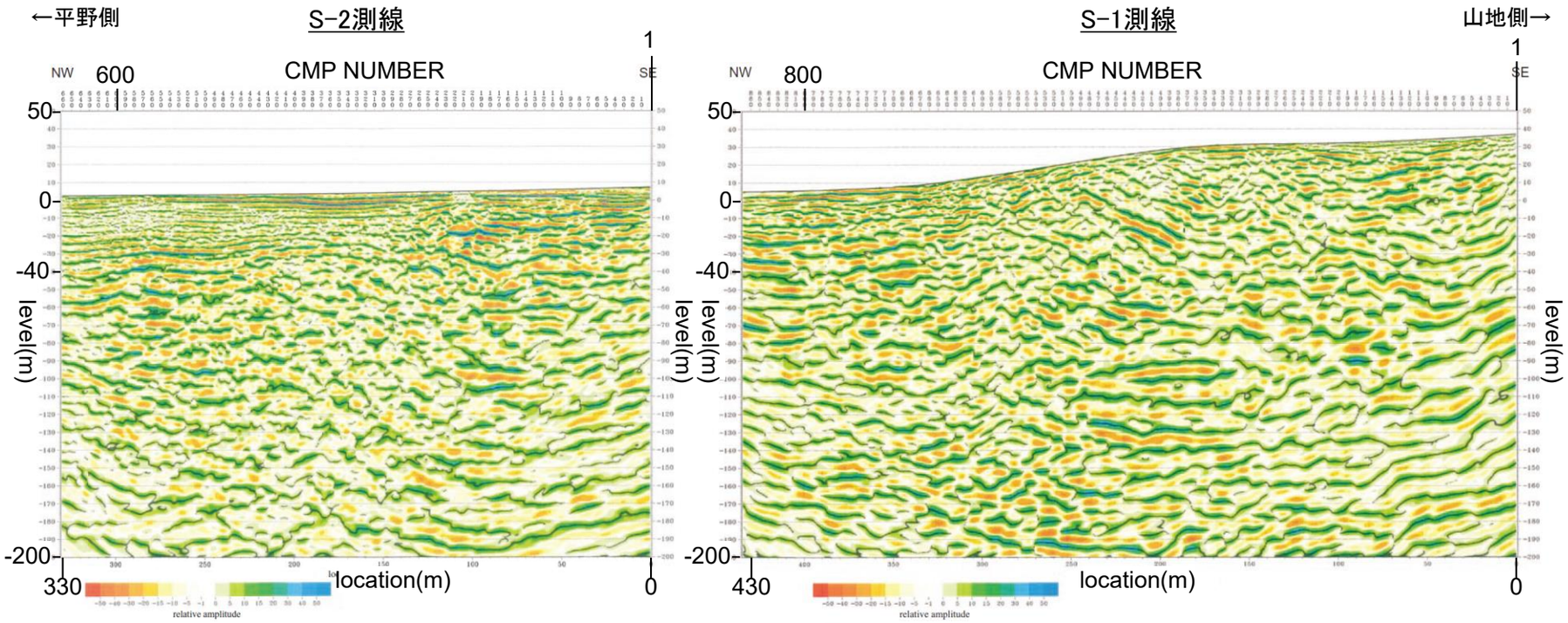
3.2.24(2) 邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯の同時活動の可能性の検討 －文献調査－

○邑知潟南縁断層帯の断層面の傾斜方向を確認するため，文献調査を実施した。
○下川ほか（2002），水野ほか（2003）によれば，邑知潟南縁断層帯は南東傾斜（傾斜角約30°）の逆断層であると推定される。

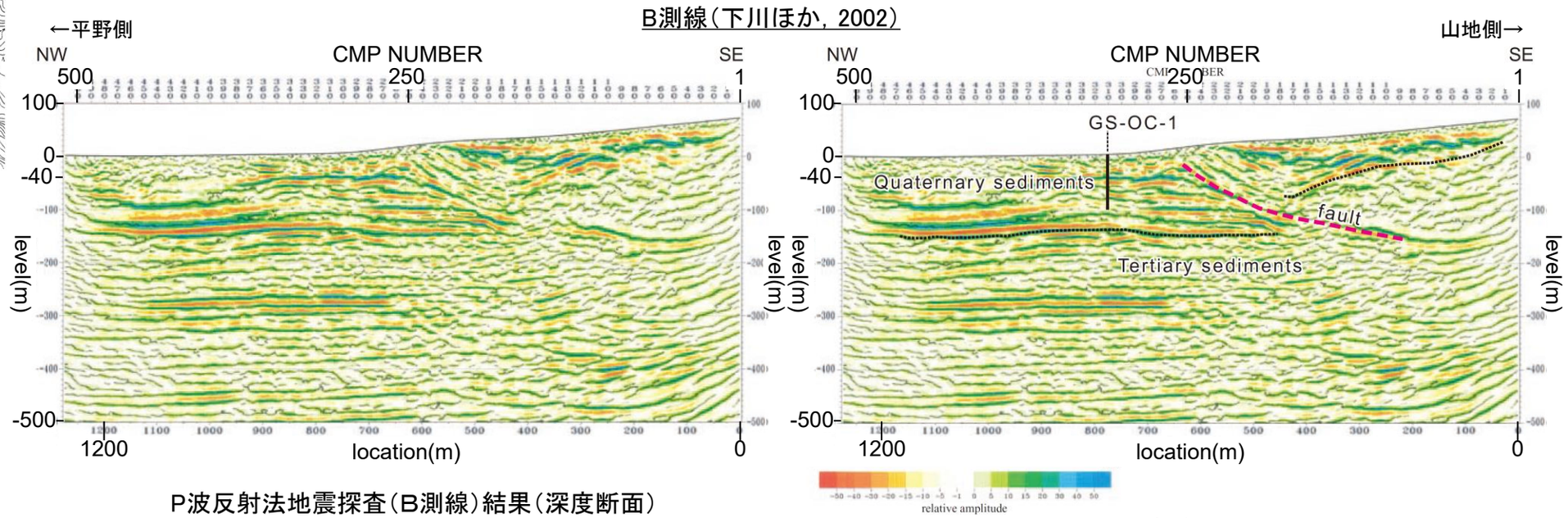


・国土地理院発行50mメッシュ数値地図及び羽咋市発行の5,000分の1地形図を使用

反射法地震探査測線（CMP番号）位置図
（水野ほか（2003）に一部加筆）



S波反射法地震探査結果（深度断面）
（水野ほか（2003）に一部加筆）

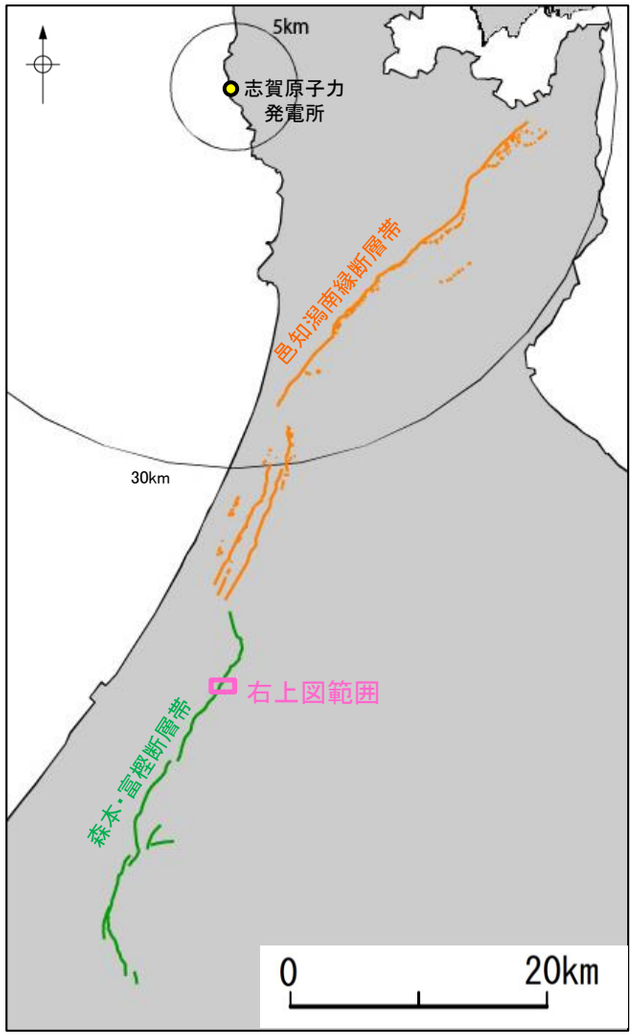


P波反射法地震探査（B測線）結果（深度断面）
（再解析後）
（水野ほか（2003）に一部加筆）

解釈図
（水野ほか（2003）に一部加筆）

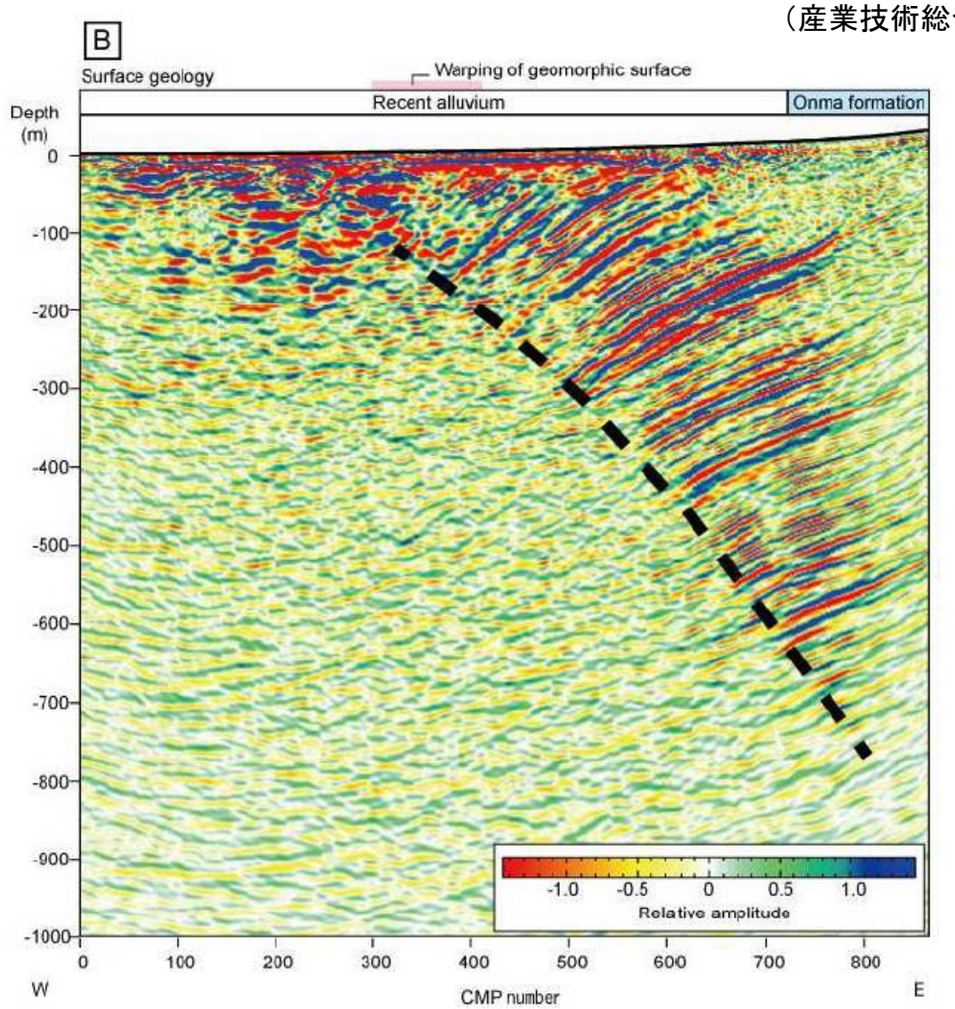
3.2.24 (2) 邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯の同時活動の可能性の検討　－文献調査－

○森本・富樫断層帯の断層面の傾斜方向を確認するため，文献調査を実施した。
○地震調査委員会（2013a）によれば，森本・富樫断層帯は東傾斜（傾斜角約40～60°）の逆断層と推定される。

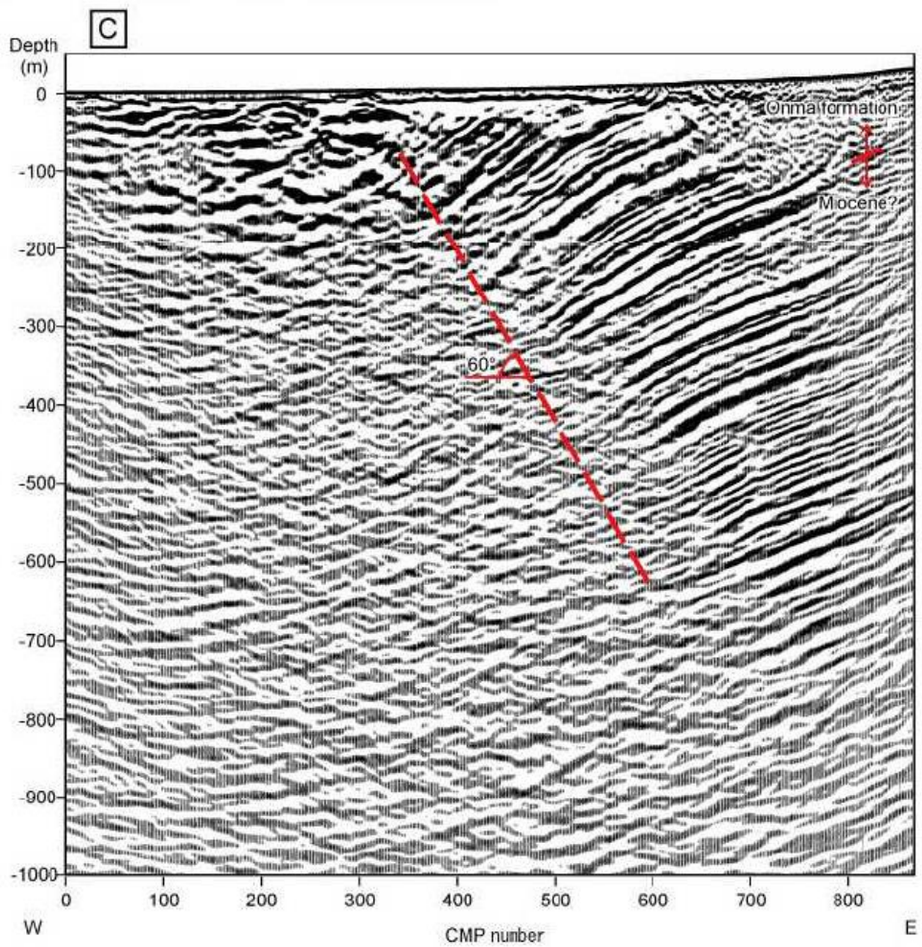


位置図

利屋地点における反射法弾性波探査測線位置図
（産業技術総合研究所，2008a）



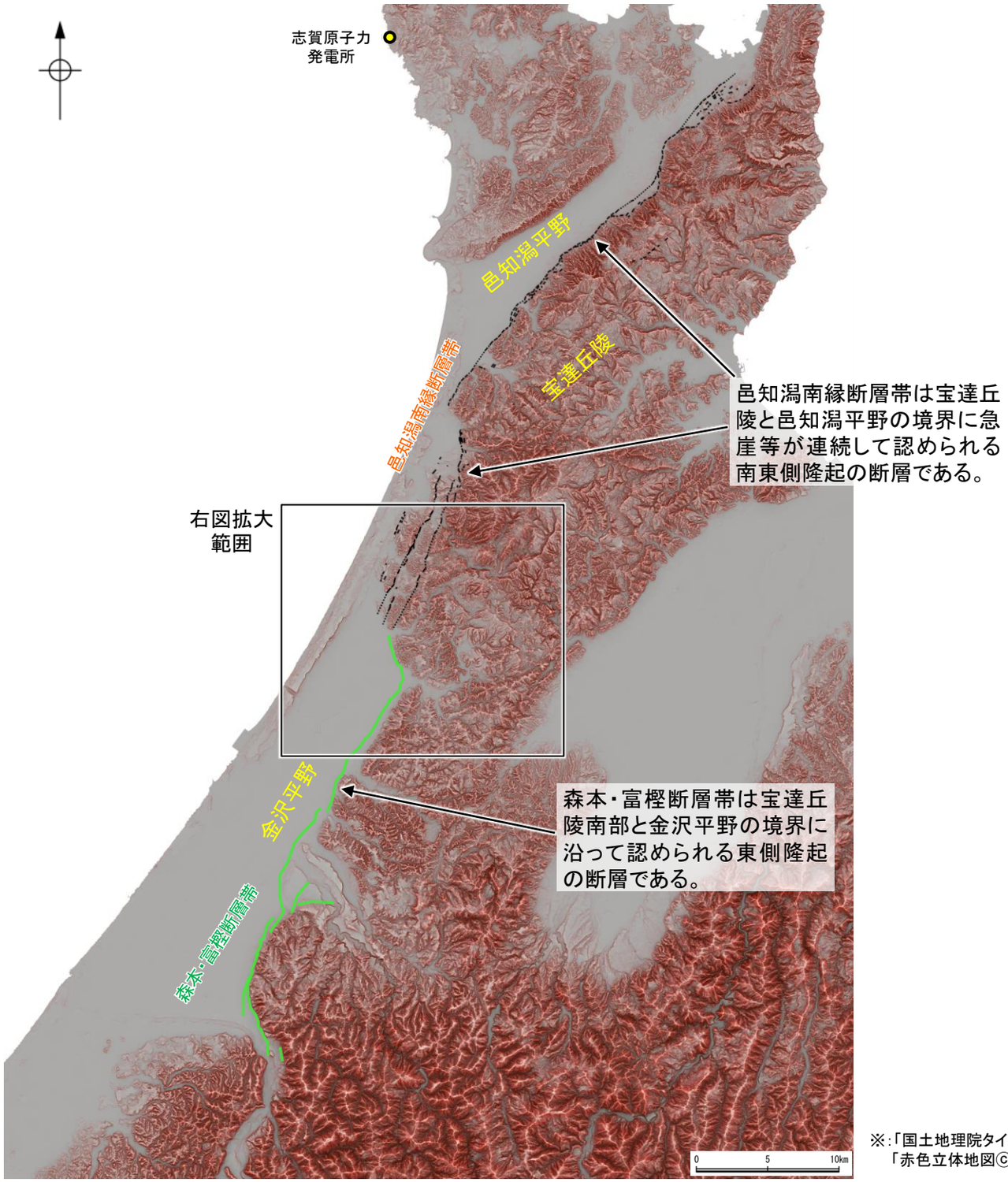
反射断面図（表層地質及び撓曲帯も併記）
（産業技術総合研究所（2008a）を地震調査委員会（2013a）が編集）



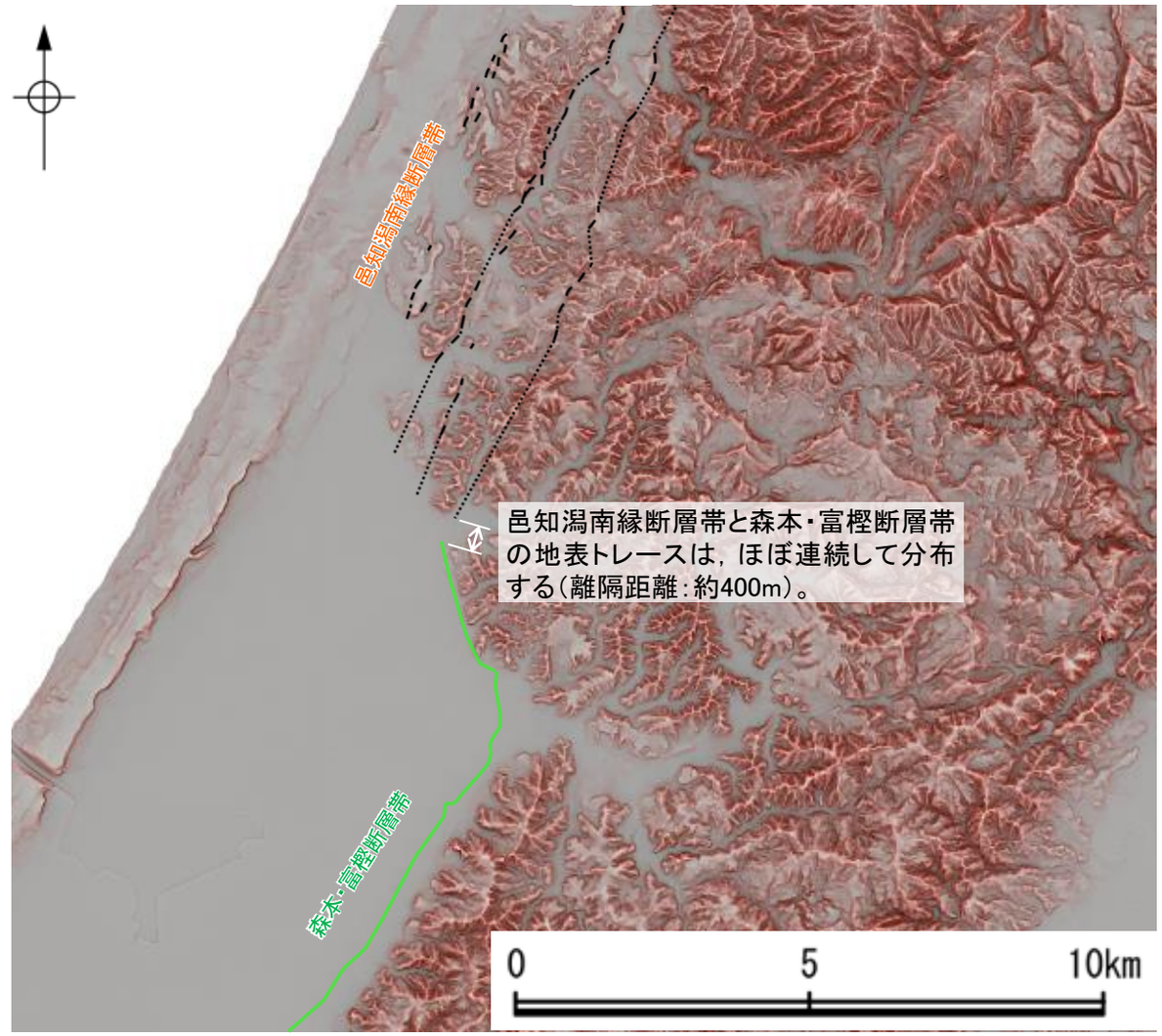
反射断面解釈図
（産業技術総合研究所，2008a）

3.2.24 (3) 邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯の同時活動の可能性の検討　－地形調査－

○邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯の周辺の地形を確認するため，地形調査を行った。
○空中写真判読の結果，邑知潟南縁断層帯は宝達丘陵と邑知潟平野の境界に急崖等が連続して認められる南東側隆起の断層である。
○空中写真判読の結果，森本・富樫断層帯は宝達丘陵南部と金沢平野の境界に沿って認められる東側隆起の断層である。
○邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯の地表トレースは，ほぼ連続して分布する（離隔距離：約400m）。



赤色立体地図※



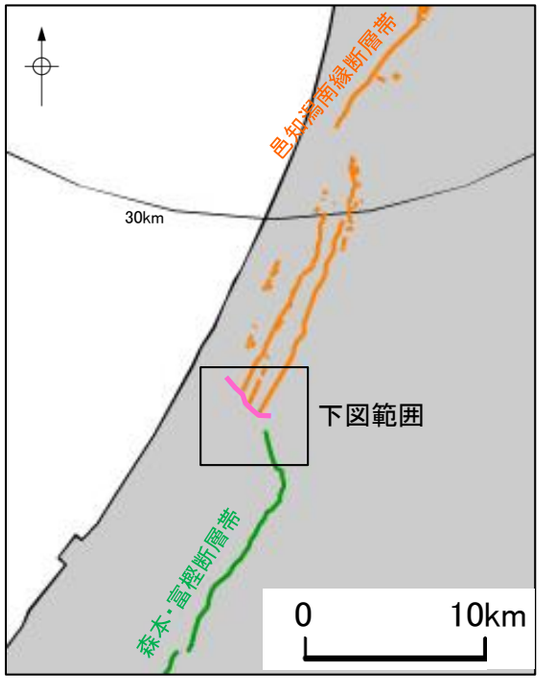
拡大図

邑知潟南縁断層帯断層位置
推定区間
森本・富樫断層帯断層位置（文献の断層トレースを基に評価した断層位置）

※：「国土地理院タイル：赤色立体地図」背景データとして使用し，一部加筆
「赤色立体地図ⓒアジア航測株式会社」

3.2.24 (4) 邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯の同時活動の可能性の検討　－反射法地震探査－

○邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯間の地質構造の連続性を検討するため，両断層間の反射法地震探査記録を確認した。
○その結果，邑知潟南縁断層帯～森本・富樫断層帯間の指江測線に断層等は認められず，両断層は連続しない。



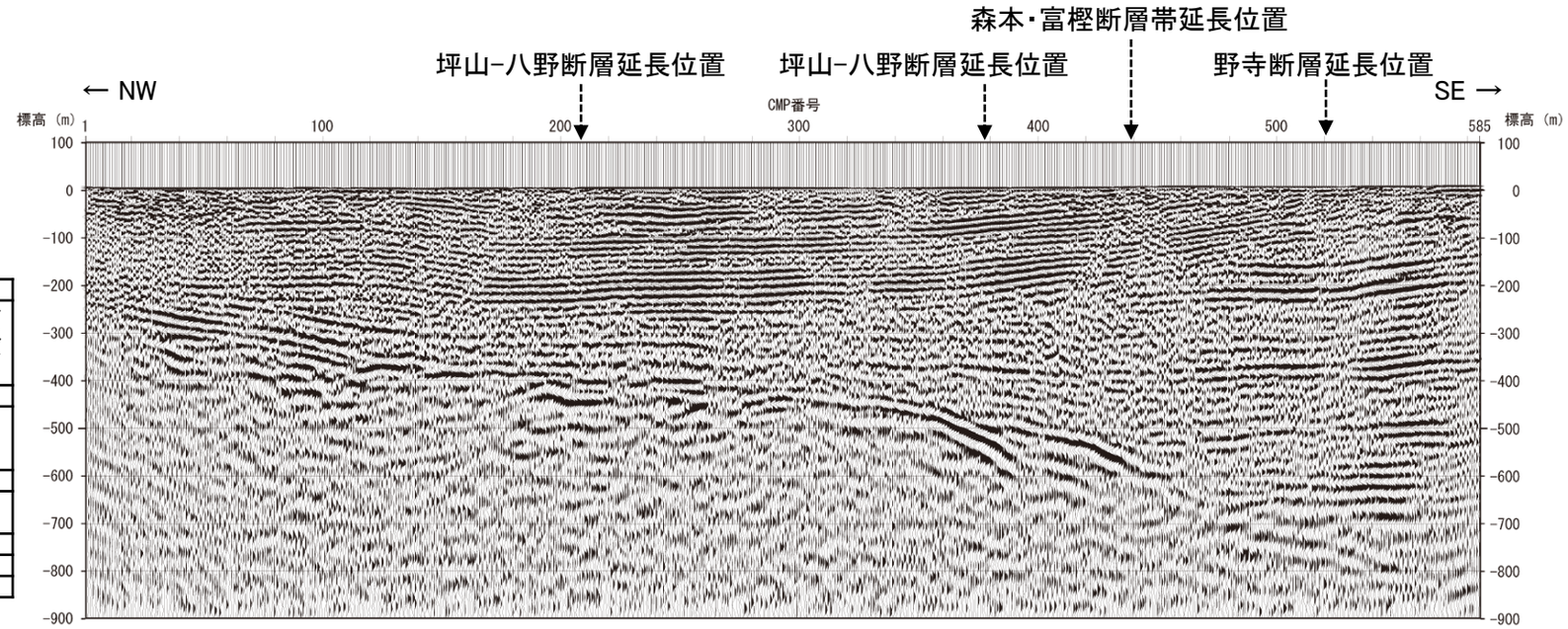
位置図

凡　例

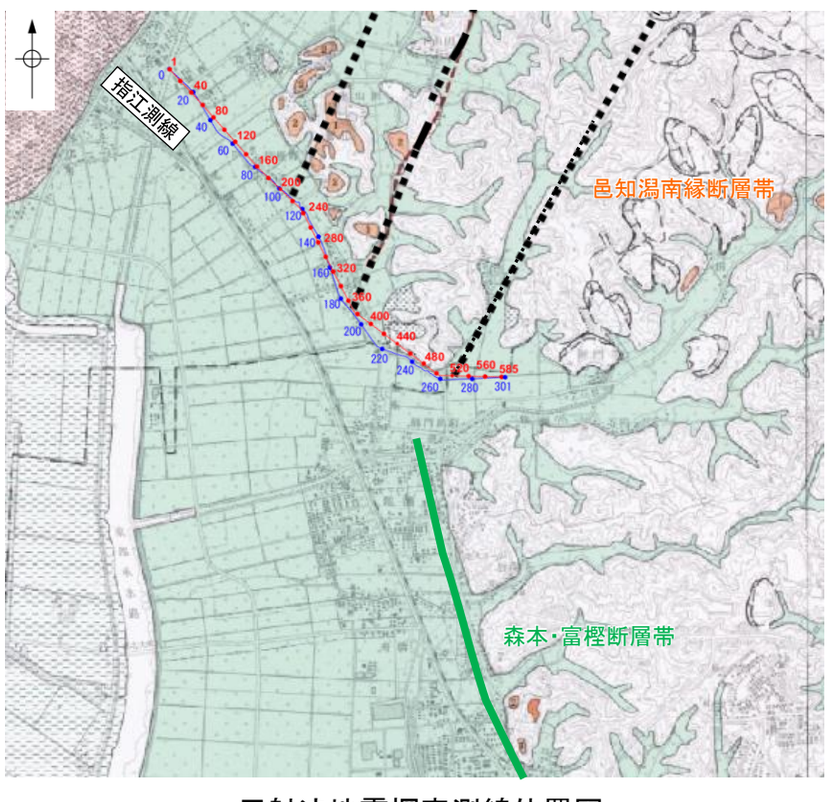
〔解釈図〕
- 地層境界（明瞭なもの）
- 地層境界（不明瞭なもの）
- 反射面（明瞭なもの）
- 反射面（不明瞭なもの）

反射法地震探査仕様

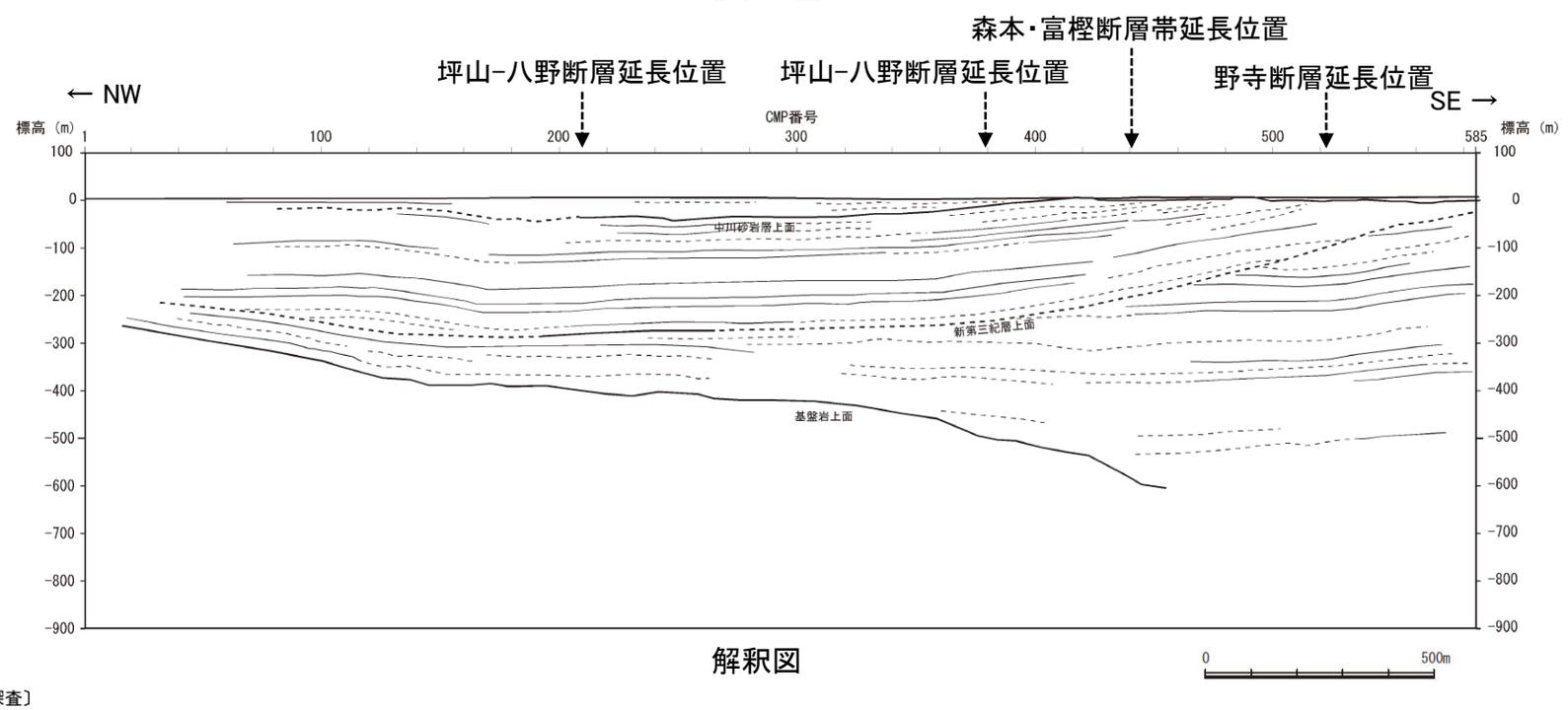
測線長	3010m
振源	電磁式バイブレータ1台（スイープ数16回，スイープ周波数15～120Hz，スイープ長7s）
発振点間隔	10m
受振器	上下動速度計（L-40A固有周波数40hz，6個グループ）
受振点間隔	10m
記録系	有線型データ収録装置（DAS-1）
サンプリング間隔	1ms
記録長	1.5s
解析CMP間隔	5m



反射法地震探査断面図



反射法地震探査測線位置図
(活断層図（都市圏活断層図）(堤ほか，2010；基図は地理院地図)に一部加筆)



解釈図

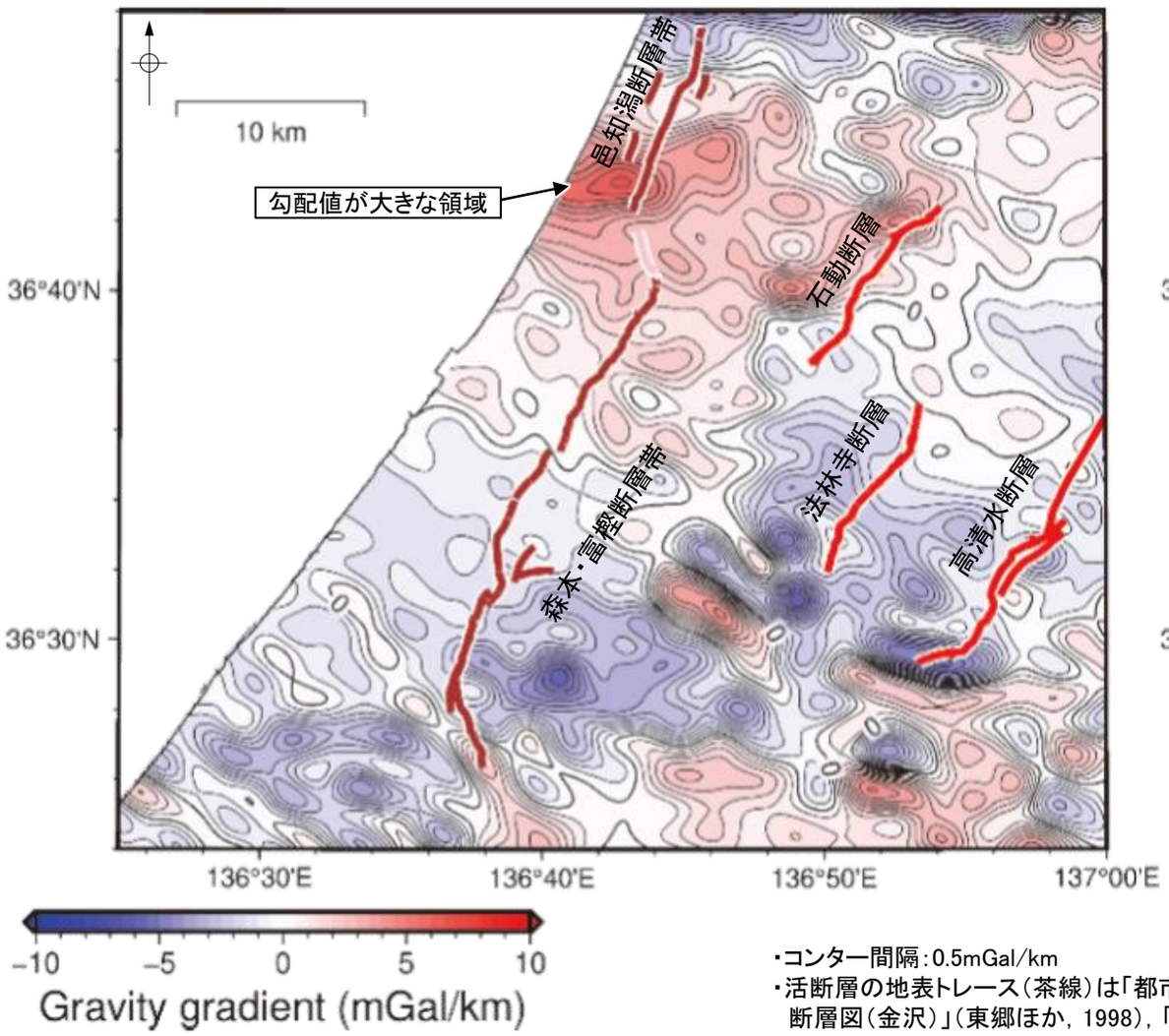
〔反射法地震探査〕
- CMPライン
- ステーションライン
- 120 CMP番号
- 80 ステーション番号

邑知潟南縁断層帯断層位置
推定区間

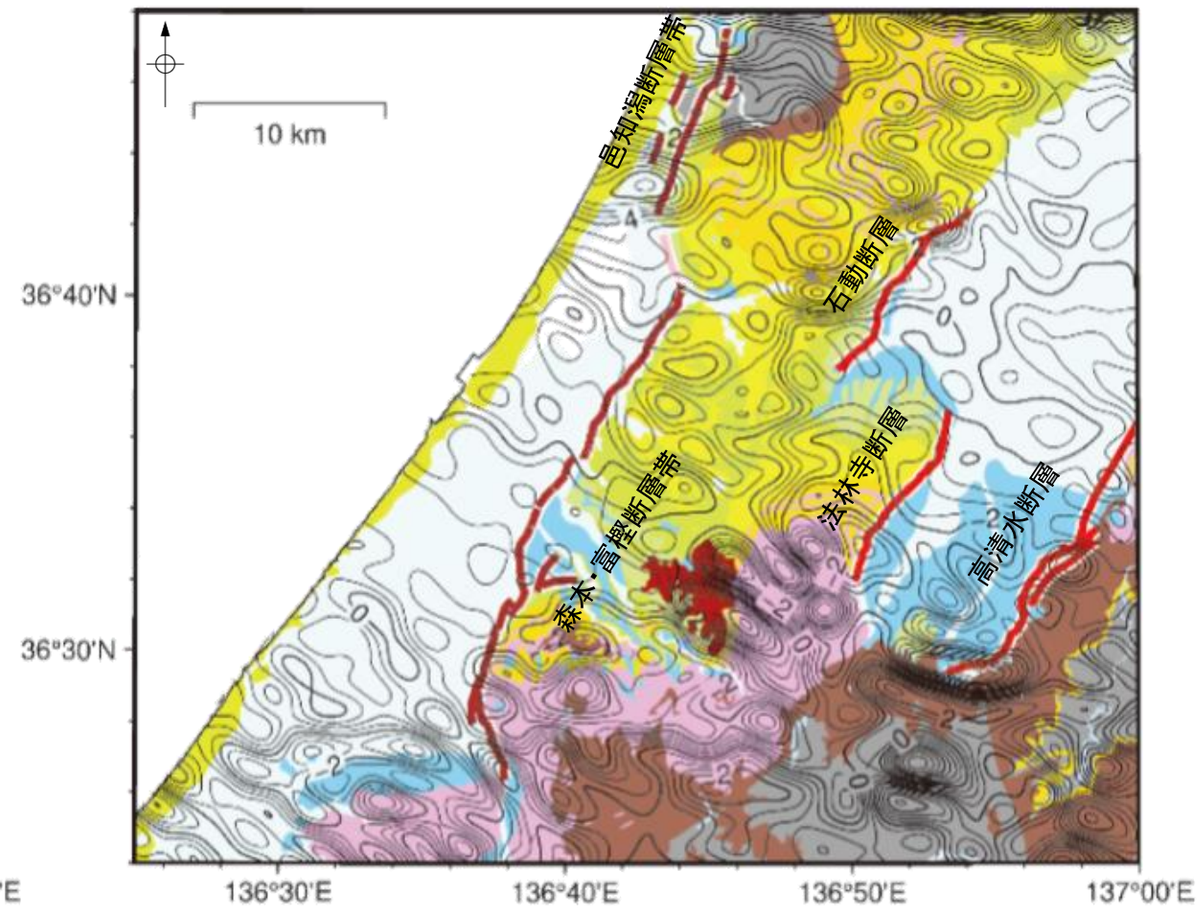
森本・富樫断層帯断層位置（文献の断層トレースを基に評価した断層位置）

3.2.24 (5) 邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯の同時活動の可能性の検討　－重力異常分布－

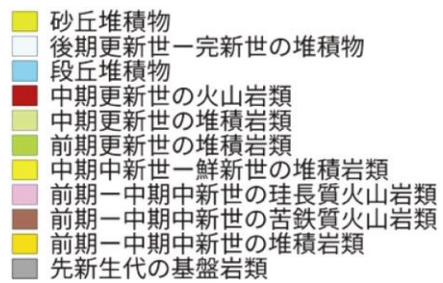
○邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯の間の深部構造の連続性を検討するため，文献調査を行った。
○文科省ほか（2024）は，森本・富樫断層帯周辺における既往重力データを収集し，そこに新規重力データを加えた重力異常図及びその勾配図を作成し，森本・富樫断層帯及び周辺の活断層に関する重力異常の特徴を以下のように抽出している。
・森本・富樫断層帯の走向方向と平行なN30°E方向の重力異常の勾配図（左下図）では，断層の走向方向に構造境界が存在すると勾配の絶対値が大きな領域として表れる。
・森本断層の北端と邑知潟断層帯南端の間で勾配値が大きな領域が分布し，これは森本断層と邑知潟断層帯の地下の断層構造が連続しないことを反映している可能性が現時点では考えられる。



森本・富樫断層帯の走向方向と平行なN30°E方向の重力異常の勾配図
（文科省ほか（2024）に一部加筆）



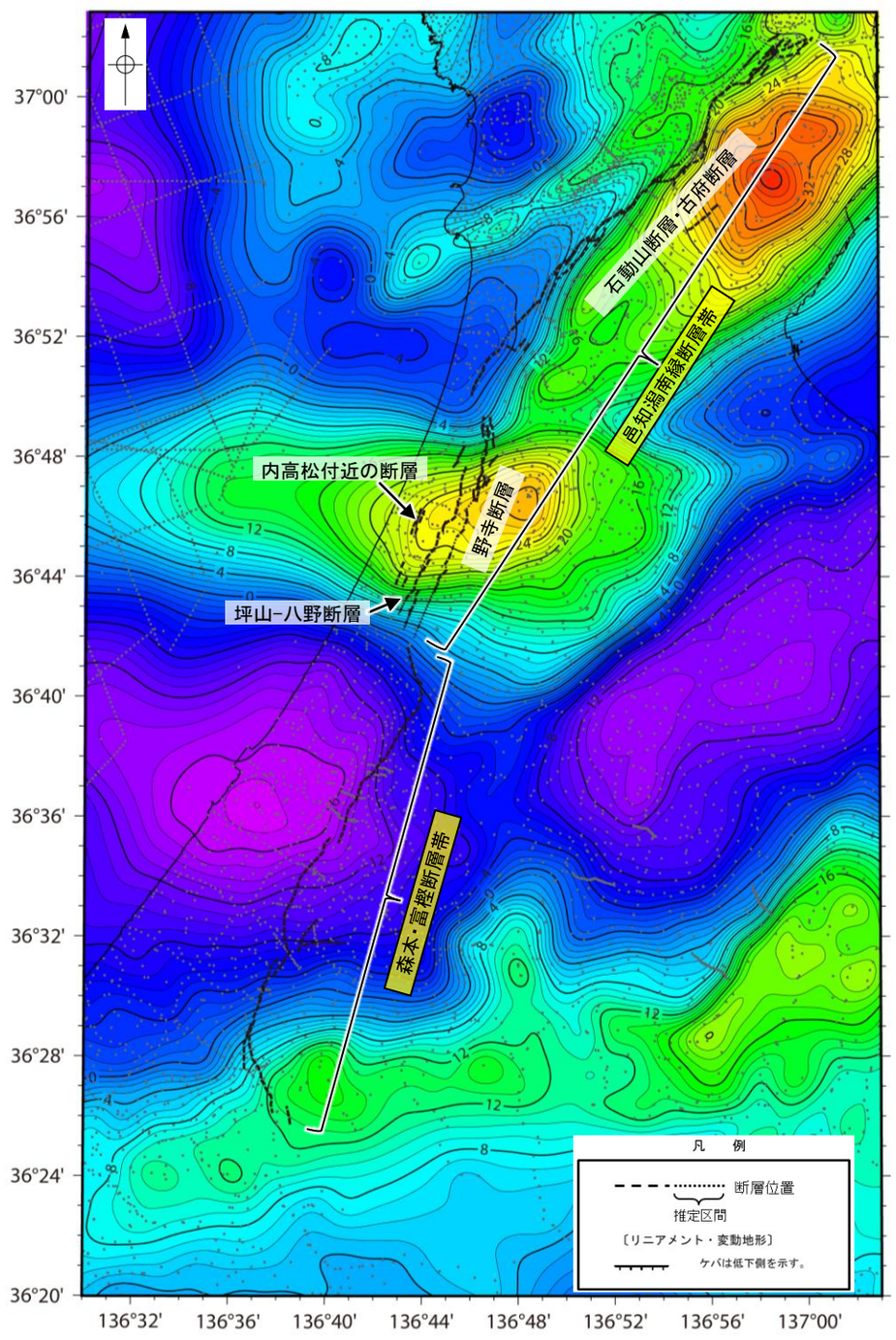
・コンター間隔：0.5mGal/km
・活断層の地表トレース（茶線）は「都市圏活断層図（邑知潟）」（杉戸ほか，2010），「都市圏活断層図（金沢）」（東郷ほか，1998），「都市圏活断層図（鶴来）」（松多ほか，2016）に基づく。
・活断層の地表トレース（赤線）は「活断層詳細デジタルマップ」（中田・今泉，2002）に基づく。



左図と地質図を重ね合わせた図
（文科省ほか（2024）に一部加筆）

3.2.24 (5) 邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯の同時活動の可能性の検討　－重力異常分布－

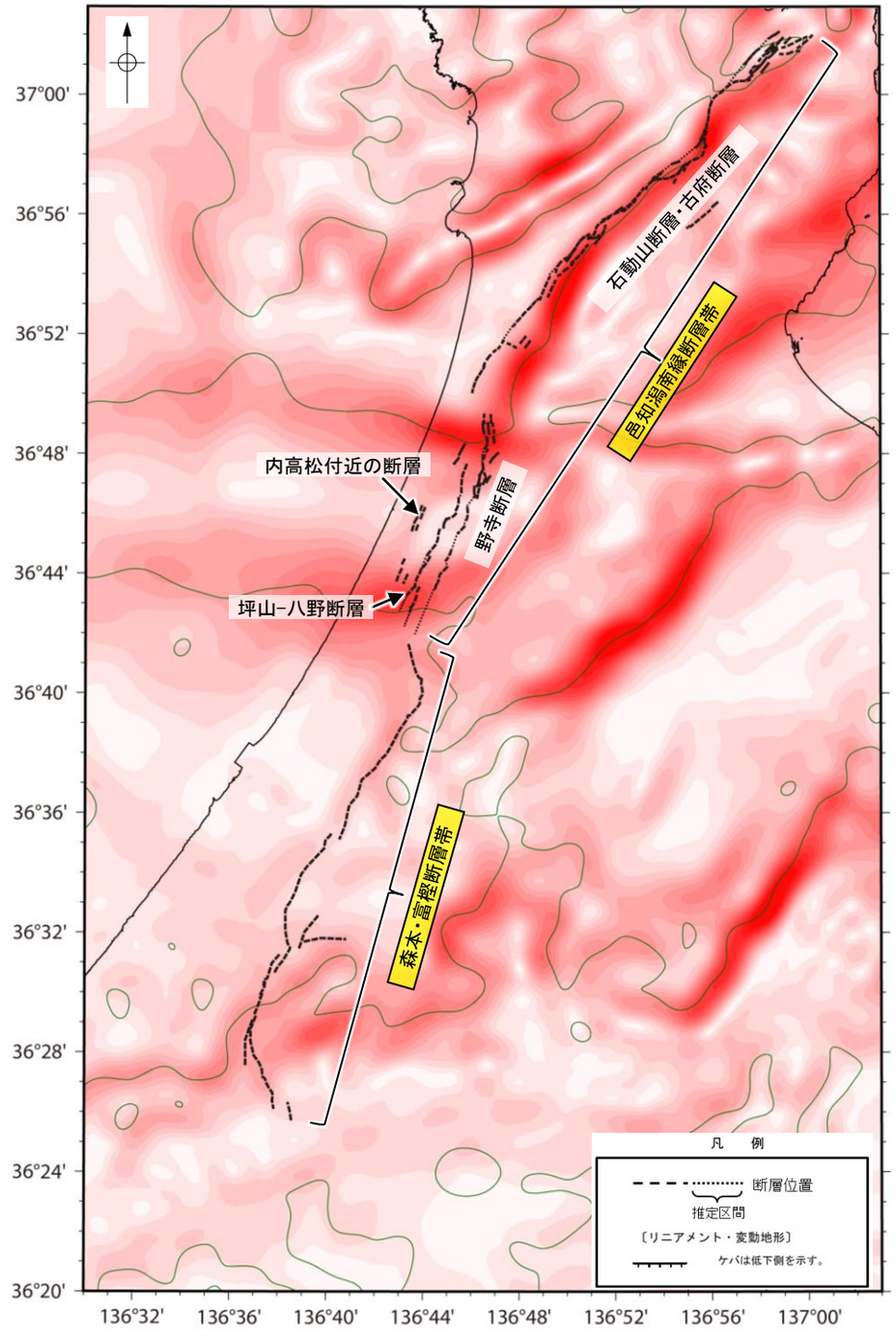
○邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯の深部構造を比較するため，断層周辺の重力異常分布を比較した。
○ブーゲー異常図及び水平一次微分図から，邑知潟南縁断層帯の北部（石動山断層・古府断層）については，地形から想定される隆起側（南東側）に高重力異常域が分布し，隆起側に対して直線的に連続する重力異常急変部が認められるものの，邑知潟南縁断層帯の南部（野寺断層，坪山−八野断層及び内高松付近の断層）と森本・富樫断層帯については，対応する重力異常急変部は認められず，連動の可能性については明確に判断できない。



ブーゲー異常図

●：測定点

仮定密度：2,300kg/m³
コンター間隔：1mGal



鉛直一次微分値が0mGal/kmの等値線

水平一次微分図

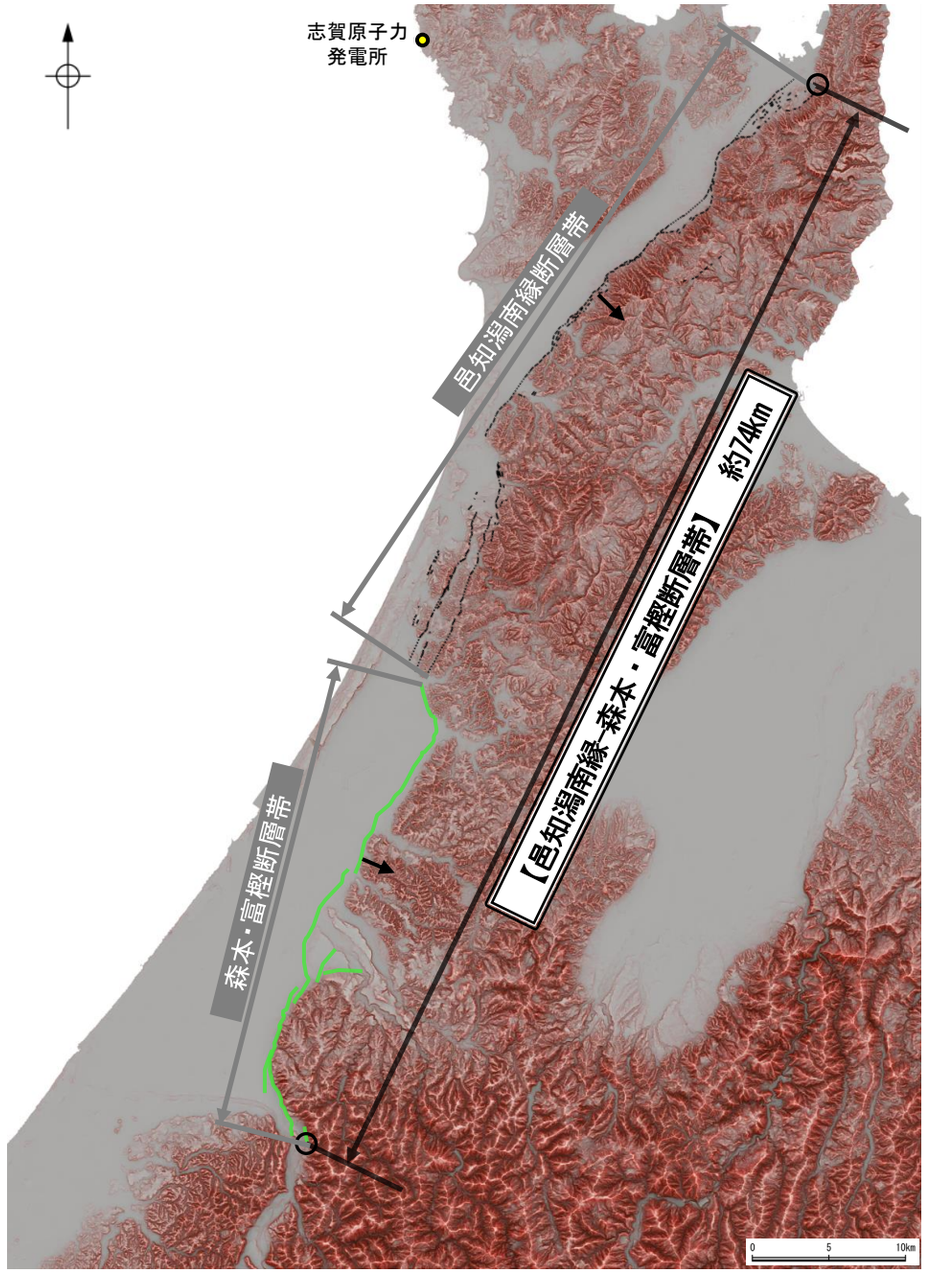
・右図は，陸域は本多ほか(2012)，国土地理院(2006)，The Gravity Research Group in Southwest Japan (2001)，Yamamoto et al. (2011)，Hiramatsu et al. (2019)，澤田ほか（2021），海域は産業技術総合研究所地質調査総合センター(2013)，石田ほか（2018）を用いて，金沢大学・当社が作成した。
・なお，ブーゲー異常図は，平面トレンド成分の除去及び遮断波長4kmのローパスフィルター処理を行っており，それを基に水平一次微分図を作成した。

3.2.24(6)　同時活動する可能性のある断層の関連性の検討

○邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯は，同時活動する可能性があると評価したことから，同時活動する可能性のある断層の関連性の検討を行った。
○地表での断層位置・形状を確認した結果，両断層は断層トレースが並走しない。

○断層形状・位置関係を確認した結果，邑知潟南縁断層帯と森本・富樫断層帯は，断層トレースが並走せず，両断層がともに震源断層として活動する（主断層－主断層の関係）と判断し，**両断層の連動を考慮する**。
○両断層の連動を考慮した結果，「邑知潟南縁-森本・富樫断層帯」として，走向がNE-SW方向，南東傾斜（約30～60°）の逆断層と評価した。
○断層長さは，邑知潟南縁断層帯の北東端から森本・富樫断層帯の南西端までの約74km（74.3km）※区間を評価した。

※：括弧内の長さは，邑知潟南縁断層帯の長さ（44.3km）と森本・富樫断層帯の長さ（30km）を足し合わせた値を記載している。

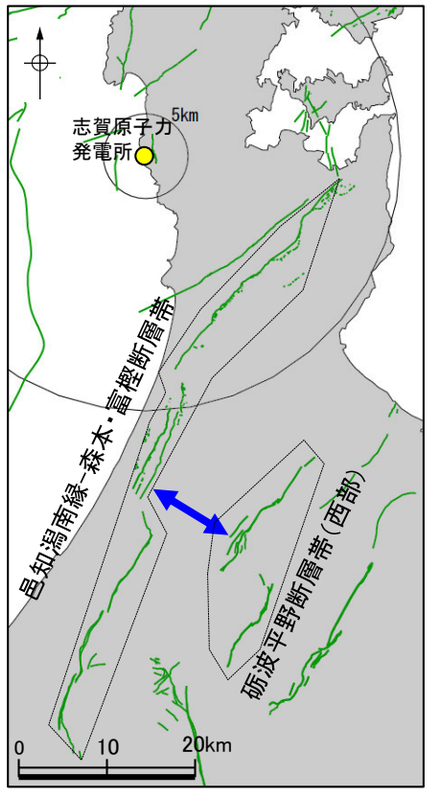


赤色立体地図※

- - - - ····· 邑知潟南縁断層帯断層位置
推定区間
森本・富樫断層帯断層位置（文献の断層トレースを基に評価した断層位置）
○ 断層端点
↘ 傾斜方向

※：「国土地理院タイル：赤色立体地図」背景データとして使用し，一部加筆
「赤色立体地図ⓒアジア航測株式会社」

3.2.25　邑知潟南縁-森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）の連動の検討結果



連動の検討対象位置図

凡　例

——　後期更新世以降の活動が否定できないと評価した断層

矢印 ・・・・　検討対象として選定した断層の組合せ

青色：連動に該当しない

3.2.25(1)　邑知潟南縁−森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）の連動の検討結果

連動の検討

○検討対象とする断層の組合せとして抽出した邑知潟南縁−森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）について，「当社の連動評価の検討方法」に基づき，同時活動の可能性の検討を行った。検討にあたっては，近接して分布する森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）を検討対象とした。検討結果は以下の通り。

＜同時活動の可能性の検討＞

赤字：同時活動する可能性を示唆する
青字：同時活動しない可能性を示唆する

検討内容				検討結果
地形及び地質構造	文献調査(A)			①地震調査委員会（2008b, 2013a）は，森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）を別の起震断層として設定している（P.518）。 ②森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）の地表トレースは，一部並走区間を伴って近接して分布する（P.519）。
		反射法地震探査	断層面の傾斜方向(B)	③地震調査委員会（2013a）によれば，森本・富樫断層帯は東傾斜（傾斜角約40～60°）の逆断層と推定される（P.519）。 ④地震調査委員会（2008b）によれば，砺波平野断層帯（西部）は北西傾斜（約45～50°）の逆断層である（P.519）。 ⑤文科省ほか（2024）は，森本断層と法林寺断層を横断する反射法断面（内灘－南砺測線）から，法林寺断層は中角度・東傾斜であり，地下深部に延びる森本断層に収れんするとしている（P.520）。
	地球物理学的調査	重力異常分布(C)		⑥砺波平野断層帯（西部）の一部に対応する重力異常急変部は認められるが，森本・富樫断層帯に対応する構造は明瞭ではないことから，両断層の同時活動の可能性については明確に判断できない（P.521）。
断層の活動履歴		平均変位速度(D)		⑦砺波平野断層帯（西部）の平均変位速度は，森本・富樫断層帯に比べて明らかに小さい（P.522）。 ・地震調査委員会（2013a）によれば，森本・富樫断層帯の平均変位速度は概ね1m/千年（上下成分）である。 ・地震調査委員会（2008b）によれば，砺波平野断層帯（西部）の平均変位速度は0.3−0.4m/千年程度以上（上下成分）である。
同時活動の可能性の評価				**［評価結果］** ・検討の結果，森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）について，地震調査委員会は別の起震断層として設定しており（①），両断層の平均変位速度は明らかに異なる（⑦）ものの，両断層は，一部並走区間を伴って近接して分布し（②），地下で近づく関係にある（③，④，⑤）。 ・以上のことを踏まえ，総合的に評価した結果，**森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）は同時活動する可能性が否定できない**ことから，**1つの起震断層として設定する**。

＜同時活動する可能性のある断層の関連性の検討＞

○邑知潟南縁−森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）は，1つの起震断層として設定すると評価したことから，同時活動する可能性のある断層の関連性の検討を行った（P.523）。

○断層位置・形状を確認した結果，邑知潟南縁−森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）は，断層トレースが並走し，断層面が地下で近づく関係にあることから，一方の断層のみが震源断層として活動する（主断層－副断層の関係）と判断し，**主断層のみを震源断層として考慮する（連動に該当しない）**こととする。

断層モデルの設定方法

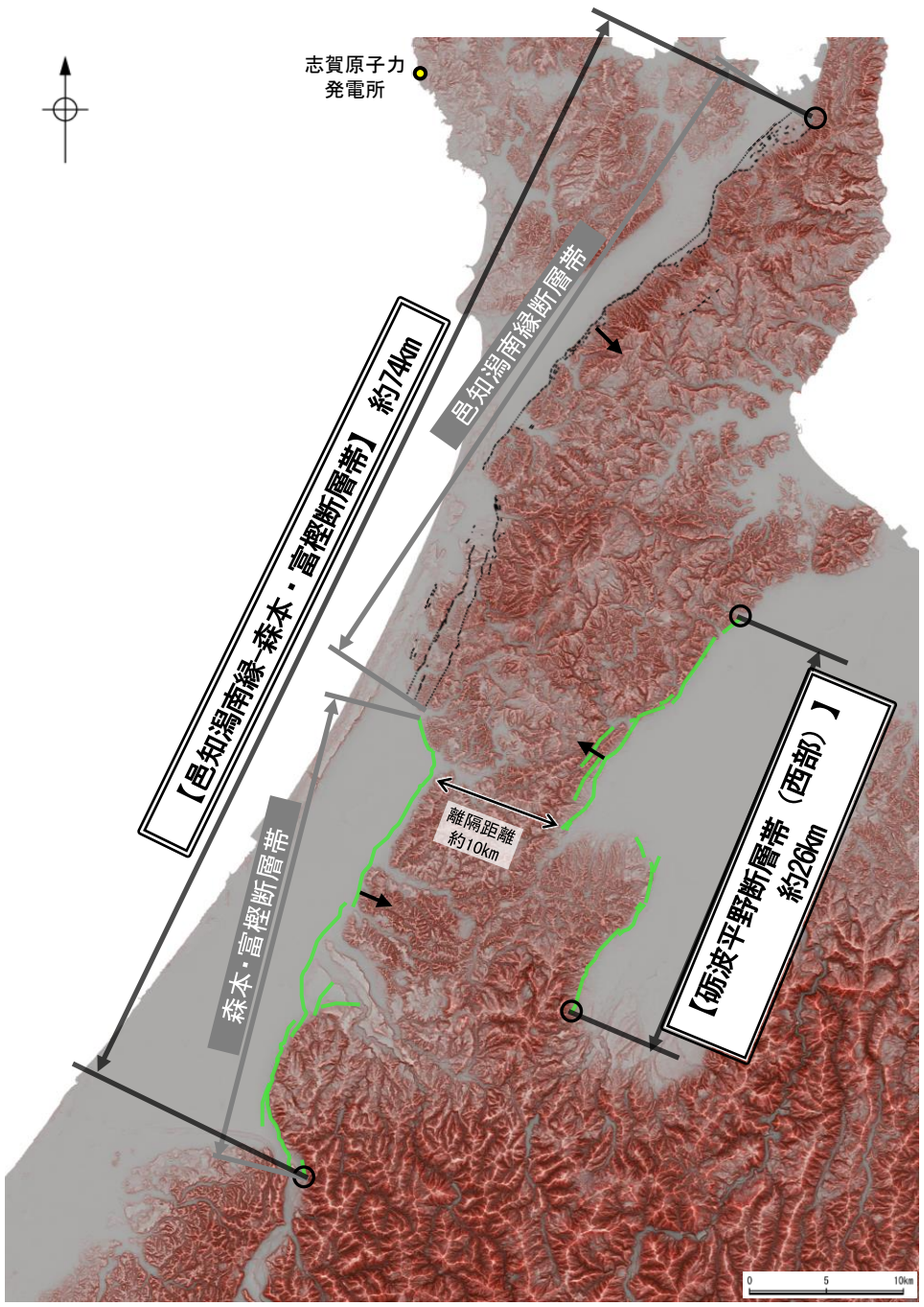
＜参考＞

○連動の検討の結果，邑知潟南縁−森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）は，主断層のみを震源断層として考慮することとしたことから，いずれが主断層であるかの検討を行った。検討結果は以下の通り。

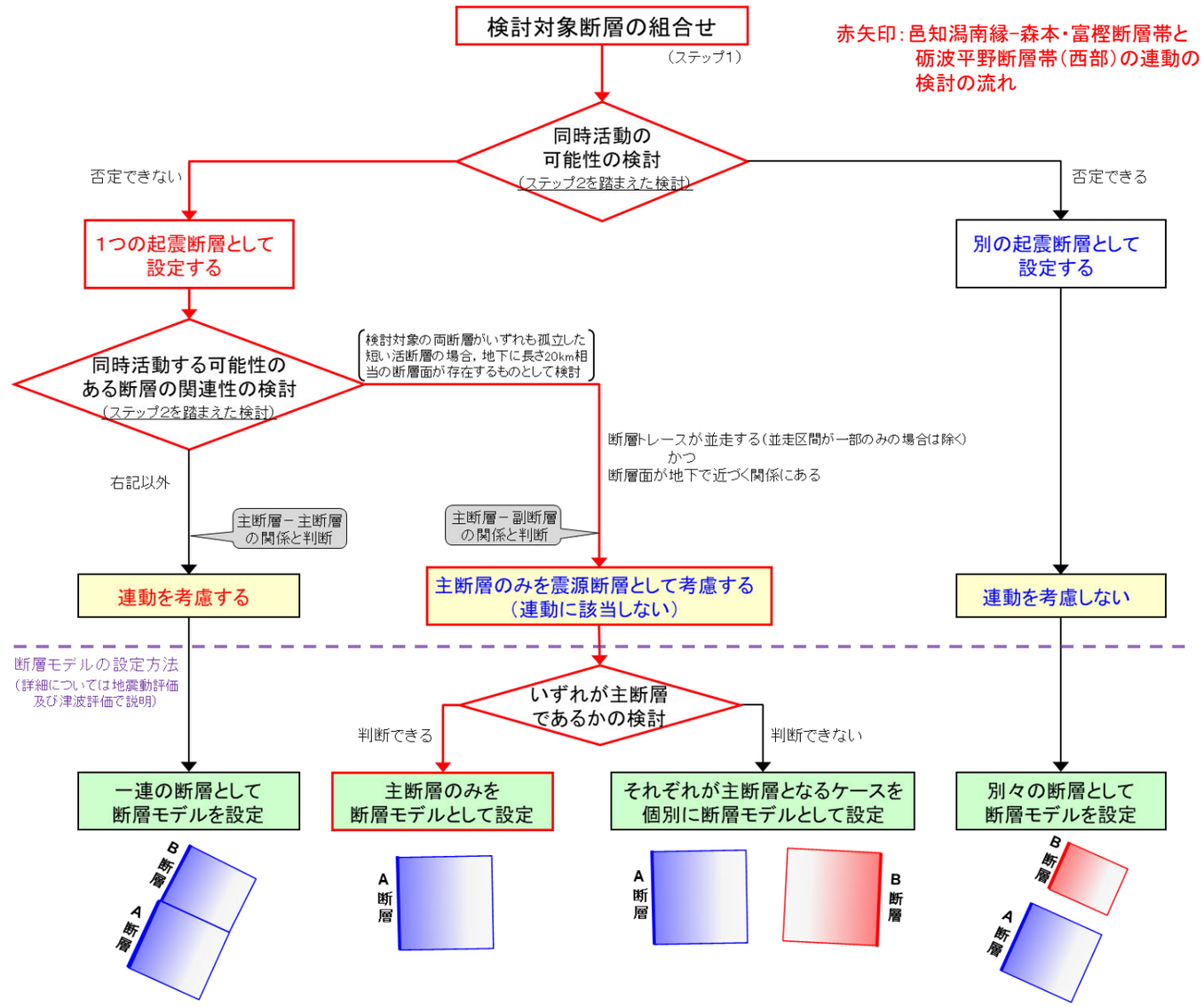
＜いずれが主断層であるかの検討＞

検討内容		検討結果
地形及び地質構造(a)		①邑知潟南縁−森本・富樫断層帯の長さは約74km，砺波平野断層帯（西部）の長さは約26kmであり，断層長さは邑知潟南縁−森本・富樫断層帯の方が大きい（P.505，第1328回審査会合　資料1−1　P.324）。
	文献調査(b)	②文科省ほか（2024）は，森本断層と法林寺断層を横断する反射法断面（内灘－南砺測線）から，法林寺断層は地下深部に延びる森本断層に収れんするとしている（P.520）。
断層の活動履歴	平均変位速度(c)	③砺波平野断層帯（西部）の平均変位速度は，森本・富樫断層帯に比べて明らかに小さい（P.522）。
評価		**［評価結果］** ・検討の結果，断層長さは砺波平野断層帯（西部）より邑知潟南縁－森本・富樫断層帯の方が長く（①），文科省ほか（2024）の反射法断面から，砺波平野断層帯（西部）が森本・富樫断層帯に収れんすると評価されている（②）ことや砺波平野断層帯（西部）の平均変位速度は，森本・富樫断層帯に比べて明らかに小さい（③）ことから，邑知潟南縁－森本・富樫断層帯が主断層，砺波平野断層帯（西部）が副断層であると判断した。 ・以上のことから，断層モデルについては，邑知潟南縁－森本・富樫断層帯のみを断層モデルとして設定することとする。

【邑知潟南縁−森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）の連動の検討結果（位置図，連動評価フロー）】



赤色立体地図※



邑知潟南縁断層帯断層位置

推定区間

断層位置（文献の断層トレースを基に評価した断層位置）

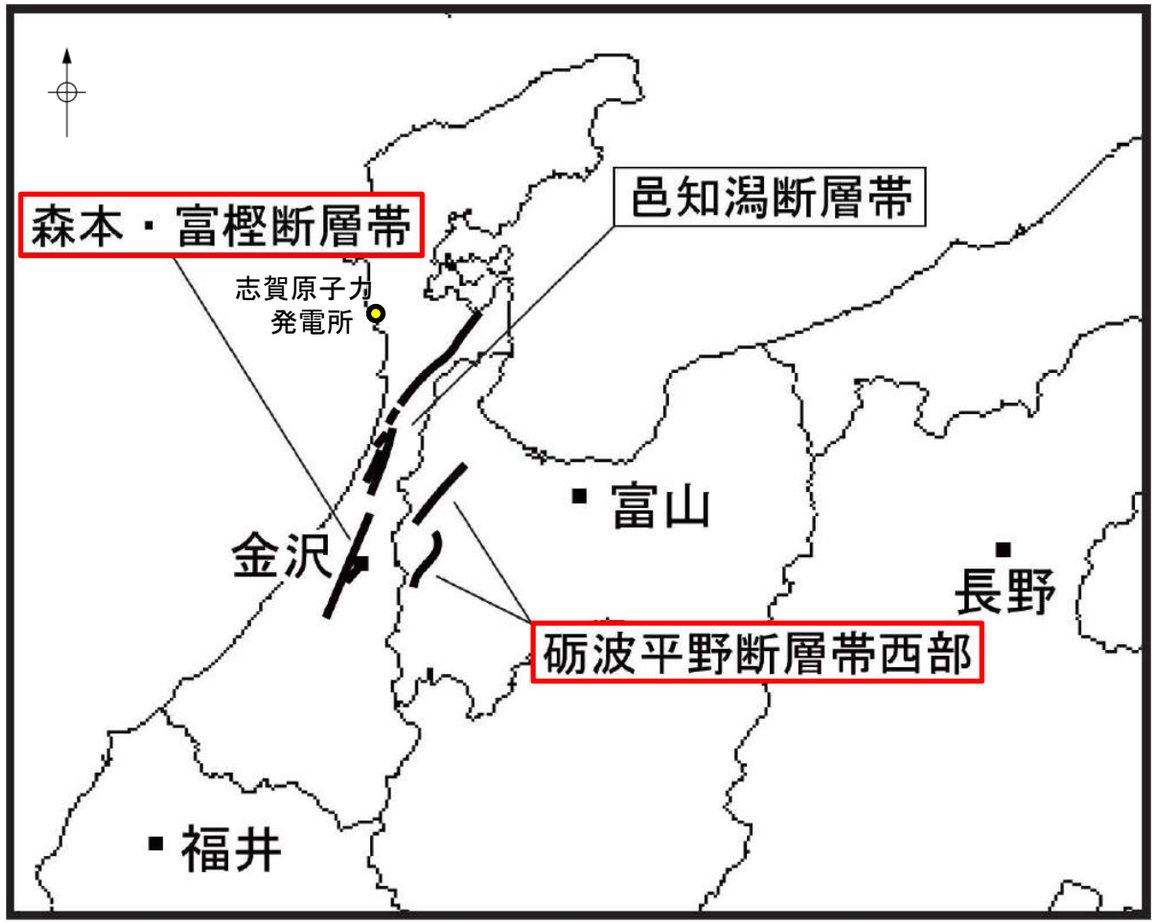
断層端点

傾斜方向

※：「国土地理院タイル：赤色立体地図」背景データとして使用し，一部加筆
「赤色立体地図ⓒアジア航測株式会社」

3.2.25(2)　森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）の同時活動の可能性の検討　－文献調査－

○森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）の連動に関する文献調査を行った。
○地震調査委員会（2008b，2013a）は，森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯西部を別の起震断層として設定しているものの，今後，森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯西部の活動の関連について検討する必要があるとしている。



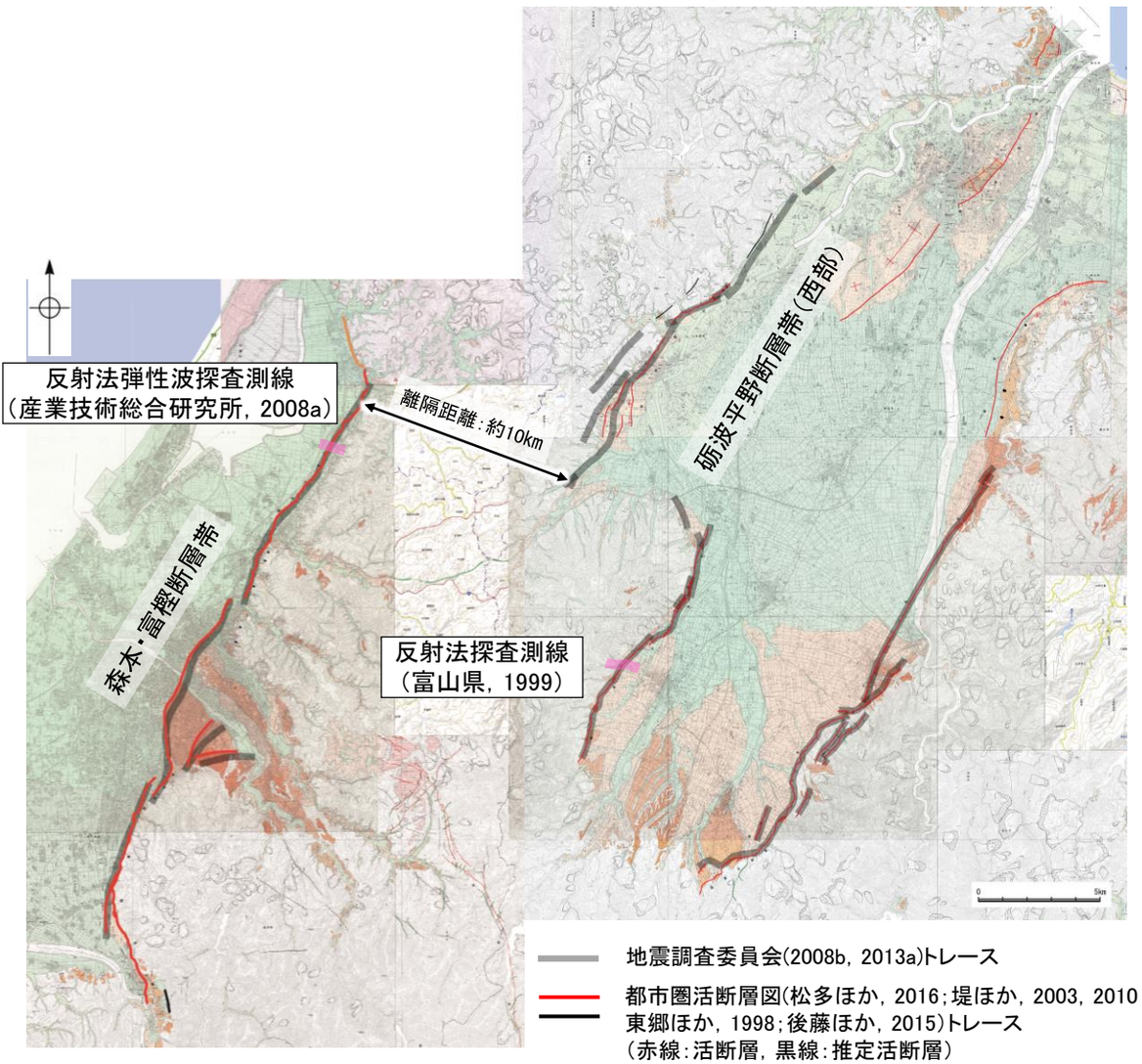
森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯西部の位置関係概略図
（地震調査委員会（2013a）に一部加筆）

3.2.25(2) 森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯(西部)の同時活動の可能性の検討　－文献調査－

○森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯(西部)の特徴及び断層面の傾斜方向を確認するため，文献調査を実施した。
○森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯(西部)の地表トレースは，一部並走区間を伴って近接して分布する(離隔距離：約10km)。

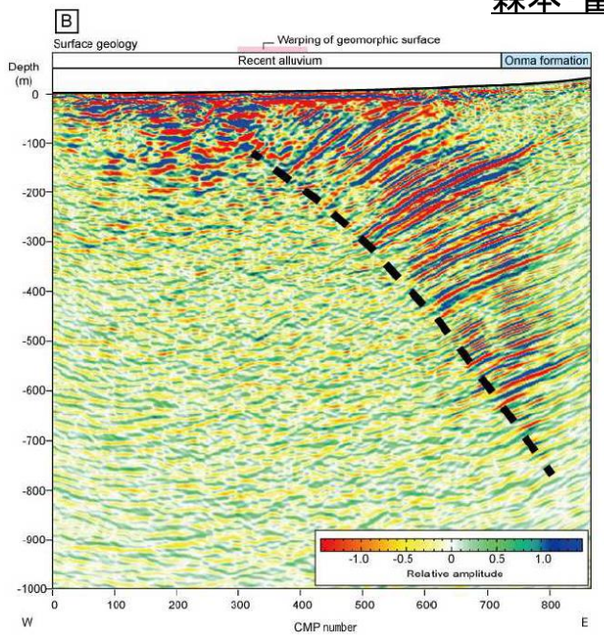
【地震調査委員会(2008b，2013a)】

○地震調査委員会(2013a)は，産業技術総合研究所(2008a)が実施した反射法弾性波探査結果などから，森本・富樫断層帯は東傾斜(約40～60°)の逆断層と推定している(右上図)。
○地震調査委員会(2008b)は，富山県(1999)が実施した浅層反射法探査結果などから，砺波平野断層帯西部は北西傾斜(約45～50°)の逆断層と推定している(右下図)。

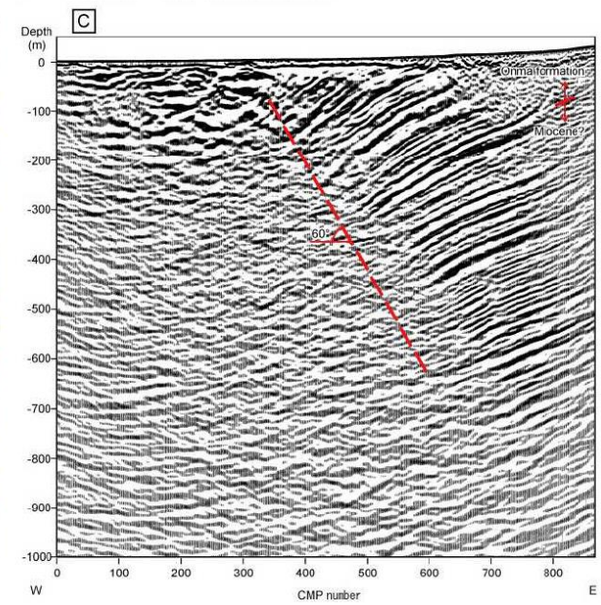


位置図
(活断層図(都市圏活断層図)(松多ほか，2016;堤ほか，2002，2003，2010;東郷ほか，1998;後藤ほか，2015，2020; 田力ほか，2019; 基図は地理院地図)に一部加筆)

森本・富樫断層帯



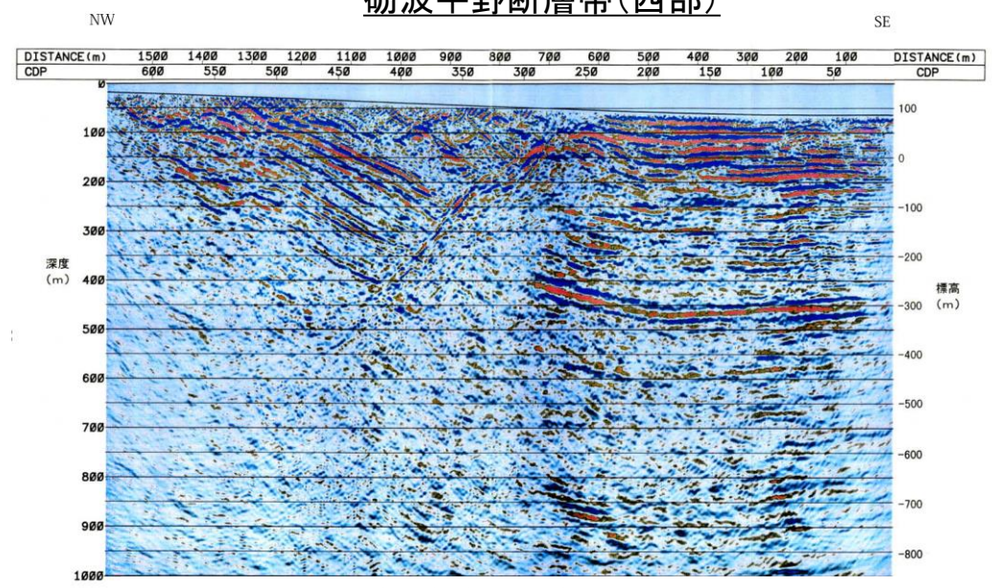
反射断面図(表層地質及び撓曲帯も併記)
(産業技術総合研究所(2008a)を地震調査委員会(2013a)が編集)



反射断面解釈図
(産業技術総合研究所，2008a)

反射法弾性波探査断面(地震調査委員会，2013a)

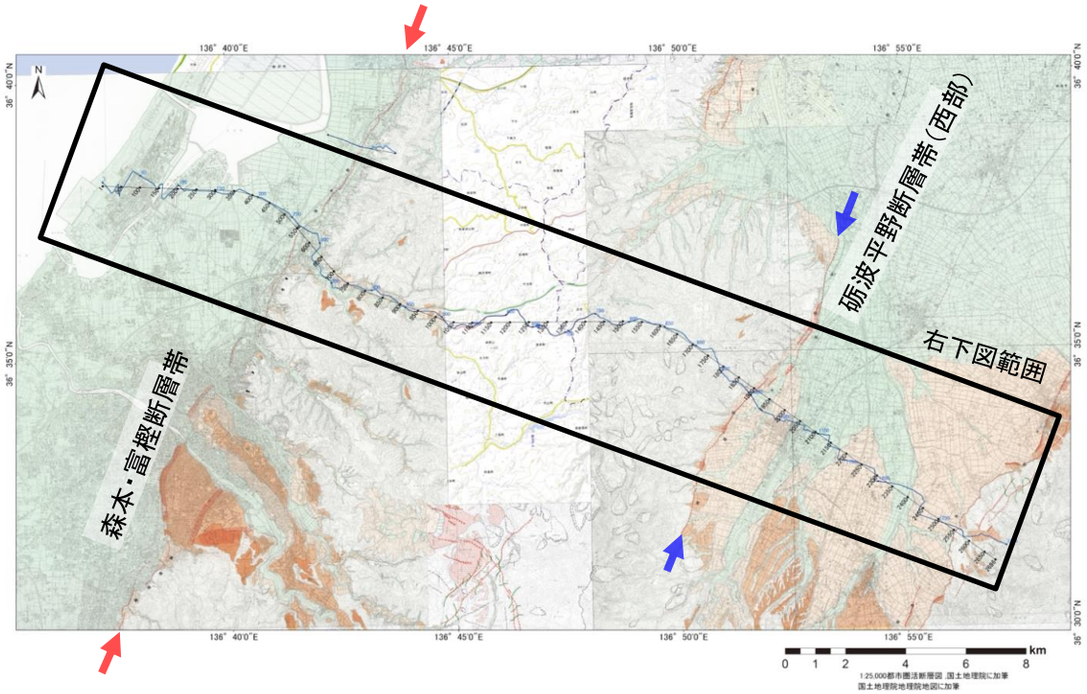
砺波平野断層帯(西部)



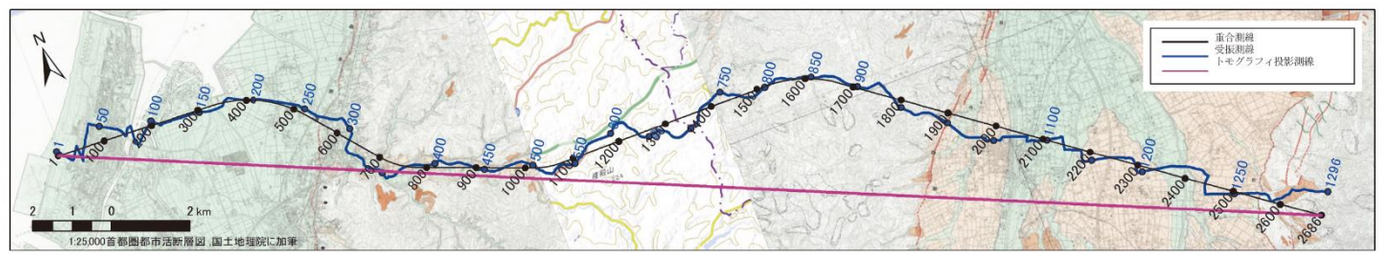
反射法探査断面(富山県，1999)

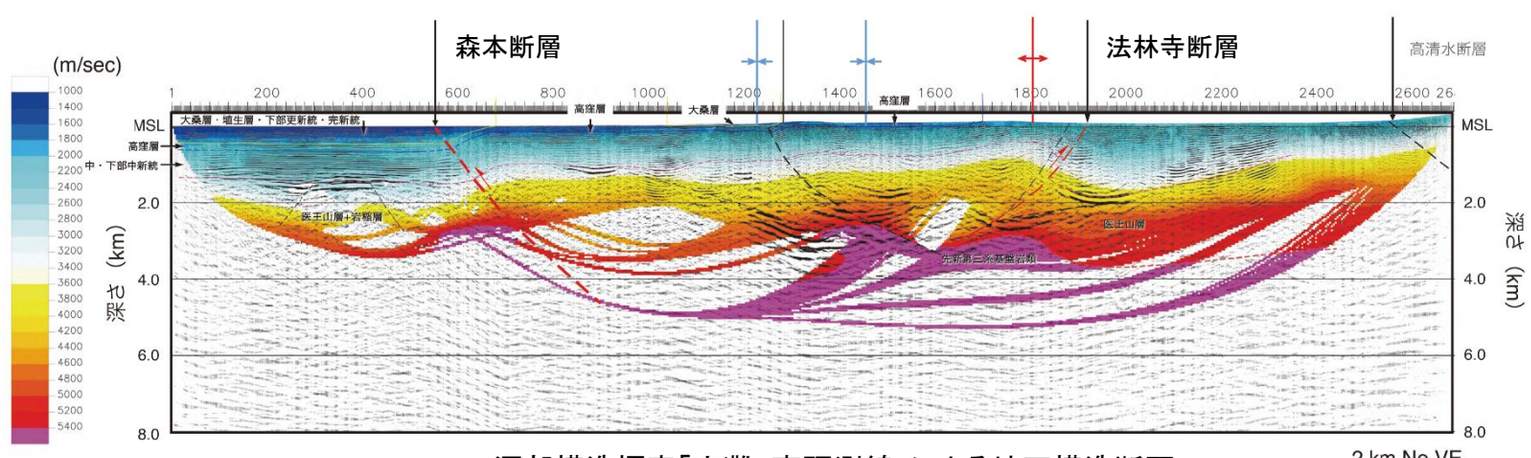
【文科省ほか（2024）】

○文科省ほか（2024）は，森本断層と法林寺断層を横断する反射法断面（内灘－南砺測線）から，法林寺断層は中角度・東傾斜であり，地下深部に延びる森本断層に収れんするとしている。



深部構造探査「内灘-南砺測線」の測線位置図
（文科省ほか（2024）に一部加筆）



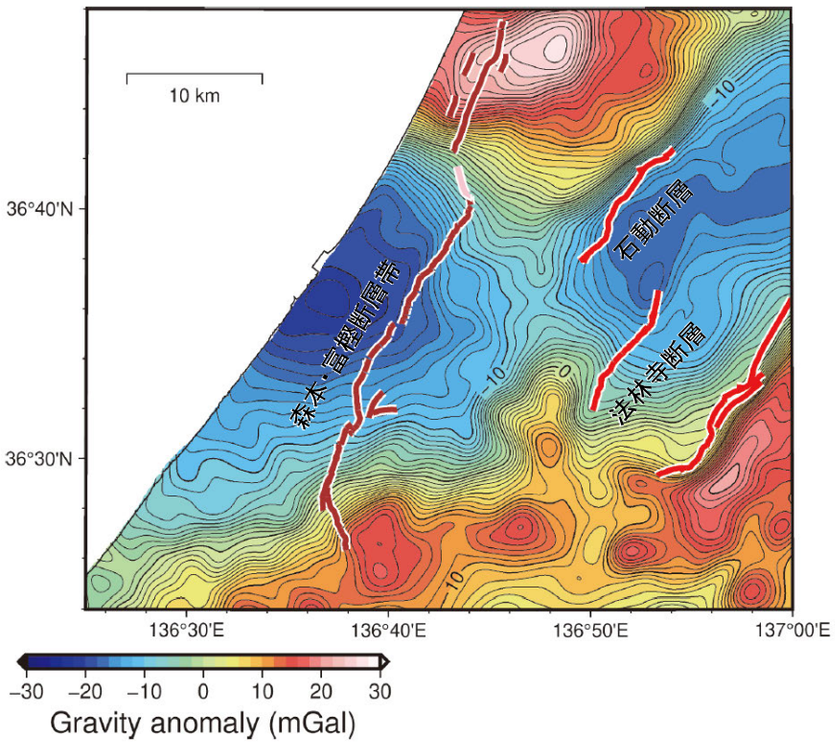


深部構造探査「内灘-南砺測線」による地下構造断面
（重合前時間マイグレーション深度断面図）
（文科省ほか（2024）に一部加筆）

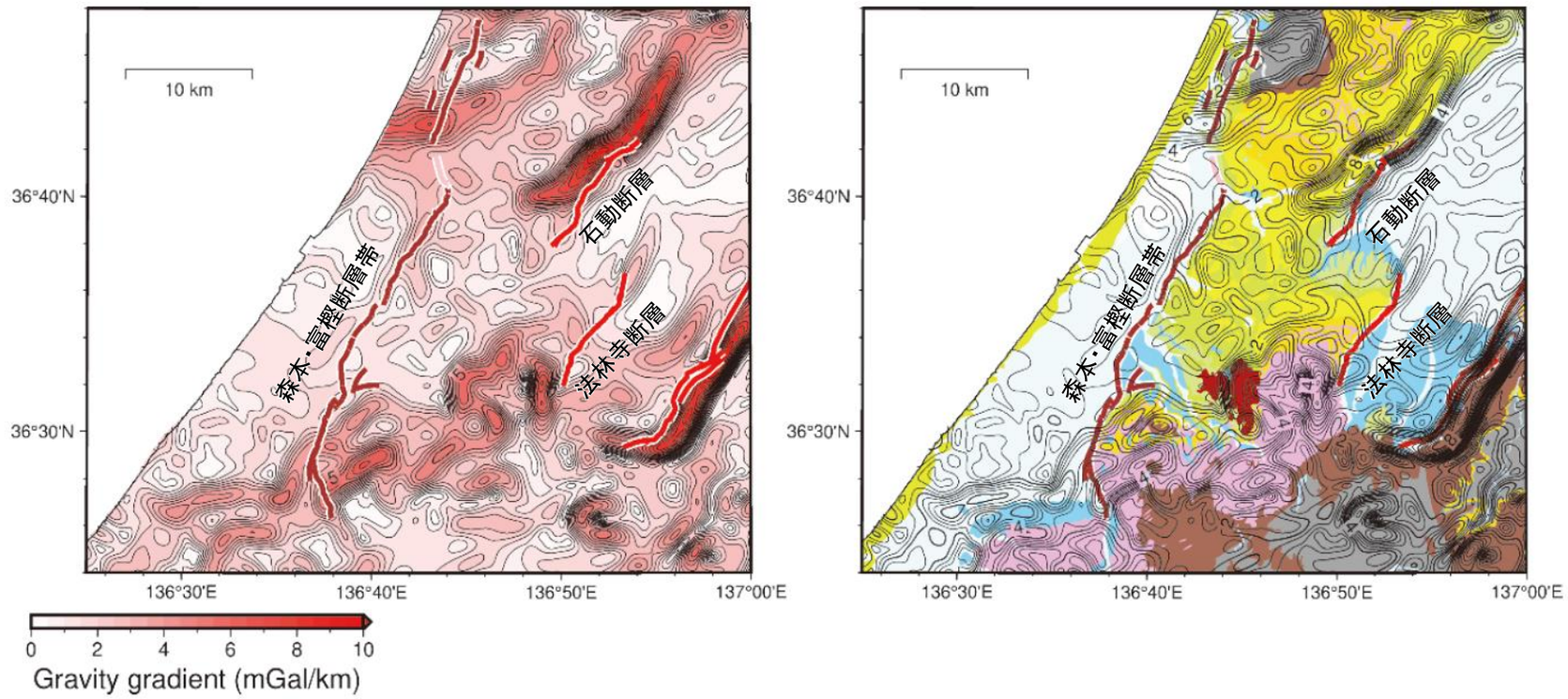
3.2.25(3)　森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）の同時活動の可能性の検討　－重力異常分布－

○文科省ほか（2024）は，森本・富樫断層帯の周辺域において，新規重力データを取得したうえで，森本・富樫断層帯や法林寺断層周辺の重力異常の特徴を整理しており，それによれば，森本・富樫断層帯は，金沢平野付近の低重力異常域に区画されるように位置しており，断層帯を境とするような重力異常の変化は明瞭ではないとされている。一方，砺波平野断層帯（西部）を構成する断層の内，石動断層は断層の走向方向に重力異常値が急変しているとしている。

○このことから，砺波平野断層帯（西部）の一部に対応する重力異常急変部は認められるが，森本・富樫断層帯に対応する構造は明瞭ではないことから，両断層の同時活動の可能性については明確に判断できない。



重力異常図
（遮断波長4kmのフィルター処理）
（文科省ほか（2024）に一部加筆）

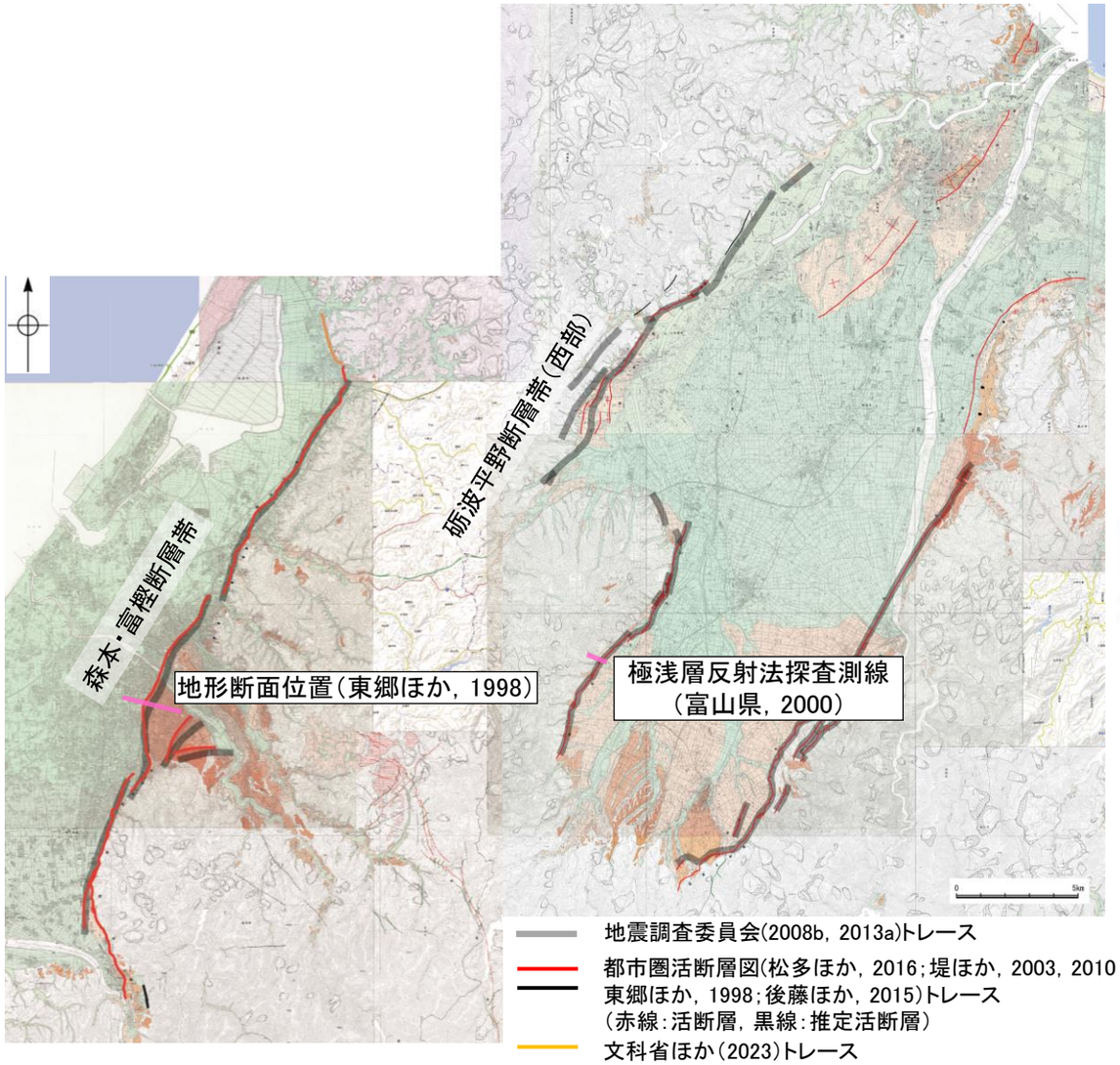


水平一次勾配
（遮断波長4kmのフィルター処理，右図は地質図と重ね合わせた図）
（文科省ほか（2024）に一部加筆）

3.2.25(4)　森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）の同時活動の可能性の検討　－平均変位速度－

○森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）について，文献調査による平均変位速度の比較を行った。
○地震調査委員会（2013a）は，東郷ほか（1998）及び池田ほか編（2002）が断層帯中央部付近で実施した地形調査結果等を踏まえ，森本・富樫断層帯の平均上下変位速度を概ね1m/千年であった可能性があるとしている。
○地震調査委員会（2008b）は，富山県（2000a）が南砺市法林寺で実施した極浅層反射法探査の結果等を踏まえ，砺波平野断層帯西部の平均上下変位速度を0.3-0.4m/千年程度以上と推定している。
○文科省ほか（2024）は，法林寺断層の平均上下変位速度は，明らかに森本断層に比べて小さいとし，反射法探査から推定した森本断層・法林寺断層の構造的な関係と整合的であるとしている。

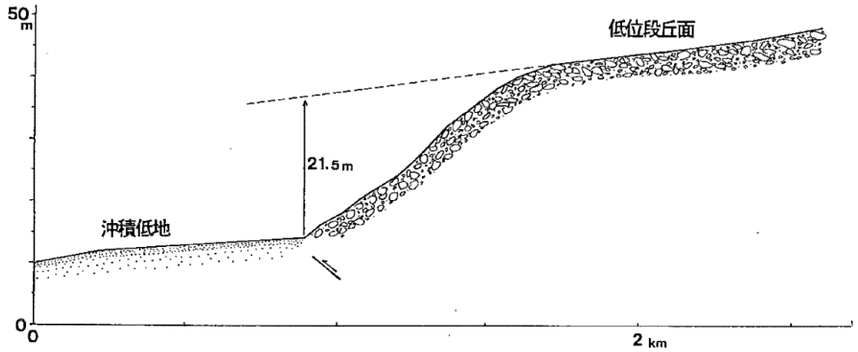
○文献調査の結果に基づく平均変位速度を比較した結果，砺波平野断層帯（西部）の平均変位速度は，森本・富樫断層帯に比べて明らかに小さい。



位置図

（活断層図(都市圏活断層図)(松多ほか，2016;堤ほか，2002，2003，2010;東郷ほか，1998;
後藤ほか，2015，2020; 田力ほか，2019; 基図は地理院地図)に一部加筆）

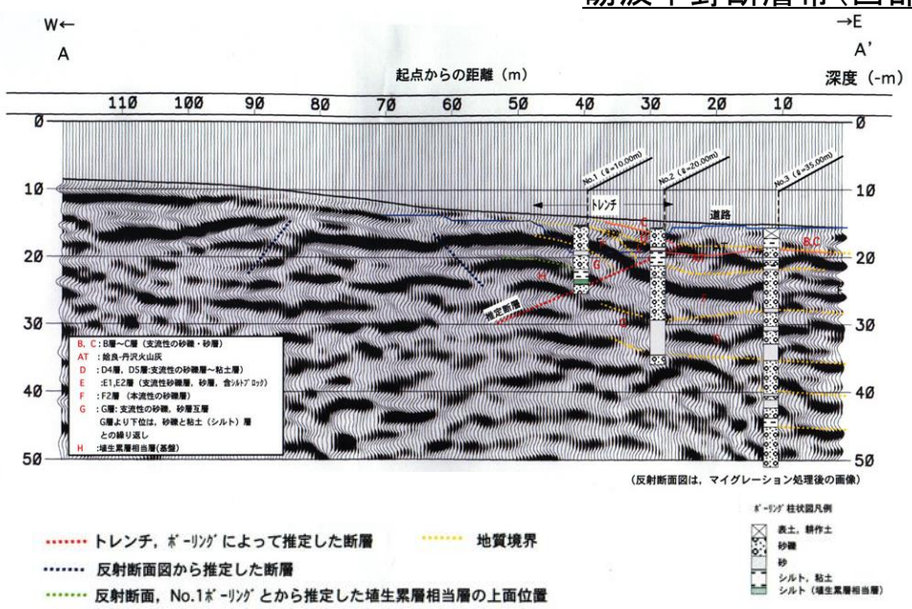
森本・富樫断層帯



犀川左岸で撓曲する低位段丘面の断面（東郷ほか，1998）

・東郷ほか（1998）及び池田ほか編（2002）は，断層帯中央部を構成する野町撓曲（野町断層）による低位段丘面Ⅰ（泉野面）の上下変位量を20m以上と見積もり，また同面の形成時期を約2万年前と推定し，上下方向の平均変位速度が1m/千年を上回っているとした（地震調査委員会，2013a）。

砺波平野断層帯（西部）



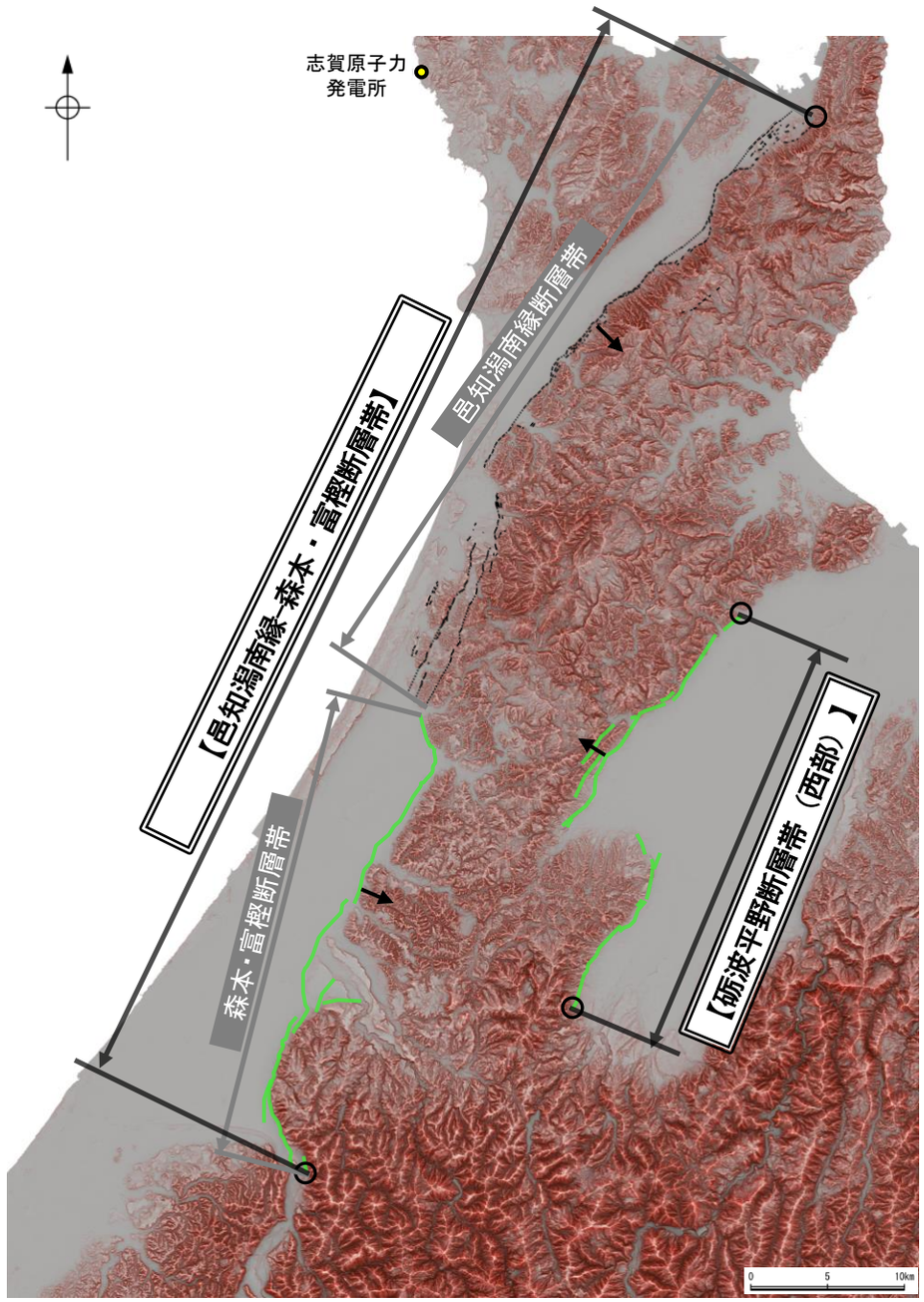
極浅層反射断面解釈図（富山県，2000a）

・富山県（2000）は，南砺市法林寺での極浅層反射の結果から法林寺断層の上下変位量と年代値を求めている。これによると，約3万3千年前に形成された地層で12m，約3万年前に形成された地層で9-10m，姶良Tn火山灰（約2万8千年前）で8.5-9.5mの上下変位をそれぞれ示している。したがって，平均上下変位速度は，それぞれ0.36m/千年，0.30-0.33m/千年及び0.3-0.34m/千年と求められる。ただし，本地域では断層は幅100-200mの撓曲帯を形成しているとされていることから，断層全体の平均上下変位速度は上記の数値以上になると考えられる（地震調査委員会，2008b）。

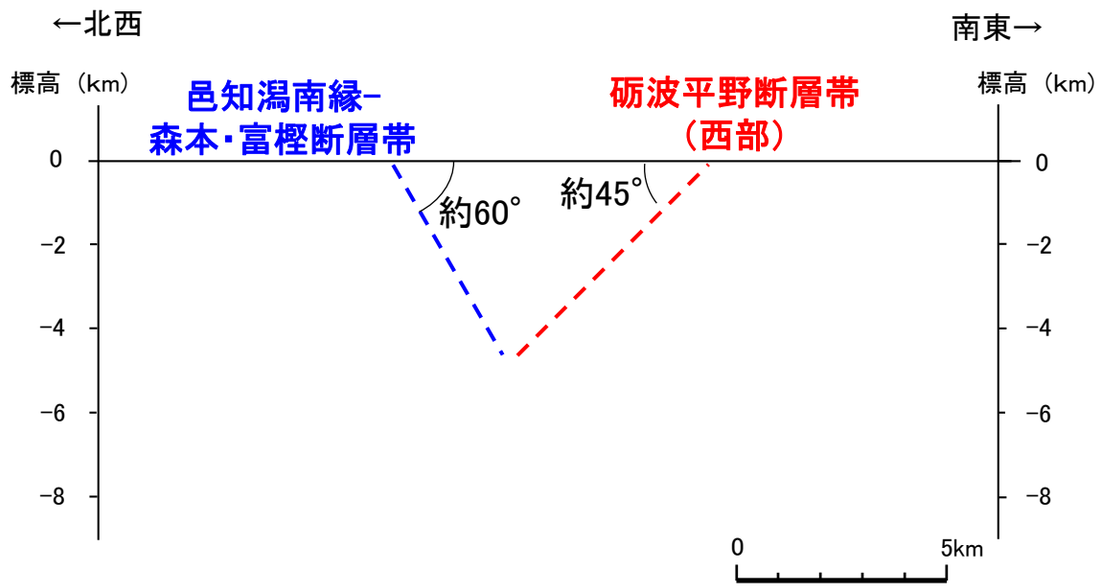
3.2.25(5)　同時活動する可能性のある断層の関連性の検討

○邑知潟南縁-森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）は，同時活動する可能性があると評価したことから，同時活動する可能性のある断層の関連性の検討を行った。
○地表での断層位置・形状を確認した結果，両断層は断層トレースが並走する関係にある。
○両断層の地下深部形状を確認した結果，邑知潟南縁-森本・富樫断層帯は東傾斜（傾斜角約30～60°），砺波平野断層帯（西部）は北西傾斜（約45～50°）であり，地下で近づく関係にある。

○断層位置・形状を確認した結果，邑知潟南縁-森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）は，断層トレースが並走し，断層面が地下で近づく関係にあることから，一方の断層のみが震源断層として活動する（主断層－副断層の関係）と判断し，**主断層のみを震源断層として考慮する（連動に該当しない）**こととする。



赤色立体地図※



両断層の地下深部形状

・邑知潟南縁-森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）は，地下で近づく関係にある。

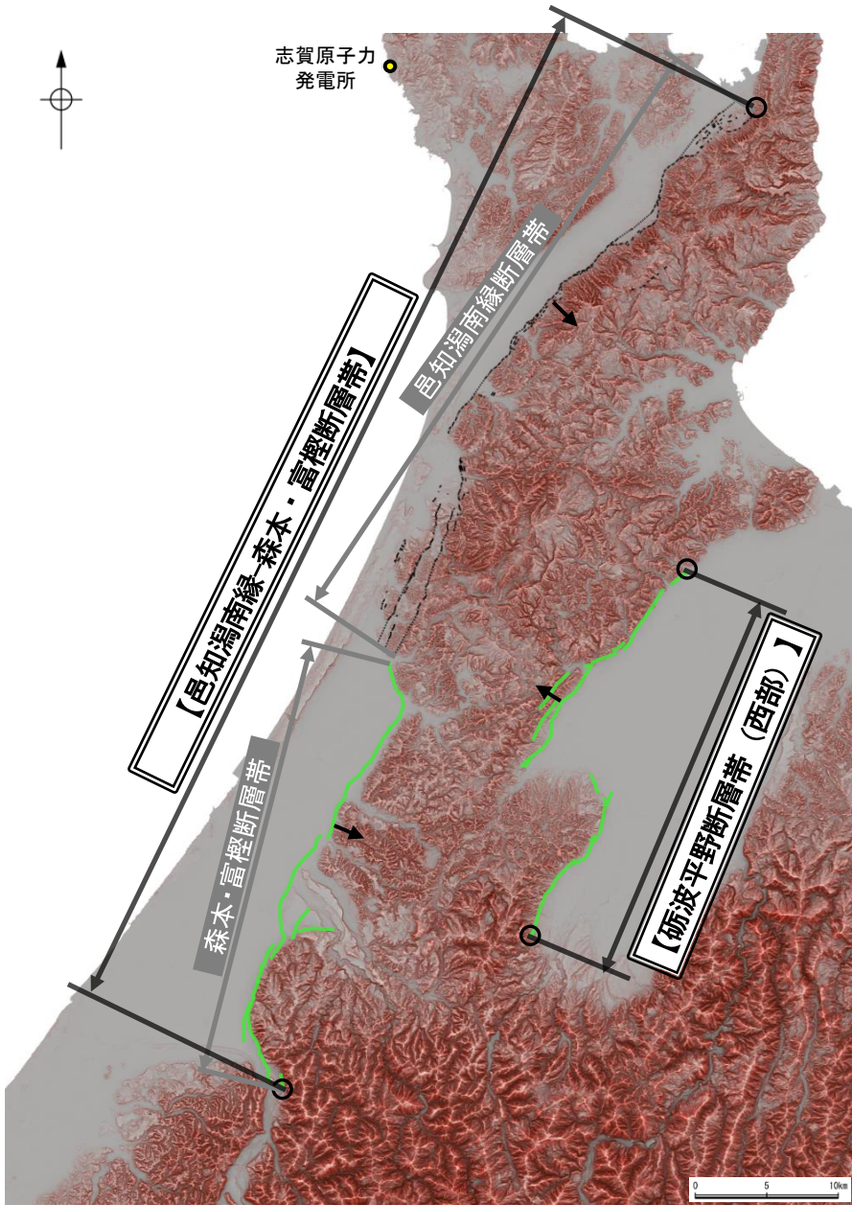
邑知潟南縁断層帯断層位置
推定区間
断層位置（文献の断層トレースを基に評価した断層位置）
断層端点
傾斜方向

※:「国土地理院タイル：赤色立体地図」背景データとして使用し，一部加筆
「赤色立体地図ⓒアジア航測株式会社」

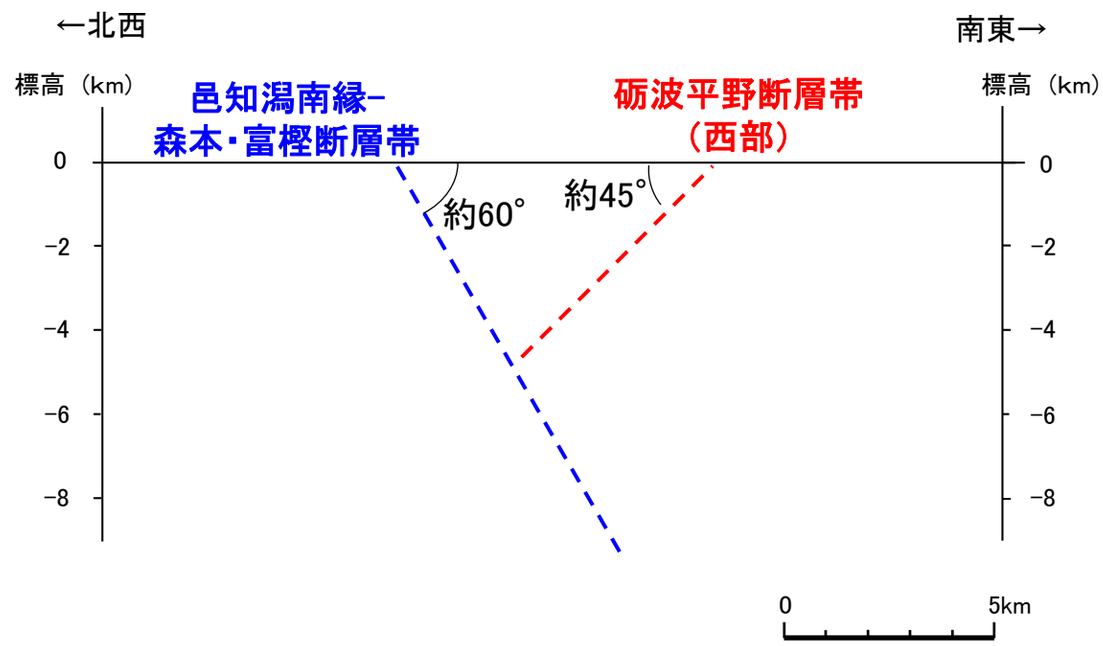
3.2.25(6)（参考）邑知潟南縁−森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）のいずれが主断層であるかの検討

○連動の検討の結果，邑知潟南縁−森本・富樫断層帯と砺波平野断層帯（西部）は，主断層のみを震源断層として考慮することとしたことから，いずれが主断層であるかの検討を行った。
○邑知潟南縁−森本・富樫断層帯の長さは約74km，砺波平野断層帯（西部）の長さは約26kmであり，断層長さは邑知潟南縁−森本・富樫断層帯の方が大きい（P.505，第1328回審査会合　資料1−1　P.324）。
○文科省ほか（2024）は，森本断層と法林寺断層を横断する反射法断面（内灘ー南砺測線）から，法林寺断層は地下深部に延びる森本断層に収れんするとしている（P.520）。
○砺波平野断層帯（西部）の平均変位速度は，森本・富樫断層帯に比べて明らかに小さい（P.522）。

○検討の結果，断層長さは砺波平野断層帯（西部）より邑知潟南縁ー森本・富樫断層帯の方が長く，文科省ほか（2024）の反射法断面から，砺波平野断層帯（西部）が森本・富樫断層帯に収れんすると評価されていることや砺波平野断層帯（西部）の平均変位速度は，森本・富樫断層帯に比べて明らかに小さいことから，邑知潟南縁ー森本・富樫断層帯が主断層，砺波平野断層帯（西部）が副断層であると判断した。



赤色立体地図※



両断層の地下深部形状

・邑知潟南縁ー森本・富樫断層帯が主断層と判断される。

邑知潟南縁断層帯断層位置
推定区間
断層位置（文献の断層トレースを基に評価した断層位置）
断層端点
傾斜方向

※：「国土地理院タイル：赤色立体地図」背景データとして使用し，一部加筆
「赤色立体地図ⓒアジア航測株式会社」

3.2.26　酒見断層と海士岬沖断層帯の連動の検討結果

3.2.27　能登島半の浦断層帯と能都断層帯の連動の検討結果

3.2.28　能都断層帯と滝ノ坊断層の連動の検討結果

3.2.29　能都－滝ノ坊断層帯と富山湾西側海域断層の連動の検討結果

3.2.30　砺波平野断層帯（西部）と御母衣断層の連動の検討結果

3.2.31　砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯の連動の検討結果

3.2.26　酒見断層と海士岬沖断層帯の連動の検討結果

連動の検討

○検討対象とする断層の組合せとして抽出した酒見断層と海士岬沖断層帯について，「当社の連動評価の検討方法」に基づき，同時活動の可能性の検討を行った。検討結果は以下の通り。

赤字：同時活動する可能性を示唆する
青字：同時活動しない可能性を示唆する

＜同時活動の可能性の検討＞

検討内容			検討結果
地形及び地質構造	文献調査(A)		①活断層研究会（1991）は，酒見断層に対応する断層を示しているものの，海士岬沖断層帯に対応する断層を図示していない（**補足資料3.2-26(2)**P. 3.2-26-4）。 ②地震調査委員会（2025）は，海士岬沖断層帯に対応する断層（海士岬沖東断層）を示しているが，酒見断層に対応する断層トレースを示しておらず，１つの起震断層として設定していない（**補足資料3.2-26(2)**P. 3.2-26-5）。
	地形調査(B)		③酒見断層は，最高位段丘面群及び高位段丘面群の分布域に東向きの低崖等が連続して認められる西側隆起の逆断層である（P.169）。
	地球物理学的調査	反射法地震探査(C)	④反射法地震探査の結果，酒見断層は花崗岩と推定される基盤岩の上面は，丘陵下部では不明瞭ながら段階的に高度を上げているように推定されることから，断層が伏在する可能性がある（P.177）。
		海上音波探査(D)	⑤海士岬沖断層帯はD層が急に落ち込む位置に西落ちの変形，隆起帯内に西落ちの変位が認められ，南東傾斜の逆断層と推定される。中間部の記録ではB_1層以上の変形は認められないものの，南部の記録ではB_1層以上に変形が認められる（第1328回審査会合　資料1-1　P.92）。 ⑥酒見断層と海士岬沖断層帯の地表トレースは，向かい合い近接して分布する（**補足資料3.2-26(2)**P. 3.2-26-6）。 ⑦酒見断層は西傾斜（高角）の逆断層，海士岬沖断層帯は南東傾斜（約60°）の逆断層で，断層面の傾斜方向は異なり，地下で近づく関係にある（**補足資料3.2-26(2)**P. 3.2-26-6）。
		重力異常分布(E)	⑧酒見断層に沿って北側に高重力域が認められるが，海士岬沖断層帯は等重力線にほぼ直交しており，同時活動の可能性については明確に判断できない（**補足資料3.2-26(2)**P. 3.2-26-7）。
同時活動の可能性の評価			**［評価結果］** ・検討の結果，酒見断層と海士岬沖断層帯の同時活動を考慮した文献はない（①，②）ものの，向かい合い近接して分布（⑥）し，地下で近づく関係にある（③，④，⑤，⑦）。 ・以上のことを踏まえ，総合的に評価した結果，**酒見断層と海士岬沖断層帯は，同時活動する可能性を否定できない**ことから，**１つの起震断層として設定する。**

＜同時活動する可能性のある断層の関連性の検討＞

○酒見断層と海士岬沖断層帯は，１つの起震断層として設定すると評価したことから，同時活動する可能性のある断層の関連性の検討を行った（**補足資料3.2-26(3)**P. 3.2-26-8）。

○断層形状・位置関係を確認した結果，酒見断層と海士岬沖断層帯は並走し，地下で近づく関係にあることから，地震調査委員会による評価事例（P.437）を踏まえると，一方の断層のみが震源断層として活動する（主断層－副断層の関係）と判断し，**主断層のみを震源断層として考慮する（連動に該当しない）**こととする。

断層モデルの設定方法

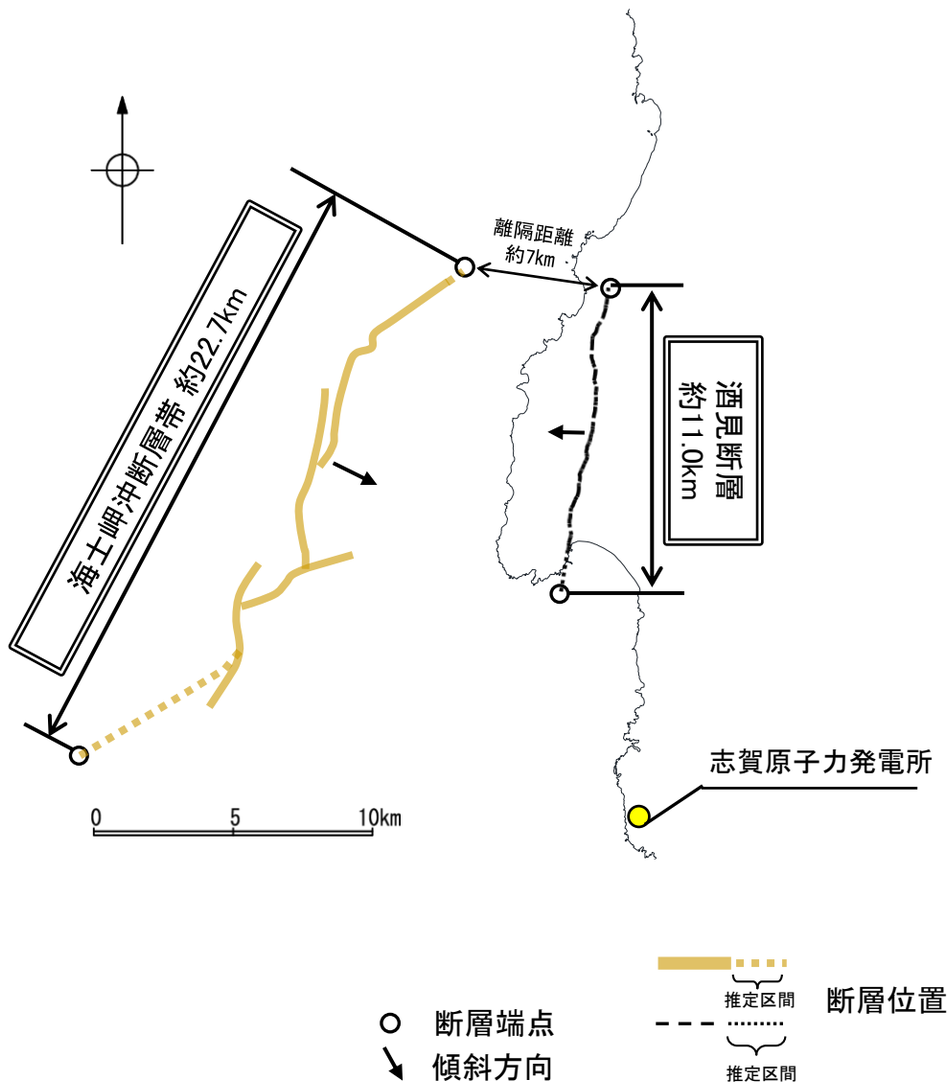
＜参考＞

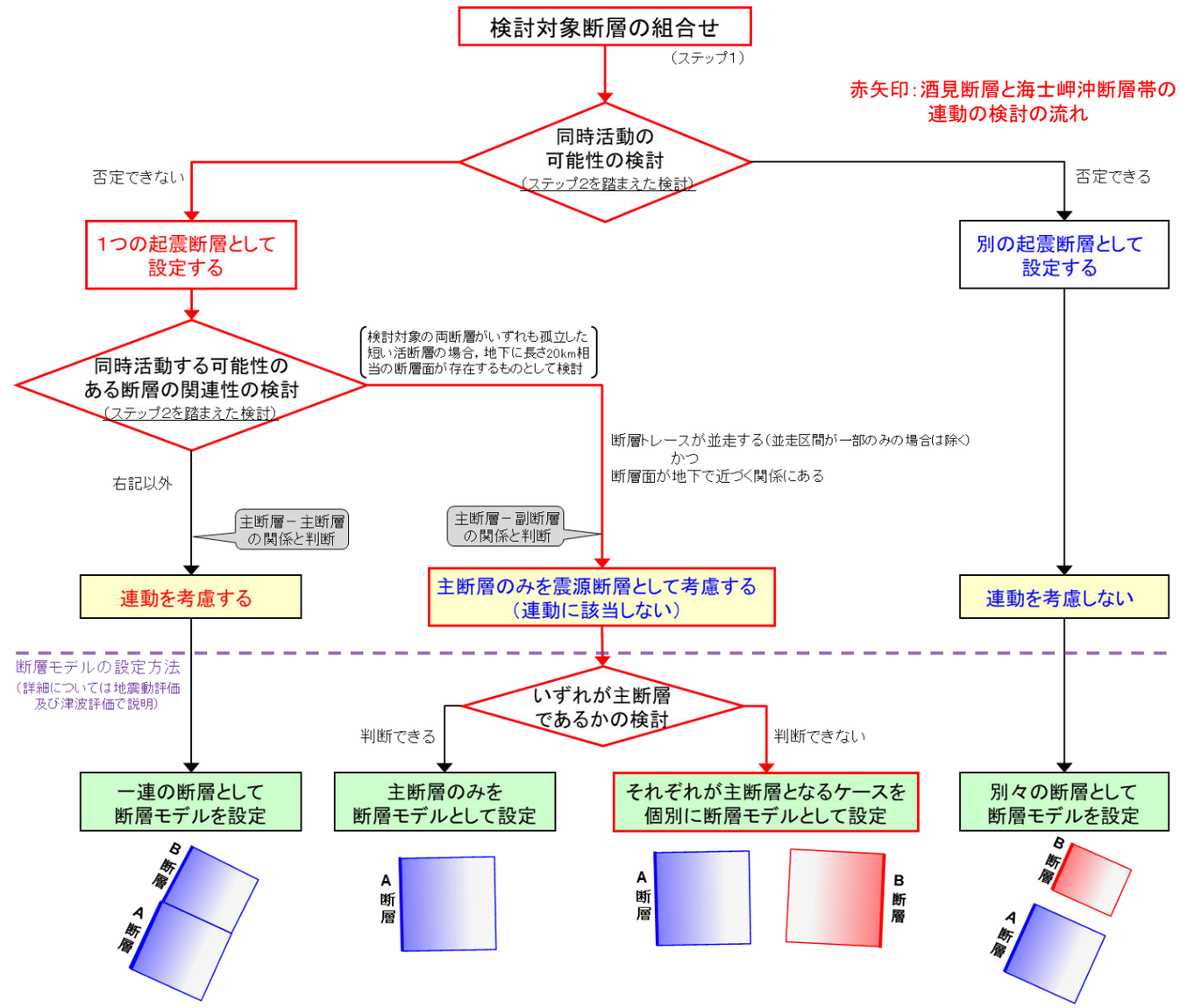
○酒見断層と海士岬沖断層は主断層のみを震源断層として考慮することとしたことから，いずれが主断層であるかの検討を行った（**補足資料3.2-26(4)**P. 3.2-26-9）。

＜いずれが主断層であるかの検討＞

検討内容			検討結果
地形及び地質構造	地形調査	リニアメント・変動地形判読(a)	①リニアメント・変動地形の判読及び海上音波探査の結果，酒見断層の長さは約11.0kmである（P.169）
	地球物理学的調査	海上音波探査(b)	②海上音波探査及び文献調査の結果，海士岬沖断層帯の長さは約22.7kmである（第1328回審査会合　資料1-1　P.92）。
断層の活動履歴		平均変位速度(c)	③酒見断層の平均変位速度は不明である。 ④海上音波探査の結果，海士岬沖断層帯の平均変位速度は0.103m／千年と推定される（第1328回審査会合　資料1-1　P.472）。
評価			**［評価結果］** ・検討の結果，断層長さは酒見断層より海士岬沖断層帯の方が長いものの，酒見断層の平均変位速度が不明であることから，酒見断層と海士岬沖断層帯のいずれが主断層であるかは明確に判断できない。 ・以上のことから，断層モデルについては，酒見断層と海士岬沖断層帯のそれぞれが主断層となるケースを個別に設定することとする。

【酒見断層と海士岬沖断層帯の連動の検討結果（位置図，連動評価フロー）】





3.2.27　能登島半の浦断層帯と能都断層帯の連動の検討結果

連動の検討

○検討対象とする断層の組合せとして抽出した能登島半の浦断層帯と能都断層帯について，「当社の連動評価の検討方法」に基づき，同時活動の可能性の検討を行った。検討結果は以下の通り。

＜同時活動の可能性の検討＞

赤字：同時活動する可能性を示唆する
青字：同時活動しない可能性を示唆する

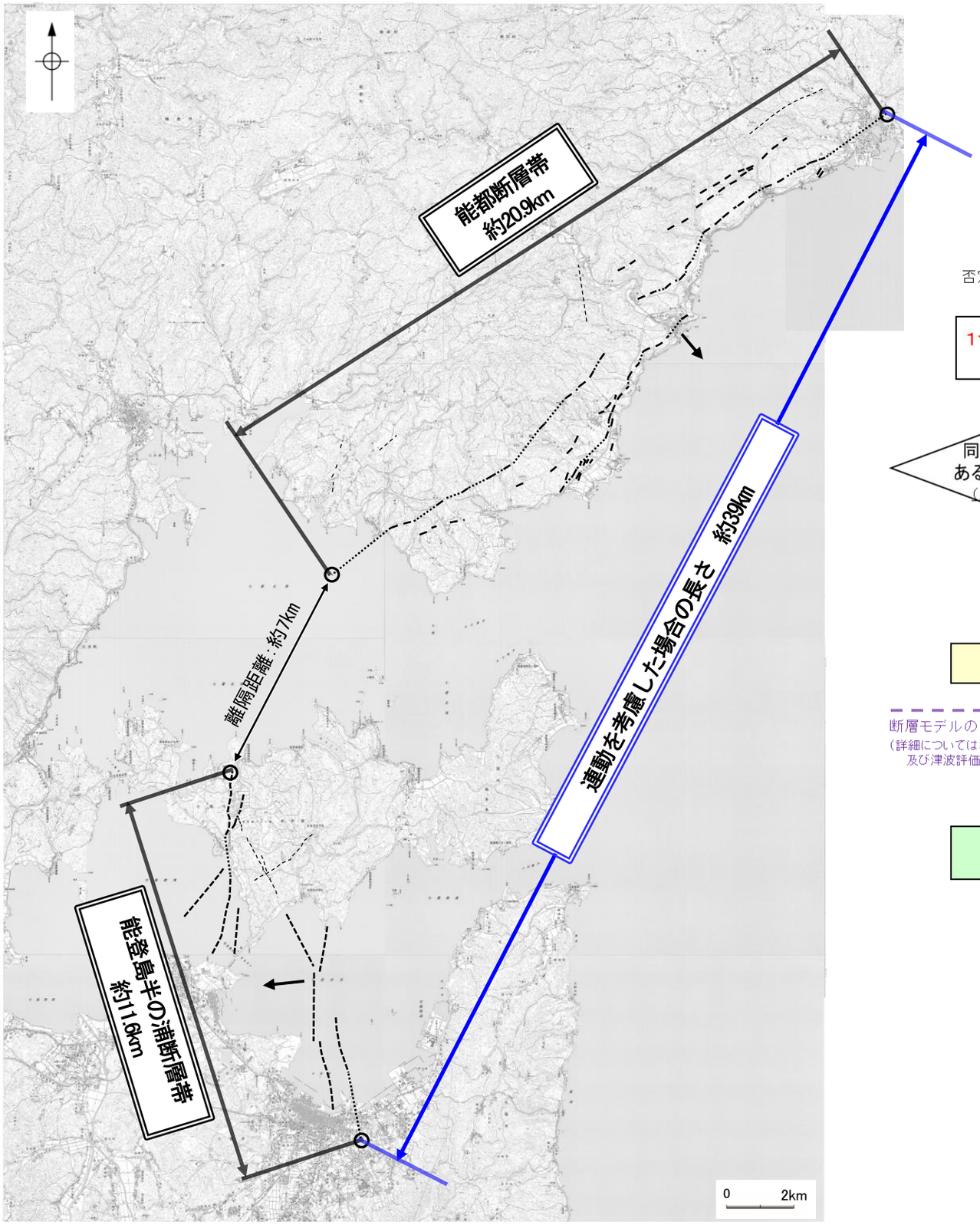
検討内容				検討結果
地形及び地質構造	文献調査(A)			①能登島半の浦断層帯と能都断層帯の同時活動を考慮した文献はない（**補足資料3.2-27**(2)P. 3.2-27-4）。
	文献調査(A)	地質調査	断層面の傾斜方向(B)	②太田ほか（1976）によれば，半の浦東断層の断層崖基部に，南北走向で西に60°傾斜する断層の露頭が記載されている（**補足資料3.2-27**(2)P. 3.2-27-4）。
	地形調査(C)			③空中写真判読の結果，能登島半の浦断層帯の陸域部は主に丘陵地内に崖等が認められる西側隆起の断層帯である（**補足資料3.2-27**(2)P.3.2-27-5）。 ④空中写真判読の結果，能都断層帯は丘陵地内に急崖等が認められる南東側隆起の断層帯である（**補足資料3.2-27**(2)P.3.2-27-5）。 ⑤能登島半の浦断層帯と能都断層帯の地表トレースは，近接して分布する（**補足資料3.2-27**(2)P.3.2-27-5）。 ⑥能登島半の浦断層帯の北端では，高位段丘Ⅰ面に変位，変形は認められず，能都断層帯の南西端付近では，断層延長において中位段丘Ⅰ面に高度差が認められない（**補足資料3.2-27**(2)P.3.2-27-6）。
	地質調査		断層面の傾斜方向(D)	⑦能登島半の浦断層帯については，半の浦西リニアメント東方では西傾斜で西上がりの断層露頭が確認され，半の浦西リニアメントと関連する構造の可能性がある（**補足資料3.2-27**(2)P.3.2-27-7）。 ⑧能都断層帯については，露頭で44°で南東傾斜する断層が確認される（**補足資料3.2-27**(2)P.3.2-27-7）。
	地球物理学的調査	海上音波探査	断層間の地質構造の連続性(E)	⑨能登島半の浦断層帯と能都断層帯の間の海上音波探査記録を確認した結果，両断層帯間の測線（L-27～L-22測線）からは，連続性のある断層等は認められず，両断層帯は連続しない（**補足資料3.2-27**(2)P.3.2-27-8～10）。
	地球物理学的調査	重力異常分布(F)		⑩能都断層帯に沿って，大局的に北西側の重力異常値が高い傾向が認められる。しかし，能登島半の浦断層帯は，対応する重力異常急変部は認められず，両断層の同時活動の可能性については，明確に判断できない（**補足資料3.2-27**(2)P.3.2-27-11）。
同時活動の可能性の評価				**［評価結果］** ・検討の結果，能登島半の浦断層帯と能都断層帯は，近接して分布する（⑤）ものの，同時活動を考慮した文献はない（①）。また，能登島半の浦断層帯と能都断層帯は，断層面の傾斜方向が異なり，地下深部で断層面が離れていく関係にある（②，⑦，⑧）。さらに，上盤の隆起が反対側に分布（③，④）し，両断層帯で地形的な連続性は認められず（⑥），海上音波探査の結果からは，両断層間に連続する構造は推定されない（⑨）。 ・以上のことを踏まえ，能登島半の浦断層帯と能都断層帯は**同時活動する可能性はないと判断される**ことから，**別の起震断層として設定し，連動を考慮しない**。

断層モデルの設定方法

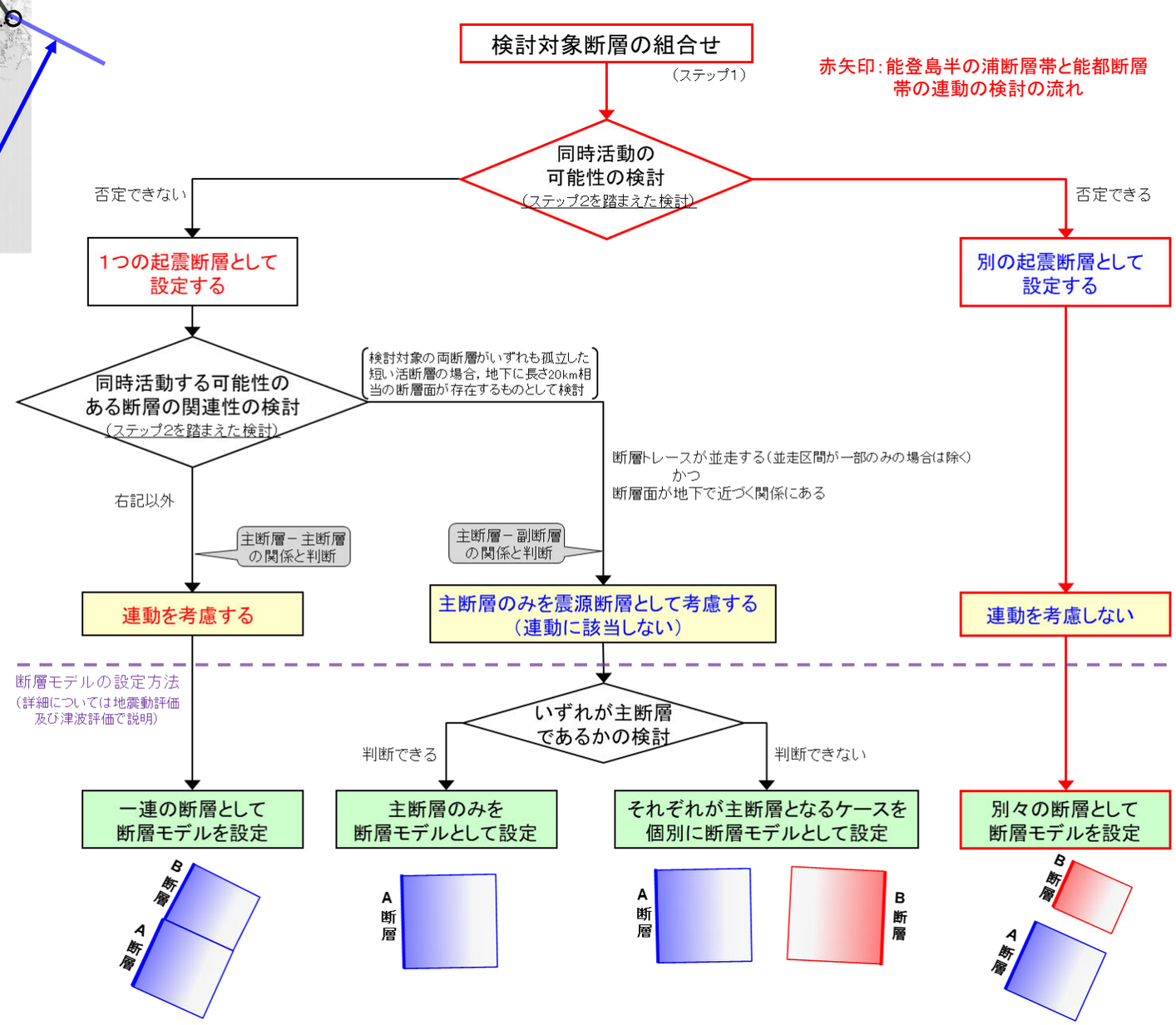
＜参考＞

○連動の検討の結果，能登島半の浦断層帯と能都断層帯の連動を考慮しないことから，断層モデルについては，能登島半の浦断層帯と能都断層帯を別々の断層として設定することとする。

【能登島半の浦断層帯と能都断層帯の連動の検討結果（位置図，連動評価フロー）】



位置図



断層端点　傾斜方向　推定区間　断層位置（細線は副次的な断層と評価したもの）

3.2.28　能都断層帯と滝ノ坊断層の連動の検討結果

連動の検討

○検討対象とする断層の組合せとして抽出した能都断層帯と滝ノ坊断層について，「当社の連動評価の検討方法」に基づき，同時活動の可能性の検討を行った。検討結果は以下の通り。

＜同時活動の可能性の検討＞

赤字：同時活動する可能性を示唆する
青字：同時活動しない可能性を示唆する

検討内容			検討結果
地形及び地質構造	文献調査(A)		①松田ほか(2000)は，起震断層として，活断層研究会(1991)の白坂山東方の断層，矢波山断層，古君断層，鹿波断層及び鹿波南断層から構成された能都断層帯を示している。また，「活断層データベース」(産業技術総合研究所地質総合センター)は，これとほぼ同じ位置に，能登海岸活動セグメントを示し，一般走向N40°E，一般傾斜60°E，東側隆起の逆断層と記載している(補足資料3.2-28(2)P. 3.2-28-5)。 ②活断層研究会(1991)は，能都断層帯の北東方に，滝の坊断層(確実度Ⅰ，活動度C，長さ5km，NNE走向，東傾斜)及び松波断層(確実度Ⅰ，活動度C，長さ1.5km，NE走向，傾斜は未記載)を示している。また，尾崎(2010)は，これらとほぼ同じ位置に，南東傾斜の実在活逆断層として，滝ノ坊断層及びその東方の断層を示している(補足資料3.2-28(2)P. 3.2-28-5)。 ③今泉ほか(2018)は，能都断層帯と滝ノ坊断層とほぼ同じ位置に分布する活断層及び推定活断層について，珠洲-穴水断層帯として一連の断層帯と記載している(補足資料3.2-28(2)P. 3.2-28-5)。
		地形調査(B)	④今泉ほか(2018)によれば，滝ノ坊断層は，丘陵地内に逆向き低断層崖として認められる南東側隆起の逆断層である(補足資料3.2-28(2)P. 3.2-28-5)。
	地形調査(C)		⑤空中写真判読の結果，能都断層帯は丘陵地内に急崖等が認められる南東側隆起の断層帯である(補足資料3.2-28(2)P. 3.2-28-8)。 ⑥能都断層帯の北東端付近では，矢波山リニアメントの北東方延長の能登町宇出津付近に分布する高位段丘面及び中位段丘Ⅰ面には，北西側低下の傾向は認められない(補足資料3.2-28(2)P. 3.2-28-9)。
	地質調査(D)		⑦能都断層帯と滝ノ坊断層の地表トレースは，ほぼ一線に近接して分布する(補足資料3.2-28(2)P. 3.2-28-10)。 ⑧能都断層帯は，漸新世の高洲山層及び前期中新世の縄又層の分布域に位置する(補足資料3.2-28(2)P. 3.2-28-10)。 ⑨滝ノ坊断層は，漸新世の高洲山層，前期中新世の合鹿層，神和住層及び馬緤層，宝立山層の分布域に位置する(補足資料3.2-28(2)P. 3.2-28-10)。
		断層面の傾斜方向(E)	⑩能都断層帯については，露頭で44°で南東傾斜する断層が確認される(補足資料3.2-28(2)P. 3.2-28-10)。
	地球物理学的調査	重力異常分布(F)	⑪重力探査結果より作成したブーゲー異常図から，能都断層帯に沿って，大局的に北西側の重力異常値が高い傾向が認められるが，断層と重力異常の対応は明瞭ではない。また，滝ノ坊断層についても，西の重力異常値が高い傾向が認められるが，断層と重力異常の対応は明瞭ではない。以上より，両断層帯の連動の可能性については明確に判断できない(補足資料3.2-28(2)P. 3.2-28-11)。
同時活動の可能性の評価			**[評価結果]** ・検討の結果，能都断層帯と滝ノ坊断層は，地形的な連続性は認められない(⑥)ものの，走向・傾斜が類似し，両断層はともに主に南東側隆起の変位センスを示す短い断層群からなり，ほぼ一線に近接して分布している(①，②，④，⑦，⑩)。また，両断層を一連の断層帯としている文献がある(③)。 ・以上のことを踏まえ，総合的に評価した結果，**能都断層帯と滝ノ坊断層は同時活動する可能性が否定できない**ことから，**1つの起震断層として設定する**。

＜同時活動する可能性のある断層の関連性の検討＞

○能都断層帯と滝ノ坊断層は，1つの起震断層として設定すると評価したことから，同時活動する可能性のある断層の関連性の検討を行った(補足資料3.2-28(3)P. 3.2-28-12)。

○断層形状・位置関係を確認した結果，能都断層帯と滝ノ坊断層は，断層トレースが並走せず，両断層がともに震源断層として活動する(主断層－主断層の関係)と判断し，**両断層の連動を考慮する**。
○両断層の連動を考慮した結果，「能都－滝ノ坊断層帯」として，走向がNE-SW方向，南東傾斜(44°)の逆断層と評価した。
○断層長さは，滝ノ坊断層の北東端から能都断層帯の南西端までの約30km(26.5km)※区間を評価した(次頁)。

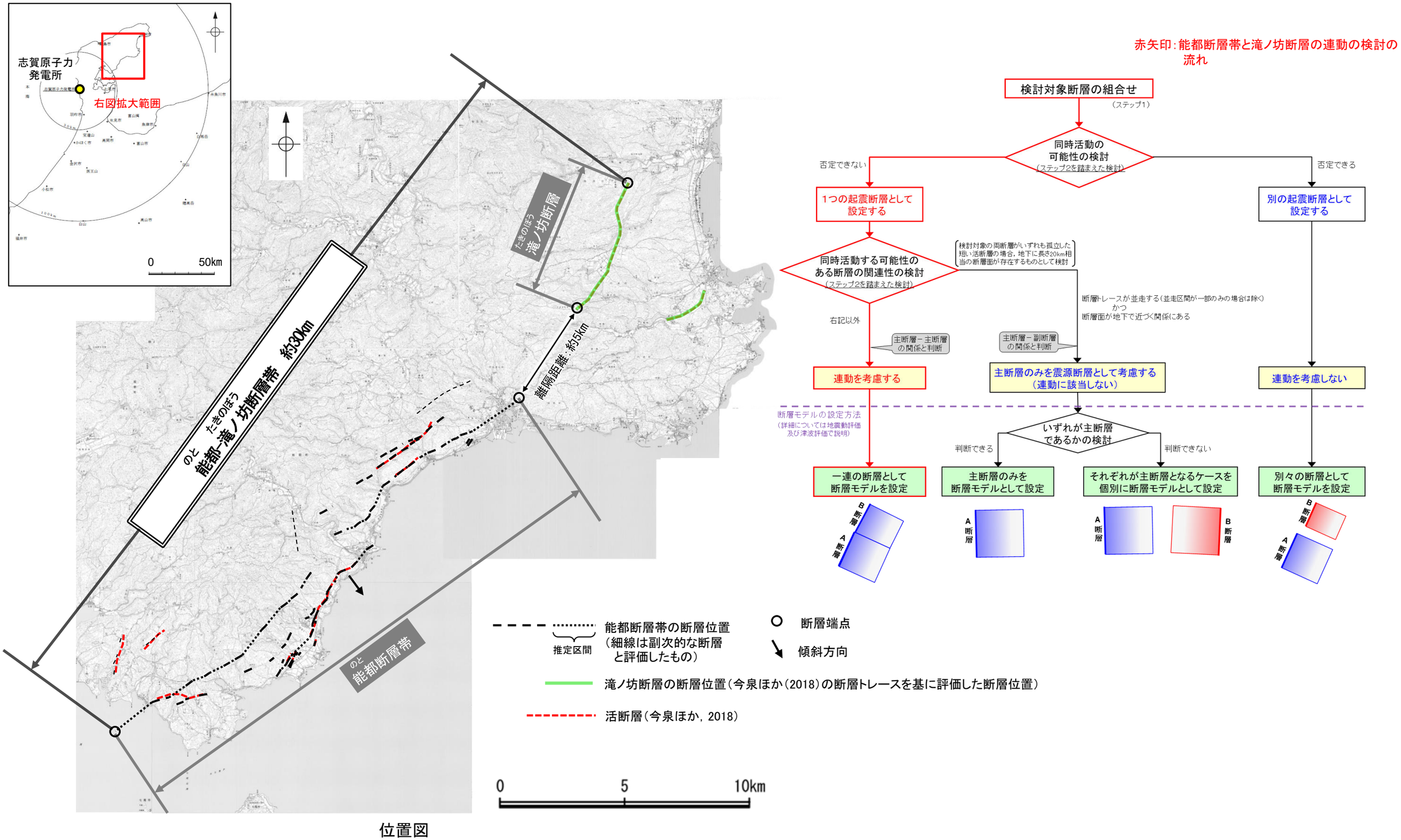
※括弧内の長さは，能都断層帯の長さ(20.9km)に，滝ノ坊断層の長さ(今泉ほか(2018)を図読した5.6km)を足し合わせた値を記載している。

断層モデルの設定方法

＜参考＞

○連動の検討の結果，能都断層帯と滝ノ坊断層の連動を考慮することから，断層モデルについては，能都断層帯と滝ノ坊断層を一連の断層として設定することとする。

【能都断層帯と滝ノ坊断層の連動の検討結果（位置図，連動評価フロー）】



位置図

3.2.29　能都-滝ノ坊断層帯と富山湾西側海域断層の連動の検討結果

連動の検討

○検討対象とする断層の組合せとして抽出した能都-滝ノ坊断層帯と富山湾西側海域断層について，「当社の連動評価の検討方法」に基づき，同時活動の可能性の検討を行った。検討結果は以下の通り。

＜同時活動の可能性の検討＞

赤字：同時活動する可能性を示唆する
青字：同時活動しない可能性を示唆する

検討内容			検討結果
地形及び地質構造	文献調査(A)		①活断層研究会（1991）は，能都-滝ノ坊断層帯及び富山湾西側海域断層に対応する断層を示しているものの，これらの同時活動を考慮していない（補足資料3.2-29(2)P. 3.2-29-4）。 ②地震調査委員会（2025）は，富山湾西側海域断層に対応する断層（七尾湾東方断層帯，飯田海脚南縁断層）を示しているが，能都-滝ノ坊断層帯に対応する断層トレースを示しておらず，１つの起震断層として設定していない（補足資料3.2-29(2)P. 3.2-29-5）。
	地形調査(B)		③能都断層帯は，逆向き崖等が雁行ないし平行して認められる南東側隆起の逆断層である（補足資料2.4-6(1)P.2.4-6-2）。
	地質調査(C)		④穴水町明千寺では，古君リニアメント近傍の東印内互層中に古君リニアメントと走向がやや斜交する南東側隆起の逆断層（44°）が認められる（補足資料2.4-6 (4)P.2.4-6-11）。
	地球物理学的調査	海上音波探査(D)	⑤富山湾西側海域断層は，中部更新統及びそれより下位の地層に南東落ちの変位が認められ，北西傾斜の逆断層と推定される（第1328回審査会合　資料1-1　P.200～202）。 ⑥能都断層帯と富山湾西側海域断層の地表トレースは，向かい合い近接して分布する（補足資料3.2-29(2)P. 3.2-29-6）。 ⑦能都断層帯は南東傾斜（44°）の逆断層，富山湾西側海域断層は北西傾斜（約30～50°）の逆断層で，断層面の傾斜方向は異なり，地下で近づく関係にある（補足資料3.2-29(2)P. 3.2-29-6）。
		重力異常分布(E)	⑧能都断層帯に沿って大局的に陸側の重力異常値が高い傾向が認められるが，近接する富山湾西側海域断層（北部）には対応する重力異常急変部は認められず，同時活動の可能性については明確に判断できない（補足資料3.2-29(2)P. 3.2-29-7）。
同時活動の可能性の評価			**［評価結果］** ・検討の結果，能登-滝ノ坊断層帯と富山湾西側海域断層の同時活動を考慮した文献はない（①，②）ものの，向かい合い近接して分布（⑥）し，地下で近づく関係にある（③，④，⑤，⑦）。 ・以上のことを踏まえ，総合的に評価した結果，**能都-滝ノ坊断層帯と富山湾西側海域断層は，同時活動する可能性を否定できない**ことから，**１つの起震断層として設定する**。

＜同時活動する可能性のある断層の関連性の検討＞

○能都-滝ノ坊断層帯と富山湾西側海域断層は，１つの起震断層として設定すると評価したことから，同時活動する可能性のある断層の関連性の検討を行った（補足資料3.2-29(3)P. 3.2-29-8。

○断層形状・位置関係を確認した結果，能都-滝ノ坊断層帯と富山湾西側海域断層は並走し，地下で近づく関係にあることから，地震調査委員会による評価事例（P.437）を踏まえると，一方の断層のみが震源断層として活動する（主断層－副断層の関係）と判断し，**主断層のみを震源断層として考慮する（連動に該当しない）**こととする。

断層モデルの設定方法

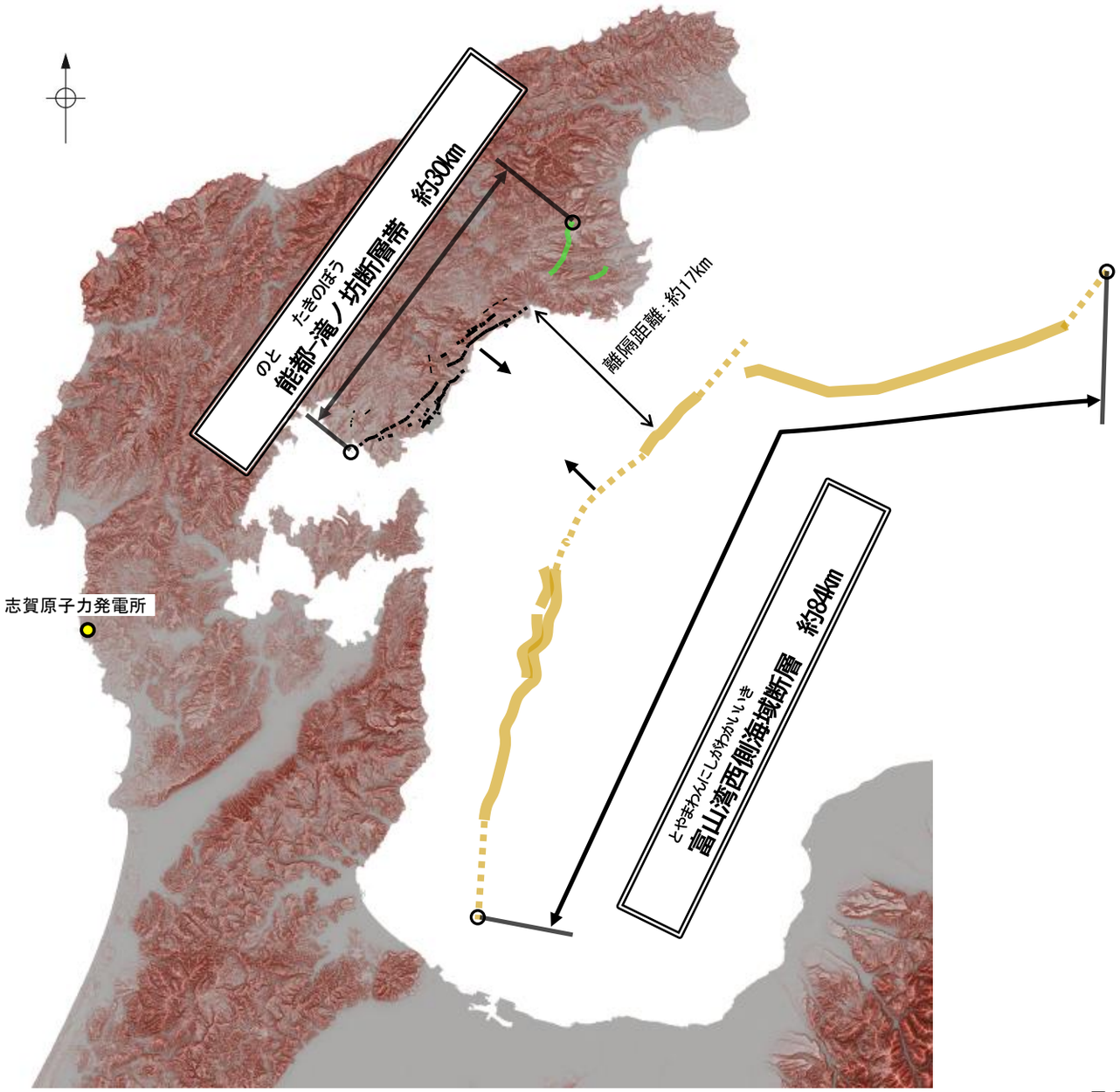
＜参考＞

○能都-滝ノ坊断層帯と富山湾西側海域断層は主断層のみを震源断層として考慮することとしたことから，いずれが主断層であるかの検討を行った（補足資料3.2-29(4)P.3.2-29-9）。

＜いずれが主断層であるかの検討＞

検討内容			検討結果
地形及び地質構造	文献調査(a)		①文献調査及び海上音波探査の結果，能都-滝ノ坊断層帯の長さは約30kmである（補足資料3.2-28(1)P.3.2-28-3）
	地球物理学的調査	海上音波探査(b)	②海上音波探査及び文献調査の結果，富山湾西側海域断層の長さは約84kmである（第1328回審査会合　資料1-1　P.198）。
断層の活動履歴		平均変位速度(c)	③能都-滝ノ坊断層帯の平均変位速度は不明である。 ④富山湾西側海域断層の平均変位速度は不明である。
評価			**［評価結果］** ・検討の結果，断層長さは能都-滝ノ坊断層帯より富山湾西側海域断層の方が長いものの，両断層の平均変位速度が不明であることから，能都-滝ノ坊断層帯と富山湾西側海域断層のいずれが主断層であるかは明確に判断できない。 ・以上のことから，断層モデルについては，能都-滝ノ坊断層帯と富山湾西側海域断層のそれぞれが主断層となるケースを個別に設定することとする。

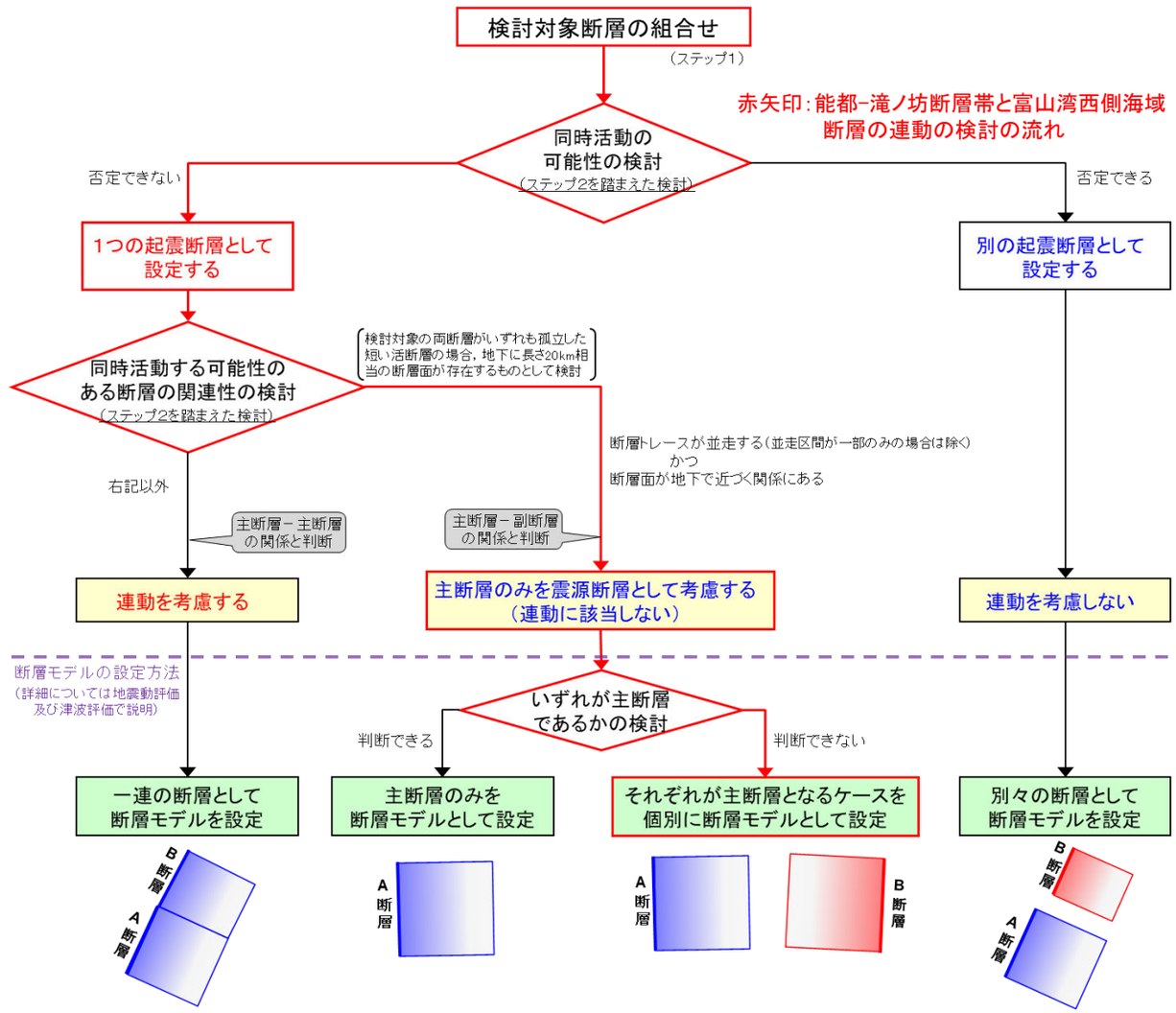
【能都-滝ノ坊断層帯と富山湾西側海域断層の連動の検討結果（位置図，連動評価フロー）】



赤色立体地図※

0　5　10km

※：「国土地理院タイル：赤色立体地図」背景データとして使用し，一部加筆
「赤色立体地図ⓒアジア航測株式会社」



能都断層帯の断層位置（細線は副次的な断層と評価したもの）　推定区間

断層端点

傾斜方向

滝ノ坊断層の断層位置（文献の断層トレースを基に評価した断層位置）

富山湾西側海域断層　断層位置　推定区間

3.2.30　砺波平野断層帯（西部）と御母衣断層の連動の検討結果

連動の検討

○検討対象とする断層の組合せとして抽出した砺波平野断層帯（西部）と御母衣断層について，「当社の連動評価の検討方法」に基づき，同時活動の可能性の検討を行った。検討結果は以下の通り。

赤字：同時活動する可能性を示唆する
青字：同時活動しない可能性を示唆する

＜同時活動の可能性の検討＞

検討内容			検討結果
地形及び地質構造	文献調査(A)		①地震調査委員会（2004b，2008b）は，砺波平野断層帯（西部）と御母衣断層を別の起震断層として設定している（補足資料3.2-30（2）P.3.2-30-5）。 ②砺波平野断層帯（西部）と御母衣断層の地表トレースは，ほぼ一線に近接して分布する（補足資料3.2-30（2）P.3.2-30-4）。
		断層面の傾斜方向，ずれの向き(B)	③地震調査委員会（2008b）は砺波平野断層帯（西部）について北西傾斜（45～50°（中角））の逆断層としているのに対し，地震調査委員会（2004b）は御母衣断層について高角（断層モデルの傾斜角は90°※）で左横ずれを主体とする断層としており，変位センスが異なり，傾斜方向を考慮すると地下深部で断層面が離れていく関係にある（補足資料3.2-30（2）P.3.2-30-4）。
	地球物理学的調査	重力異常分布(C)	④村田ほか（2018）のブーゲー異常図と断層との関係を確認した結果，砺波平野断層帯（西部）のうち，石動断層に沿って，連続的な重力異常急変部が認められる。また，御母衣断層の中～南部や，北部の一部区間において，重力異常急変部が認められる。しかし，両断層間において，重力異常急変部は連続しない（補足資料3.2-30（2）P.3.2-30-5）。
総合評価			［評価結果］ ・検討の結果，砺波平野断層帯（西部）と御母衣断層は，ほぼ一線に近接して分布する（②）ものの，地震調査委員会は，両断層を別の起震断層として設定している（①）。また，両断層の変位センスが異なり，傾斜方向を考慮すると地下深部で断層面が離れていく関係にある（③）。さらに，重力異常分布の結果からは，両断層間に連続する構造は推定されない（④）。 ・以上のことを踏まえ，総合的に評価した結果，砺波平野断層帯（西部）と御母衣断層は，**同時活動する可能性はないと判断される**ことから，**別の起震断層として設定し，連動を考慮しない**。

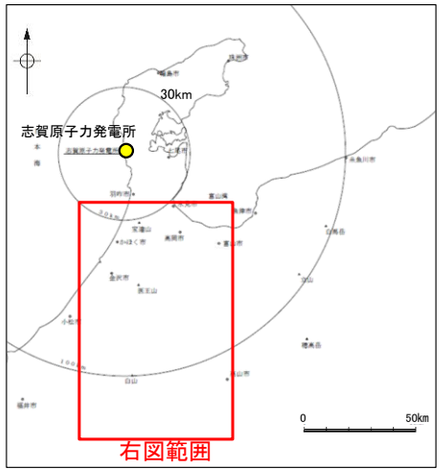
※地震調査委員会（2021）による。

断層モデルの設定方法

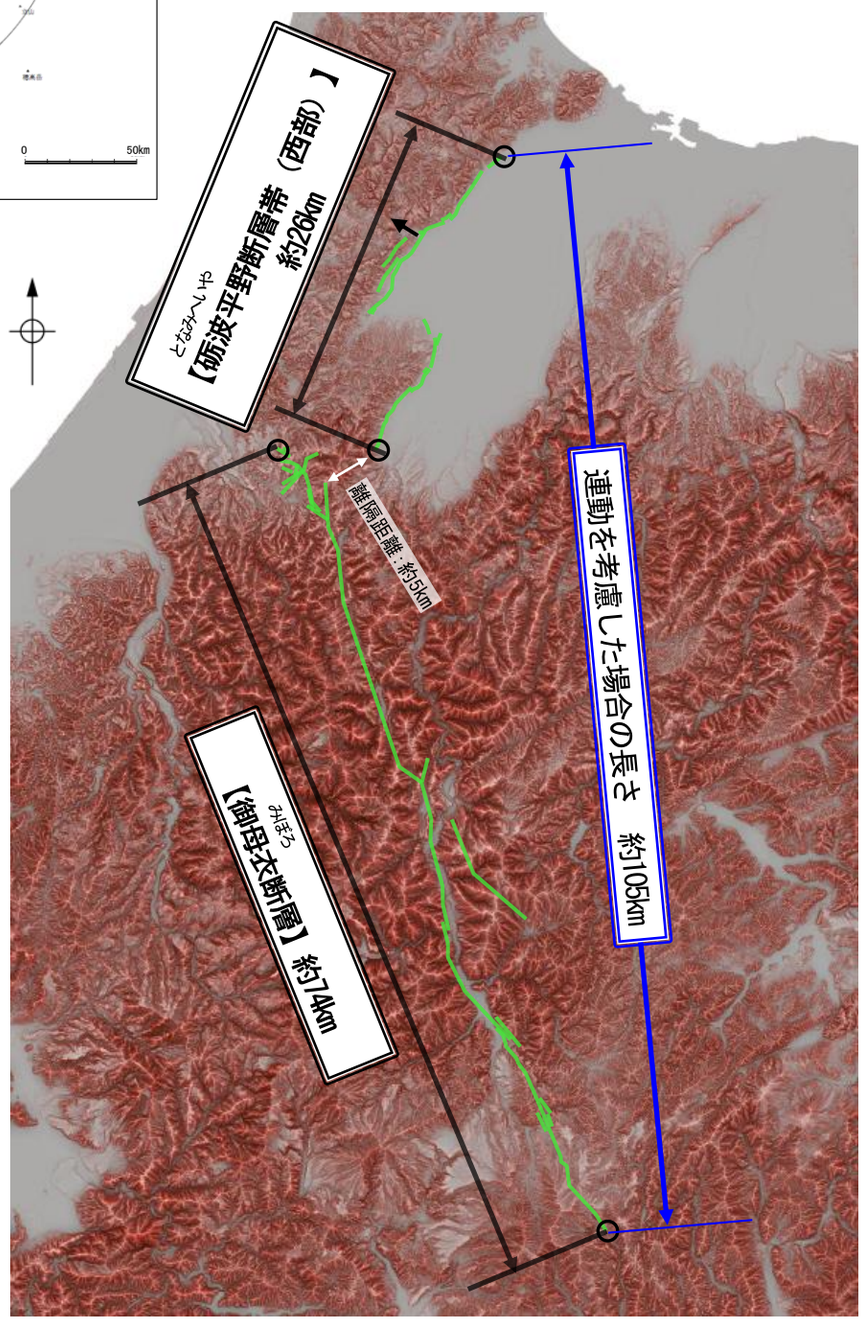
＜参考＞

○連動の検討の結果，砺波平野断層帯（西部）と御母衣断層の連動を考慮しないことから，断層モデルについては，砺波平野断層帯（西部）と御母衣断層を別々の断層として設定することとする。

【砺波平野断層帯（西部）と御母衣断層の連動の検討結果（位置図，連動評価フロー）】

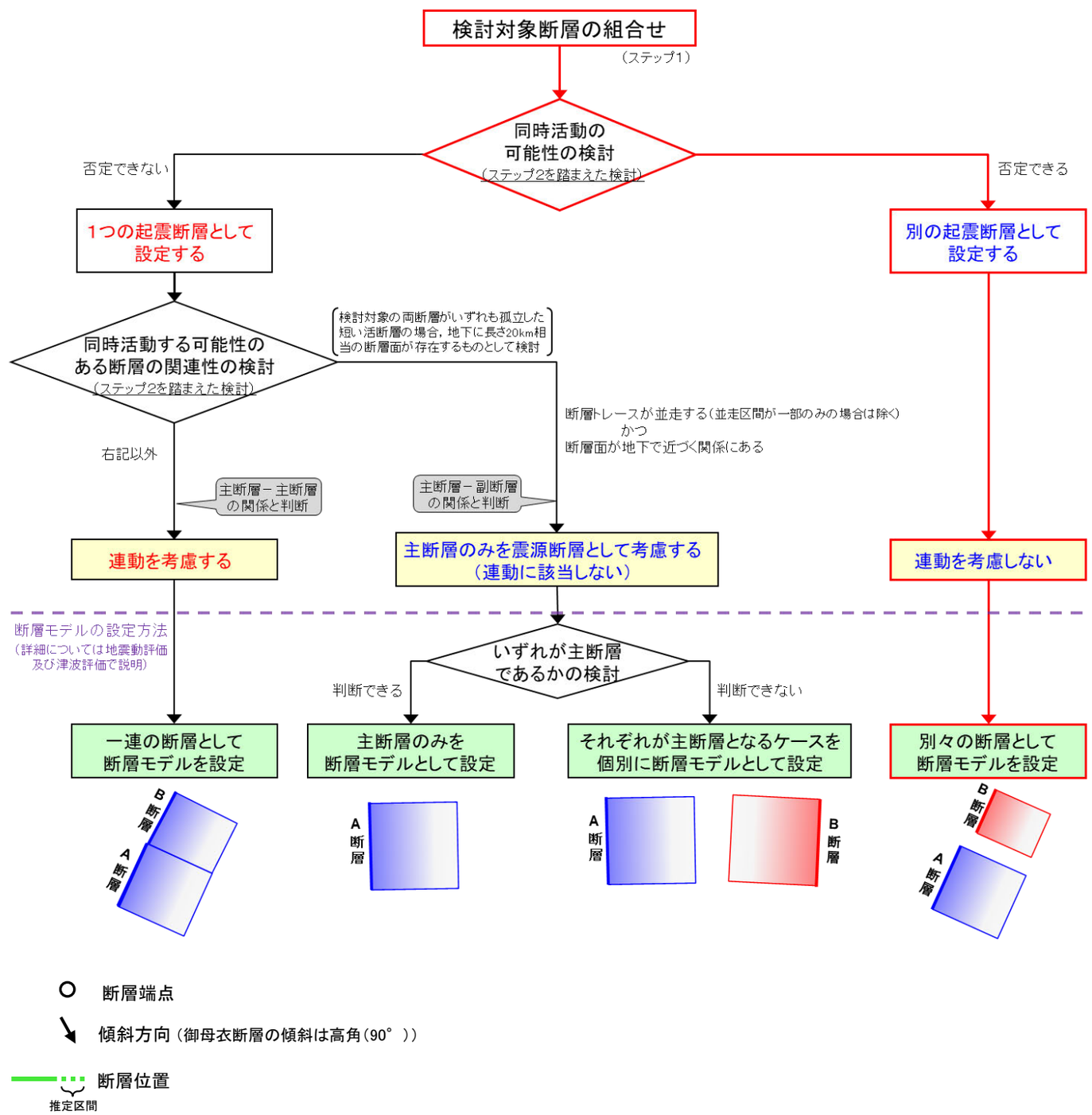


位置図



赤色立体地図※

赤矢印：砺波平野断層帯（西部）と御母衣断層の連動の検討の流れ



※：「国土地理院タイル：赤色立体地図」背景データとして使用し，一部加筆
「赤色立体地図ⓒアジア航測株式会社」

3.2.31　砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯の連動の検討結果

連動の検討

○検討対象とする断層の組合せとして抽出した砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯について，「当社の連動評価の検討方法」に基づき，同時活動の可能性の検討を行った。検討結果は以下の通り。

＜同時活動の可能性の検討＞

赤字：同時活動する可能性を示唆する
青字：同時活動しない可能性を示唆する

検討内容				検討結果
地形及び地質構造	文献調査(A)			①地震調査委員会（2008b）は，砺波平野断層帯東部と呉羽山断層帯を別の起震断層として設定している（**補足資料3.2-31**（2）P.3.2-31-4）。 ②砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯は，岡村（2007b）が示す第四紀のひずみ集中帯内に分布する（P.59）。 ③砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯の地表トレースは，一部並走区間を伴って近接して分布する（**補足資料3.2-31**（2）P.3.2-31-5）。
		反射法地震探査	断層面の傾斜方向(B)	④地震調査委員会（2008b，2021）及び文科省ほか（2015）によれば，砺波平野断層帯（東部）は南東傾斜（約30～45°）の逆断層である（**補足資料3.2-31**（2）P.3.2-31-5）。 ⑤地震調査委員会（2008b）によれば，呉羽山断層帯は北西傾斜（約45°）の逆断層である（**補足資料3.2-31**（2）P.3.2-31-5）。
断層の活動履歴	平均変位速度(C)			⑥地震調査委員会（2008b）によれば，砺波平野断層帯（東部）の平均変位速度は0.3-0.4m/千年程度（上下成分），呉羽山断層帯の平均変位速度は0.4-0.6m/千年程度（上下成分）であり，両断層の平均変位速度は同程度である（**補足資料3.2-31**（3）P.3.2-31-6）。
	最新活動時期(D)			⑦砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯の最新活動時期は，同じ可能性がある（**補足資料3.2-31**（4）P.3.2-31-7）。 ・地震調査委員会(2008b)によれば，砺波平野断層帯東部の最新活動時期は約4千3百年前以後，約3千6百年前以前であると推定している。 ・地震調査委員会（2008b）は，呉羽山断層帯の最新活動時期は約3千5百年前以後，7世紀以前の可能性があるとしている。また，富山大学・地域地盤環境研究所（2011）は，呉羽山断層帯の最新活動時期はBC2285～427ADとしている。
同時活動の可能性の評価				**［評価結果］** ・検討の結果，砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯は，同時活動を考慮した文献はない（①）ものの，ひずみ集中帯内で一部並走区間を伴って近接して分布し（②，③），地下で近づく関係にある（④，⑤）。また，両断層の平均変位速度は同程度であり（⑥），最新活動時期が同じ可能性がある（⑦）。 ・以上のことを踏まえ，総合的に評価した結果，**砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯は同時活動する可能性が否定できない**ことから，**1つの起震断層として設定する**。

＜同時活動する可能性のある断層の関連性の検討＞

○砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯は，1つの起震断層として設定すると評価したことから，同時活動する可能性のある断層の関連性の検討を行った（**補足資料3.2-31**（5）P.3.2-31-8）。

○断層形状・位置関係を確認した結果，砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯は，並走する区間があるものの一部であり，両断層がともに震源断層として活動する（主断層－主断層の関係）と判断し，**両断層の連動を考慮する**。
○両断層の連動を考慮した結果，「砺波平野（東部）－呉羽山断層帯」として，走向がNE-SW方向，南東傾斜（約30～45°）及び北西傾斜（約45°）の逆断層と評価した。
○断層長さは，呉羽山断層帯の北東端から砺波平野断層帯（東部）の南西端までの約57km（65km）※区間を評価した（次頁）。

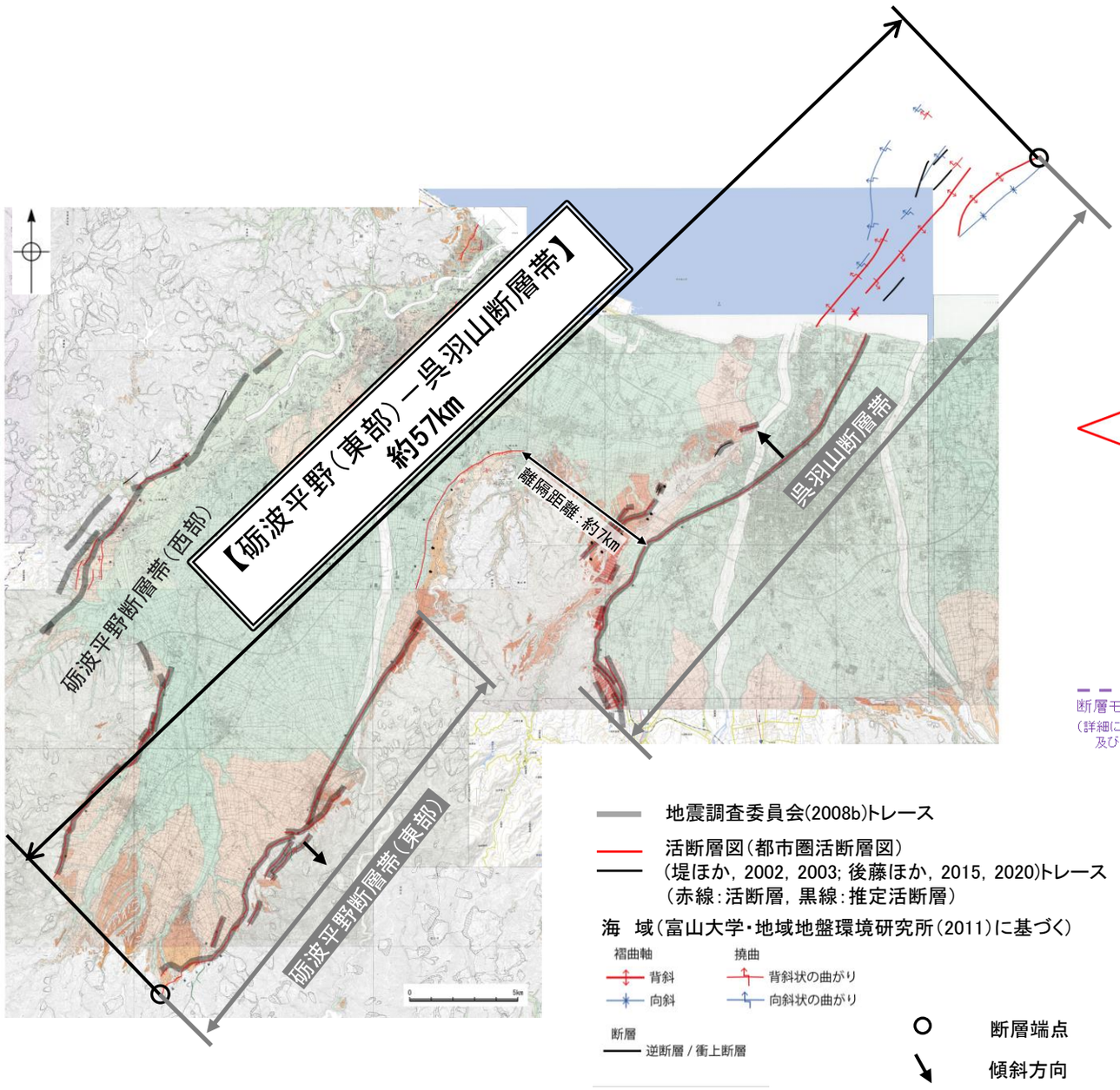
※括弧内の長さは，砺波平野断層帯（東部）（30km）と呉羽山断層帯（35km）を足し合わせた値を記載している。

断層モデルの設定方法

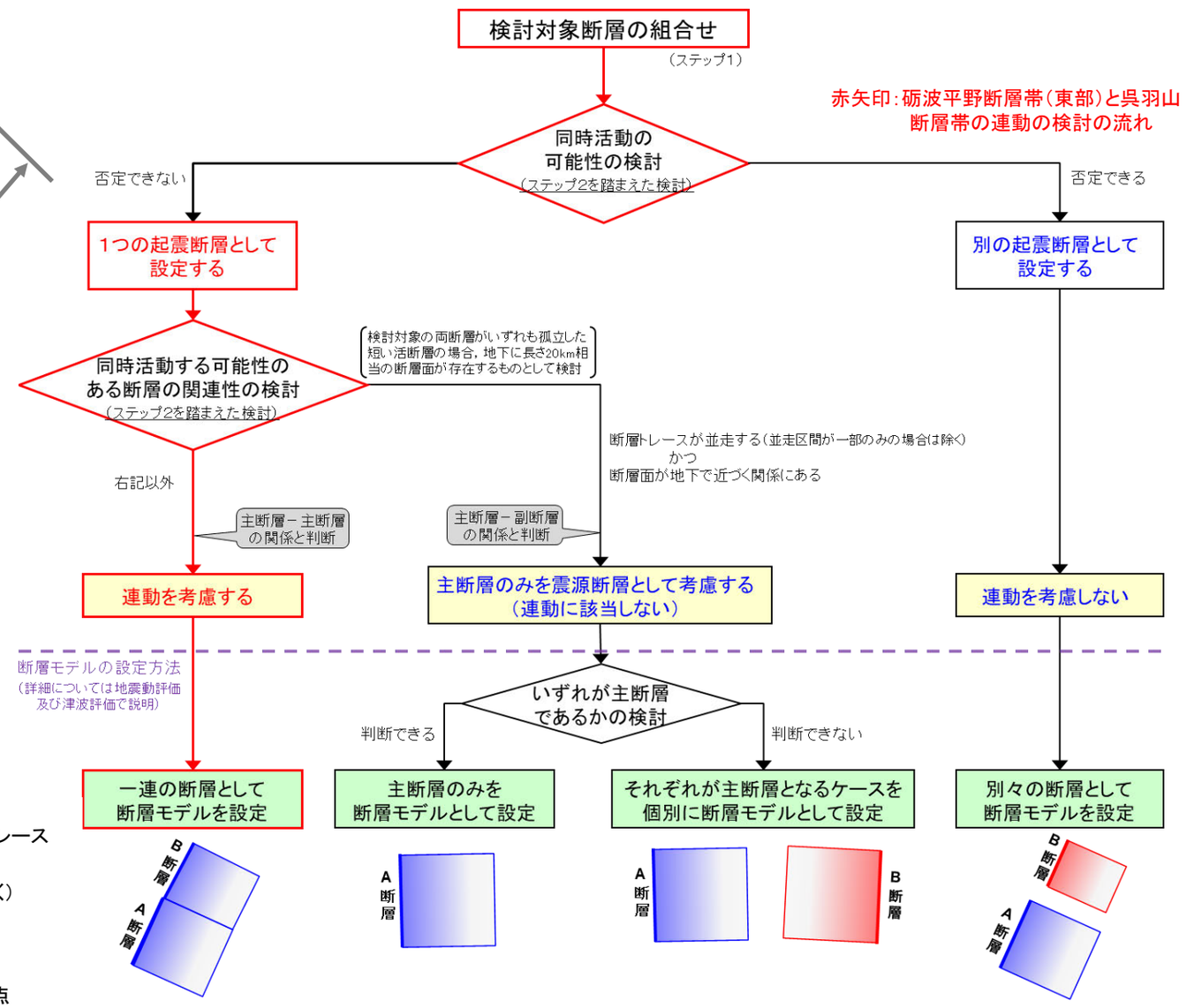
＜参考＞

○連動の検討の結果，砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯の連動を考慮することから，断層モデルについては，砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯を一連の断層として設定することとする。

【砺波平野断層帯（東部）と呉羽山断層帯の連動の検討結果（位置図，連動評価フロー）】



位置図
（活断層図(都市圏活断層図)(堤ほか，2002，2003；後藤ほか，2015，2020；宮内ほか，2019；田力ほか，2019；基図は地理院地図)に一部加筆）



余白

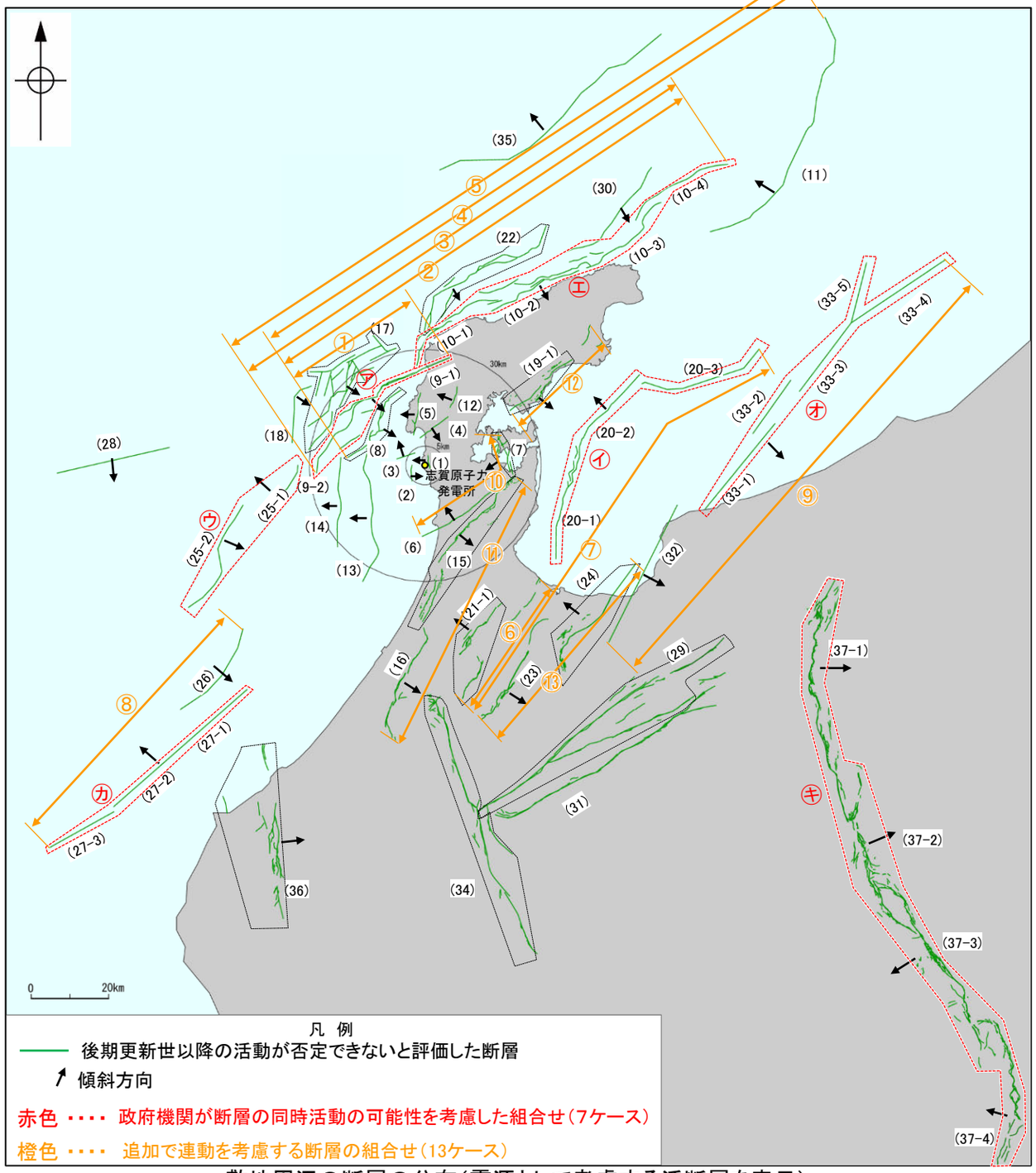
4. 敷地周辺の断層の評価（まとめ）

4. 敷地周辺の断層の評価（まとめ）

○敷地周辺において，震源として考慮する活断層を下図及び右表に示す。
○周辺陸域，周辺海域において文献調査等により抽出した全ての断層等の評価概要を次頁以降に示す。

紫字は第1328回審査会合以降に変更した箇所
青下線は令和6年能登半島地震の知見を踏まえ，評価を見直した箇所

第1193回審査会合「敷地近傍の断層の評価」で概ね審議済。
第1328回審査会合「敷地周辺（海域）の断層の評価」において説明（審議中）。



敷地周辺の断層の分布（震源として考慮する活断層を表示）

※1：断層長さは，原則として端点と端点を結んだ距離で示している（富山湾西側海域断層は折れ点を考慮した距離）。
※2：連動を考慮した長さ及び断層の傾斜角は，調査結果に基づくものである。地震動評価及び津波評価においては，調査結果の不確実性を考慮して長さ・傾斜角を別途設定する。
※3：括弧内の長さは，連動を考慮する断層の長さを足し合わせた値を記載している。また，さらなる連動を考慮する場合は，既に連動を考慮した長さに，追加で考慮する断層の長さを足し合わせた値を記載している（例えば，海士岬－笹波（東部）－能登北岸－NT2・NT3断層帯は，既に連動を考慮した海士岬－笹波（東部）断層帯の長さ（37km）及び能登半島北部沿岸域断層帯の長さ（96km）に追加で考慮するNT2・NT3の長さ（64km）を足し合わせた値（197km）を記載）。
※4：能都－滝ノ坊断層帯の滝ノ坊断層は，今泉ほか（2018）を図読し断層長さを5.6km，砺波平野（西部）－高岡断層帯の高岡断層は，後藤ほか（2015）を図読し断層長さを15kmとして，それぞれ足し合わせた値を記載している。

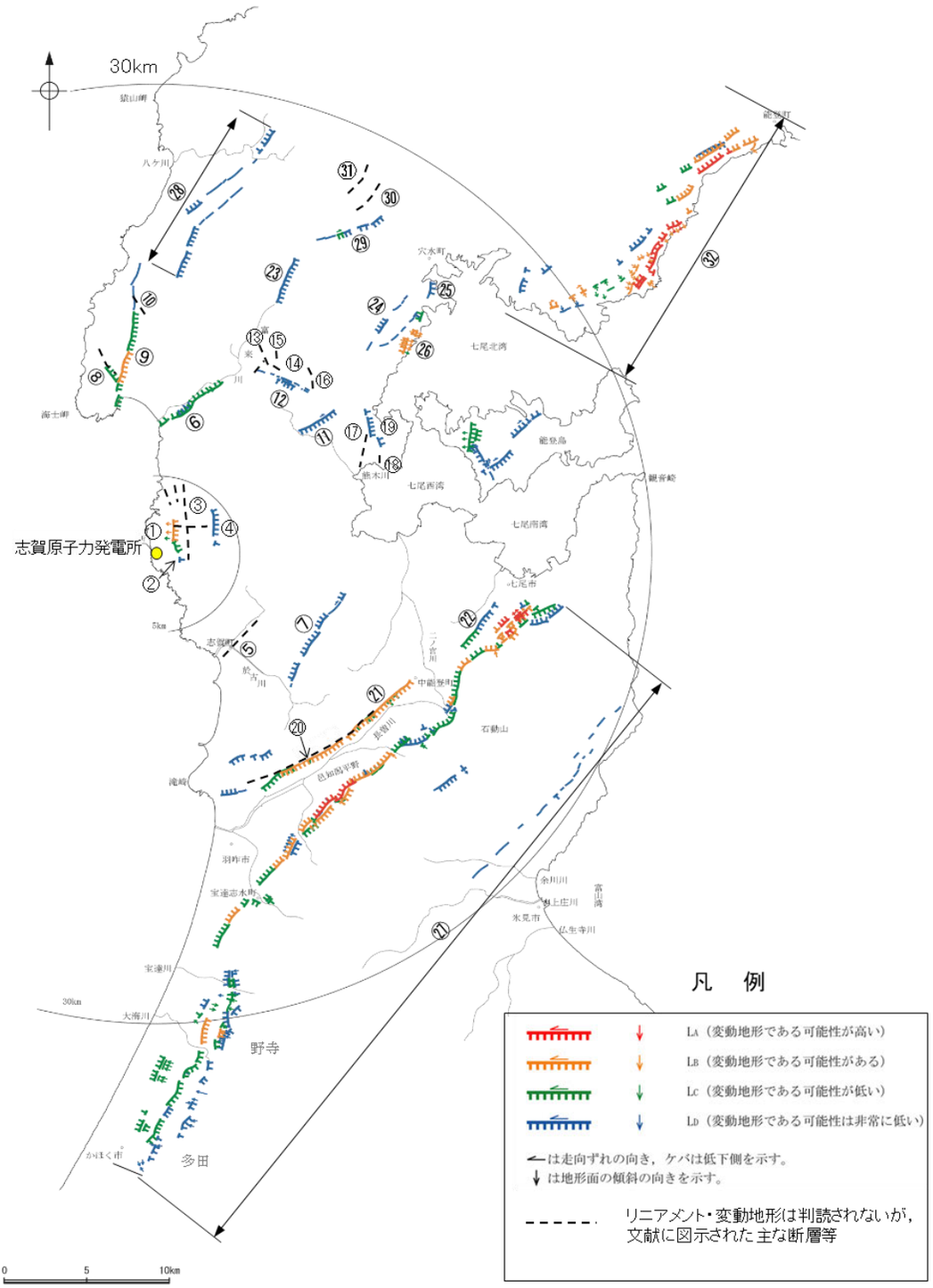
震源として考慮する活断層

	断層名	断層長さ ※1	傾斜※2	連動評価（政府機関による評価を反映）7ケース	追加の連動評価※2 ※3 13ケース
敷地近傍	(1) 福浦断層	3.2 km	70° W	－	－
敷地近傍	(2) 兜岩沖断層	4.0 km	E	－	－
敷地近傍	(3) 碁盤島沖断層	4.9 km	NW	－	－
敷地近傍	(4) 富来川南岸断層	9.0 km	60° SE	－	－
敷地周辺	(5) 酒見断層	11.0 km	W	－	－
敷地周辺	(6) 眉丈山第２断層	23.0 km	60° NW	－	⑩眉丈山第2-能登島半の浦断層帯 39 km（34.6km）
敷地周辺	(7) 能登島半の浦断層帯※5	11.6 km	60° W	－	
敷地周辺	(8) 海士岬沖断層帯	22.7 km	60° SE	－	①海士岬-笹波(東部)断層帯 37 km（43.3km）
敷地周辺	(9-1) 笹波沖断層帯（東部）	20.6 km	60° SE	㋐ 笹波沖断層帯（全長） 45.5 km	②海士岬-笹波(東部)-能登北岸断層帯 124 km（133km）
敷地周辺	(9-2) 笹波沖断層帯（西部）	25.3 km			
敷地周辺	(10-1) 猿山沖セグメント	28 km	40～50° SE	㋓ 能登半島北部沿岸域断層帯 96 km	③笹波(全長)-能登北岸断層帯 133 km（141.5km）
敷地周辺	(10-2) 輪島沖セグメント	28 km			④海士岬-笹波(東部)-能登北岸-NT2・NT3断層帯 169 km（197km）
敷地周辺	(10-3) 珠洲沖セグメント	26 km			
敷地周辺	(10-4) 禄剛セグメント	28 km			⑤笹波(全長)-能登北岸-NT2・NT3断層帯 178 km（205.5km）
敷地周辺	(11) NT2・NT3	64 km	45～50° NW	－	
敷地周辺	(12) 富来川断層	5.6 km	W	－	－
敷地周辺	(13) 羽咋沖東撓曲	33.6 km	60° W	－	－
敷地周辺	(14) 羽咋沖西撓曲	23.0 km	60° W	－	－
敷地周辺	(15) 邑知潟南縁断層帯	44.3 km	30° SE	－	⑪邑知潟南縁-森本・富樫断層帯 74 km（74.3km）
敷地周辺	(16) 森本・富樫断層帯	30 km	40～60° E	－	
敷地周辺	(17) 前ノ瀬東方断層帯	35.6 km	60° SE	－	－
敷地周辺	(18) 沖ノ瀬断層	16 km	E	－	－
敷地周辺	(19-1) 能都断層帯	20.9 km	44° SE	－	⑫能都-滝ノ坊断層帯 30 km（26.5km）※4
敷地周辺	(20-1) 富山湾西側海域断層（南部）	22 km	30～50° NW	㋑ 富山湾西側海域断層 84 km	⑦砺波平野(西部)-高岡-富山湾西側海域断層帯 127 km（121km）
敷地周辺	(20-2) 富山湾西側海域断層（北部）	7.0 km			
敷地周辺	(20-3) TB3	24 km			
敷地周辺	(21-1) 砺波平野断層帯（西部）	26 km	45～50° NW	－	⑥砺波平野(西部)-高岡断層帯 37 km（41km）※4
敷地周辺	(22) 猿山岬北方沖断層	41 km	45～65° SE	－	－
敷地周辺	(23) 砺波平野断層帯（東部）	30 km	30° SE	－	⑬砺波平野(東部)-呉羽山断層帯 57 km（65km）
敷地周辺	(24) 呉羽山断層帯※5	35 km	45° NW	－	
敷地周辺	(25-1) KZ3	17 km	60° NW	㋒ KZ3・KZ4 47 km	－
敷地周辺	(25-2) KZ4	30 km	50～60° SE		
敷地周辺	(26) KZ6	26 km	55～60° SE	－	⑧KZ6-石川県西方沖断層帯 76 km（91km）
敷地周辺	(27-1) FU1	6.7 km	50～60° NW	㋕ 石川県西方沖の断層 65 km	
敷地周辺	(27-2) FU2	21 km			
敷地周辺	(27-3) FU3	21 km			
敷地周辺	(28) KZ5	29 km	60° S	－	－
敷地周辺	(29) 牛首断層帯	78 km	高角～ほぼ垂直	－	－
敷地周辺	(30) 能登半島北方沖断層	31 km	45° SE	－	－
敷地周辺	(31) 跡津川断層帯	69 km	ほぼ垂直	－	－
敷地周辺	(32) 魚津断層帯	40 km	30° SE	－	⑨魚津-能登半島東方沖断層帯 132 km（130km）
敷地周辺	(33-1) TB5	29 km	25～45° SE	㋔ 能登半島東方沖の断層 90 km	
敷地周辺	(33-2) TB6	17 km			
敷地周辺	(33-3) J01	22 km			
敷地周辺	(33-4) J02	28 km			
敷地周辺	(33-5) J03	17 km			
敷地周辺	(34) 御母衣断層	74 km	高角	－	－
敷地周辺	(35) NT1	67 km	45～50° NW	－	－
敷地周辺	(36) 福井平野東縁断層帯	45 km	50° E～ほぼ垂直	－	－
敷地周辺	(37-1) 糸魚川－静岡構造線活断層系(北部)	50 km	30～60° E	㋖ 糸魚川－静岡構造線活断層系 158 km	－
敷地周辺	(37-2) 糸魚川－静岡構造線活断層系(中北部)	45 km	E(高角)		
敷地周辺	(37-3) 糸魚川－静岡構造線活断層系(中南部)	33 km	W		
敷地周辺	(37-4) 糸魚川－静岡構造線活断層系(南部)	48 km	30～60° W		

4.1　敷地周辺陸域の断層の評価（まとめ）

4.1 敷地周辺陸域の断層の評価（まとめ）

【陸域（半径30km範囲）】



敷地周辺陸域（半径30km範囲）の断層分布図

第1193回審査会合「敷地近傍の断層の評価」で概ね審議済。

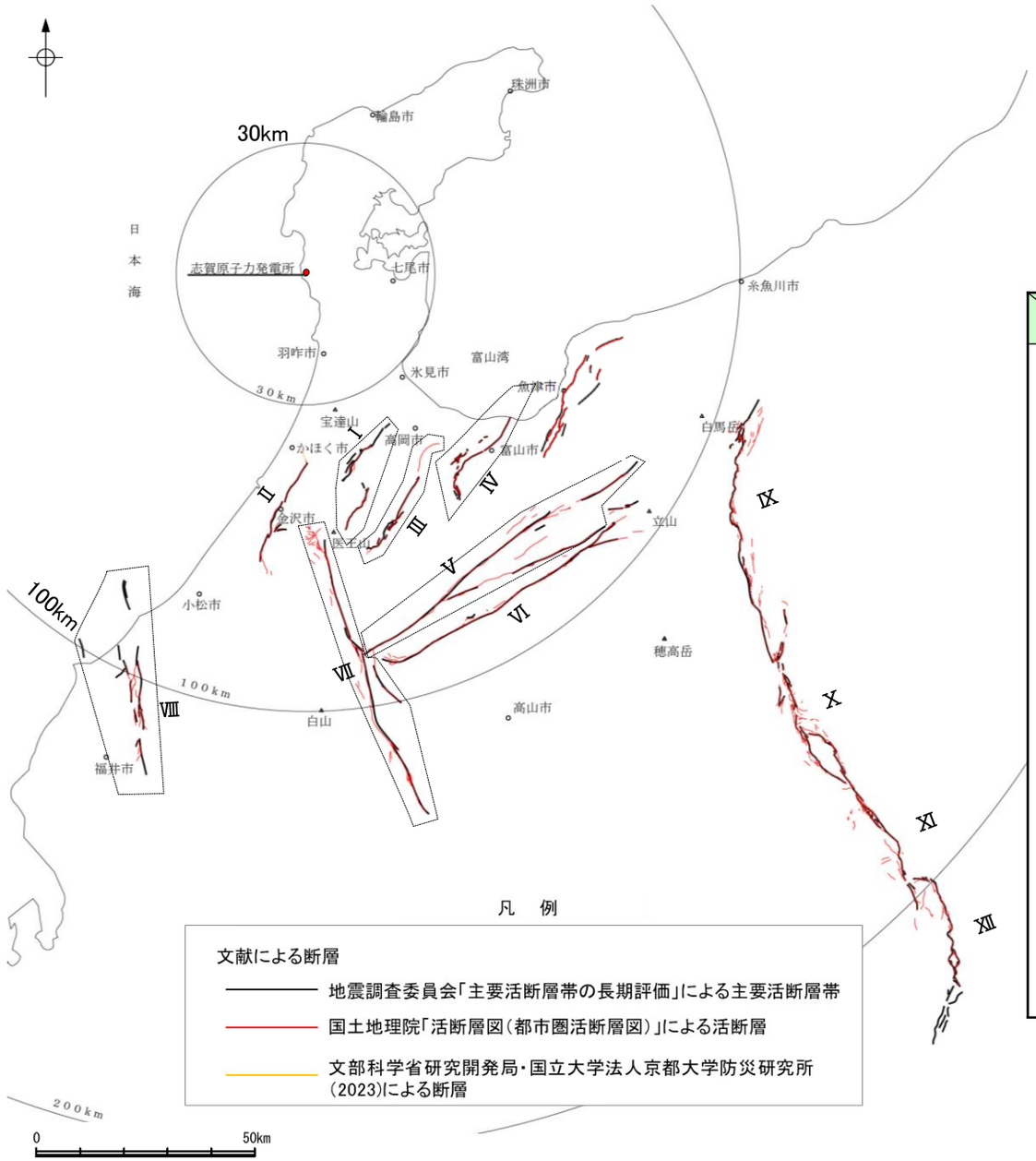
敷地周辺陸域（半径30km範囲）の断層評価

	No.	名称	断層長さ※1	連動評価（政府機関による評価を反映）	敷地からの距離※2	走向	傾斜（度）	ずれの向き	評価
敷地近傍陸域	①	福浦断層	3.2km	－	1.3km	N-S	西傾斜（70）	西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	②	断層o	0.27km	－	1.2km	NE-SW	南東傾斜（73）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が認められない。
	③	和光台南の断層	[2km]	－	2.9km	－	－	－	対応する断層が認められない。
		高ツボリ山東方リニアメント	[3.4km]	－	2.9km	－	－	－	対応する断層が認められない。
		高ツボリ山北西方Ⅰリニアメント	[0.5km]	－	3.7km	－	－	－	対応する断層が認められない。
		高ツボリ山北西方Ⅱリニアメント	[0.8km]	－	3.8km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	④	長田付近の断層	[2.5km]	－	3.7km	－	－	－	対応する断層が認められない。
敷地周辺陸域	⑤	高浜断層	[3km]	－	7.4km	－	－	－	後期更新世以降の活動が認められない。
	⑥	富来川南岸断層	9.0km	－	10km	NE-SW	南東傾斜（60）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	⑦	矢駄リニアメント	[6.8km]	－	11km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	⑧	谷内西方の断層	[2km]	－	12km	－	－	－	後期更新世以降の活動が認められない。
	⑨	酒見断層	11.0km	－	14km	N-S	西傾斜	西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	⑩	高爪山西方の断層	[1.5km]	－	16km	－	－	－	後期更新世以降の活動が認められない。
	⑪	横田付近の断層	[2.5km]	－	13km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	⑫	西谷内リニアメント	[3.3km]	－	13km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	⑬	田尻滝西方の断層	[2km]	－	14km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	⑭	二口西方の断層	[1km]	－	14km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	⑮	越ヶ口西方の断層	[0.5km]	－	15km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	⑯	別所付近の断層	[1.7km]	－	15km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	⑰	小牧断層	[1.7km]	－	15km	－	－	－	後期更新世以降の活動が認められない。
	⑱	瀬嵐断層	[1km]	－	15km	－	－	－	後期更新世以降の活動が認められない。
	⑲	鹿島台リニアメント	[0.6km]	－	15km	－	－	－	後期更新世以降の活動が認められない。
	⑳	眉丈山第1断層	[9km]	－	15km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	㉑	眉丈山第2断層	23.0km	－	15km	NE-SW	北西傾斜（60）	北西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	㉒	徳田北方の断層	[3.4km]	－	20km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	㉓	富来川断層	5.6km	－	19km	N-S	西傾斜	西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	㉔	鹿島西断層	[4.4km]	－	20km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	㉕	緑ヶ丘リニアメント	[5.2km]	－	21km	－	－	－	後期更新世以降の活動が認められない。
	㉖	曽福リニアメント	[2.9km]	－	21km	－	－	－	後期更新世以降の活動が認められない。
	㉗	邑知潟南縁断層帯※3	44.3km	－	25km	NE-SW	南東傾斜（30）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	㉘	西中尾リニアメント	[11km]	－	23km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	㉙	下唐川リニアメント	[3.3km]	－	23km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	㉚	小又西方の断層	[2.5km]	－	26km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	㉛	原断層	[1.5km]	－	27km	－	－	－	対応する断層が認められない。
	㉜	能都断層帯	20.9km	－	36km	NE-SW	南東傾斜（44）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。

※1：[ ]内の長さはリニアメント・変動地形または文献に示された長さ
※2：敷地と断層の両端点を結んだ線分の中点の距離から算出
※3：坪山-八野断層及び内高松付近の断層については，邑知潟南縁断層帯の一部として評価することとした。

4.1 敷地周辺陸域の断層の評価（まとめ）

【陸域（半径30km以遠）】



敷地周辺陸域（半径30km以遠）の断層分布図

□ 第1328回審査会合「敷地周辺（海域）の断層の評価」において説明（審議中）。

敷地周辺陸域（半径約30km以遠）の断層評価

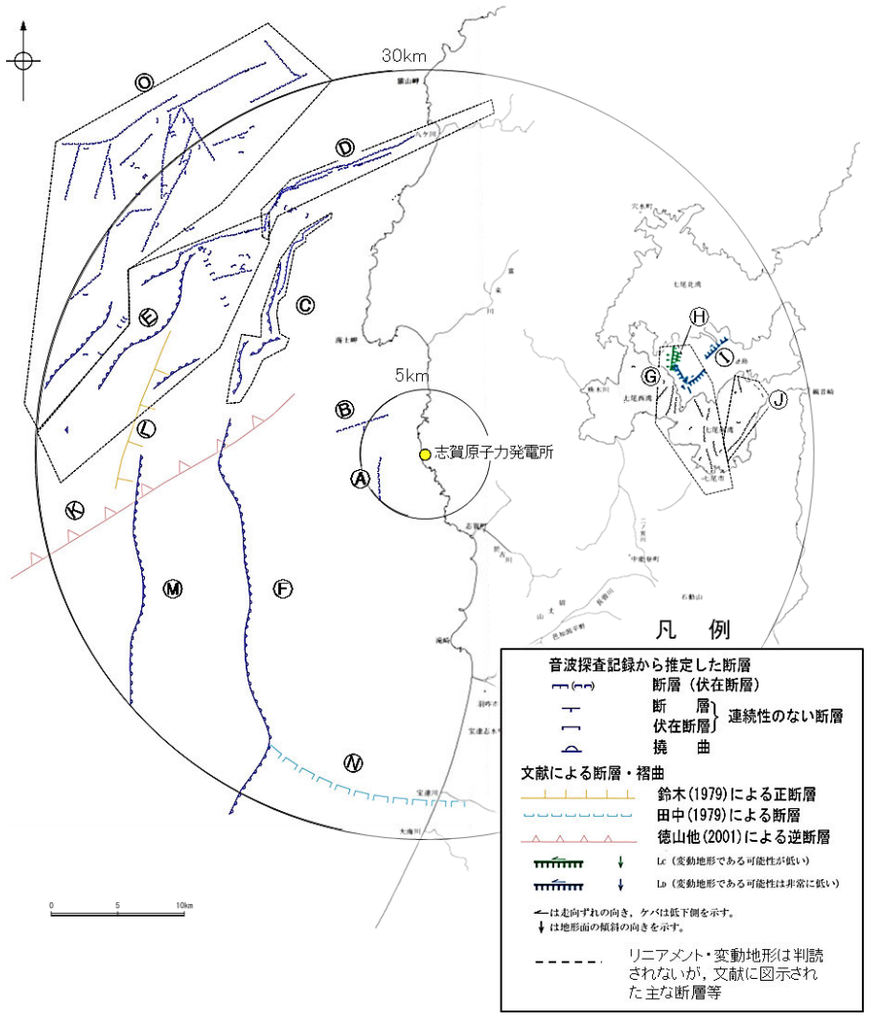
	No.	名称	断層長さ	連動評価（政府機関による評価を反映）	敷地からの距離※	走向	傾斜（度）	ずれの向き	評価
敷地周辺陸域	Ⅰ	砺波平野断層帯（西部）（となみへいや）	26km	－	49km	NE-SW	北西傾斜（45～50）	北西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	Ⅱ	森本・富樫断層帯（もりもと　とがし）	30km	－	55km	N-S	東傾斜（40～60）	東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	Ⅲ	砺波平野断層帯（東部）（となみへいや）	30km	－	57km	NE-SW	南東傾斜（30）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	Ⅳ	呉羽山断層帯（くれはやま）	35km	－	60km	NE-SW	北西傾斜（45）	北西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	Ⅴ	牛首断層帯（うしくび）	78km	－	80km	NE-SW	高角～ほぼ垂直	右横ずれ断層（北東部では南東側隆起成分，南西部では北西側隆起成分を伴う）	後期更新世以降の活動が否定できない。
	Ⅵ	跡津川断層帯（あとつがわ）	69km	－	85km	NE-SW	ほぼ垂直	右横ずれ断層（北西側隆起成分を伴う）	後期更新世以降の活動が否定できない。
	Ⅶ	御母衣断層（みほろ）	74km	－	94km	N-S	高角	左横ずれ断層（加須良断層では東側隆起成分，白川断層，三尾河断層では西側隆起成分を伴う）	後期更新世以降の活動が否定できない。
	Ⅷ	福井平野東縁断層帯（ふくいへいや）	45km	－	100km	N-S	東傾斜（50）～ほぼ垂直	左横ずれ，かつ東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	Ⅸ	糸魚川－静岡構造線活断層系（北部）（いといがわ　しずおか）	50km	糸魚川－静岡構造線活断層系 158 km	165km	N-S	東傾斜（30～60）	東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	Ⅹ	糸魚川－静岡構造線活断層系（中北部）（いといがわ　しずおか）	45km			N-S	東傾斜（高角）	左横ずれ断層（諏訪盆地南西縁では東側低下の正断層成分を含む）	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⅩⅠ	糸魚川－静岡構造線活断層系（中南部）（いといがわ　しずおか）	33km			NW-SE	西傾斜	左横ずれ断層（諏訪盆地北東縁では西側低下の正断層成分を含む）	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⅩⅡ	糸魚川－静岡構造線活断層系（南部）（いといがわ　しずおか）	48km			N-S	西傾斜（30～60）	西側隆起の逆断層（鳳凰山断層は左横ずれ成分を含む）	後期更新世以降の活動が否定できない。

※：敷地と断層の両端点を結んだ線分の中点の距離から算出

4.2　敷地周辺海域の断層の評価（まとめ）

4.2 敷地周辺海域の断層の評価（まとめ）

【海域（半径30km範囲）】



敷地周辺海域（半径30km範囲）の断層分布図

第1193回審査会合「敷地近傍の断層の評価」で概ね審議済。
第1328回審査会合「敷地周辺（海域）の断層の評価」において説明（審議中）。

敷地周辺海域（半径30km範囲）の断層評価

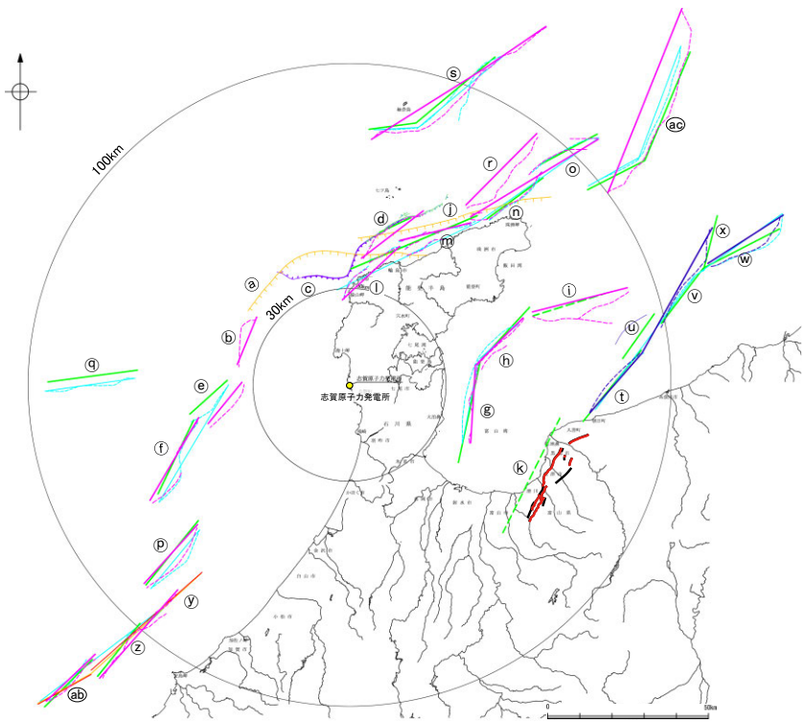
	No.	名称	個別断層の評価断層長さ※1	連動評価（政府機関による評価を反映）	敷地からの距離※2	走向	傾斜（度）	ずれの向き	評価
敷地近傍海域	Ⓐ	兜岩沖断層	4.0km	－	4.0km	N-S	東傾斜	東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
敷地近傍海域	Ⓑ	碁盤島沖断層	4.9km	－	5.5km	NE-SW	北西傾斜	北西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
敷地前面調査海域	Ⓒ	海士岬沖断層帯	22.7km	－	17km	NE-SW	南東傾斜（60）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
敷地前面調査海域	Ⓓ	笹波沖断層帯（東部）	20.6km	笹波沖断層帯（全長）45.5 km	17km	NE-SW	南東傾斜（60）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
敷地前面調査海域	Ⓔ	笹波沖断層帯（西部）	25.3km						
敷地前面調査海域	Ⓕ	羽咋沖東撓曲	33.6km	－	20km	N-S	西傾斜（60）	西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
敷地前面調査海域	Ⓖ	能登島半の浦断層帯	11.6km	－	21km	N-S	西傾斜（60）	西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
敷地前面調査海域	Ⓗ	無関断層	[0.5km]	－	21km	－	－	－	後期更新世以降の活動は認められない。
敷地前面調査海域	Ⓘ	島別所北リニアメント	[2.2km]	－	24km	－	－	－	後期更新世以降の活動は認められない。
敷地前面調査海域	Ⓙ	七尾湾調査海域の断層（N-1断層，N-2断層，N-8断層）	2.0～4.5km	－	24km～26km	－	－	－	後期更新世以降の活動は認められない。
敷地前面調査海域	Ⓚ	徳山ほか（2001）の断層	[26km]	－	21km	－	－	－	第四系に対応する断層は認められない。
敷地前面調査海域	Ⓛ	鈴木（1979）の断層	[13km]	－	22km	－	－	－	第四系に対応する断層は認められない。
敷地前面調査海域	Ⓜ	羽咋沖西撓曲	23.0km	－	24km	N-S	西傾斜（60）	西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
敷地前面調査海域	Ⓝ	田中（1979）の断層	[16km]	－	25km	－	－	－	第四系に対応する断層は認められない。
敷地前面調査海域	Ⓞ	前ノ瀬東方断層帯	35.6km	－	25km	NE-SW	南東傾斜（60）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。

※1：[ ]内の長さはリニアメント・変動地形または文献に示された長さ
※2：敷地と断層の両端点を結んだ線分の中点の距離から算出

4.2 敷地周辺海域の断層の評価（まとめ）

【海域（半径30km以遠）】

□ 第1328回審査会合「敷地周辺（海域）の断層の評価」において説明（審議中）。



敷地周辺海域（半径30km以遠）の断層分布図

凡　例

- 鈴木(1979)による正断層
- 国交省ほか(2014)による津波断層モデルの位置（破線は断層トレース）
- 文科省ほか(2015, 2016)による震源断層モデルの上端位置（破線は伏在している断層の上端）
- 石川県(2012)による断層
- 福井県(2012)による断層
- 地震調査委員会「主要活断層帯の長期評価」による主要活断層帯
- 岡村(2007a)による正断層
- 国土地理院「活断層図（都市圏活断層図）」による活断層
- 岡村(2007a)による新第三紀逆断層
- 井上・岡村(2010)による逆断層
- 尾崎他(2019)による逆断層
- 地震調査委員会(2024a)による断層モデル上端
- 地震調査委員会(2024a)による断層トレース（細線：伏在断層　破線：活断層）
- 地震調査委員会(2025)による断層モデル上端
- 地震調査委員会(2025)による断層トレース（破線：活断層）

敷地周辺海域（半径約30km以遠）の断層評価

	No.	名称	長さ※1	連動評価（政府機関による評価を反映）	敷地からの距離※2	走向	傾斜（度）	ずれの向き	評価
敷地周辺海域	ⓐ	F_U2（鈴木(1979)で示された断層）	[60km]	－	32km	－	－	－	第四系に対応する断層は認められない。
	ⓑ	沖ノ瀬（おきのせ）断層（地震調査委員会(2024a)で示された断層）	16km	－	35km	N-S	東傾斜	逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⓒ	猿山岬以西（さるやまみさきいせい）の断層	[24km]	－	36km	－	－	－	後期更新世以降の活動が認められない。
	ⓓ	猿山岬北方沖（さるやまみさきほっぽうおき）断層	41km	－	51km	NE-SW	南東傾斜（45～65）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない
	ⓔ	KZ3（文科省ほか(2015)で示された断層）	17km	KZ3・KZ4 47km	51km	NE-SW	北西傾斜（60）	北西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⓕ	KZ4（文科省ほか(2015)で示された断層）	30km			NE-SW	南東傾斜（50～60）	南東側隆起の逆断層	
	ⓖ	富山湾西側海域断層（とやまわんにしがわかいいき）（南部）	22km	富山湾西側海域断層 84 km	53km	NE-SW	北西傾斜（30～50）	北西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⓗ	富山湾西側海域断層（とやまわんにしがわかいいき）（北部）	7.0km						
	ⓘ	TB3	[24km]						
	ⓙ	F_U1（鈴木(1979)で示された断層）	[63km]	－	61km	－	－	－	後期更新世以降の活動が認められない。
	ⓚ	魚津（うおづ）断層帯	40km	－	63km	NE-SW	南東傾斜（30）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⓛ	猿山沖（さるやまおき）セグメント	28km	能登半島北部沿岸域断層帯 96 km	65km	NE-SW	南東傾斜（40～50）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⓜ	輪島沖（わじまおき）セグメント	28km						
	ⓝ	珠洲沖（すずおき）セグメント	26km						
	ⓞ	禄剛（ろっこう）セグメント	28km						
	ⓟ	KZ6（文科省ほか(2015)で示された断層）	26km	－	76km	NE-SW	南東傾斜（55～60）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⓠ	KZ5（文科省ほか(2015)で示された断層）	29km	－	80km	E-W	南傾斜（60）	南側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⓡ	能登半島北方沖断層（のとはんとうほっぽうおき）（地震調査委員会(2024a)で示された断層）	31km	－	82km	NE-SW	南東傾斜（45）	南東側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない
	ⓢ	NT1（文科省ほか(2015)で示された断層）	67km	－	99km	NE-SW	北西傾斜（45～50）	北西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⓣ	TB5（文科省ほか(2015)で示された断層）	29km	能登半島東方沖の断層 90 km	106km	NE-SW	南東傾斜（25～45）	北西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⓤ	TB6（文科省ほか(2015)で示された断層）	17km						
	ⓥ	JO1（文科省ほか(2015)で示された断層）	22km						
	ⓦ	JO2（文科省ほか(2015)で示された断層）	28km						
	ⓧ	JO3（文科省ほか(2015)で示された断層）	17km						
	ⓨ	FU1（文科省ほか(2015)で示された断層）	6.7km	石川県西方沖の断層 65 km	106km	NE-SW	北西傾斜（50～60）	北西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。
	ⓩ	FU2（文科省ほか(2015)で示された断層）	21km						
	ⓐⓑ	FU3（文科省ほか(2015)で示された断層）	21km						
	ⓐⓒ	NT2・NT3	64km	－	126km	NE-SW	北西傾斜（45～50）	北西側隆起の逆断層	後期更新世以降の活動が否定できない。

※1：[ ]内の長さは文献に示された長さ
※2：敷地と断層の両端点を結んだ線分の中点の距離から算出

余白

参考文献

黒下線は査読付きの論文を示す。

■跡津川断層トレンチ発掘調査団・岡田篤正・竹内 章・佃 為成・池田安隆・渡辺満久・平野信一・升本真二・竹花康夫・奥村晃史・神嶋利夫・小林武彦・安藤雅孝(1989):岐阜県宮川村野首における跡津川断層のトレンチ発掘調査, 地学雑誌, 98, 440-463.

■粟田泰夫・佃 栄吉(1993):最近1 万年における跡津川断層の活動, 日本地震学会講演予稿集, 2, 199-199.

■吾妻崇・杉戸信彦・水野清秀・堤浩之・下川浩一(2004):邑知潟断層帯・石動山断層の活動履歴調査(その2／本江地区), 活断層・古地震研究報告, 4, 103-112.

■吾妻崇・杉戸信彦・水野清秀(2005):邑知潟断層帯眉丈山第2断層におけるトレンチ掘削調査, 活断層・古地震研究報告, 5, 77-83.

■土木学会(1985):「原子力発電所地質・地盤の調査・試験法および地盤の耐震安定性の評価手法」報告書, 第2編地質調査法, 土木学会原子力土木委員会.

■福井県(2012):福井県における津波シミュレーション結果について, 平成24年9月3日, 福井県危機対策・防災課.

■福井県(1999):平成10年度地震関係基礎調査交付金　福井平野東縁断層帯に関する調査(剣ヶ岳断層, 細呂木断層, 篠岡断層, 松岡断層, 福井地震断層, 福井東側地震断層)　成果報告書, 70p.

■福島洋・石村大輔・高橋直也(2024):令和6年能登半島地震(M7.6)のSAR画像解析による地盤変動の特徴, https://yofuku.github.io/files/column_20240109_2024Noto.html.

■Fukushima,Y., Ishimura, D., Takahashi, N., Iwasa, Y., Malatesta, L., Takahashi, T., Tang, C., Yoshida, K., Toda, S.(2024):Landscape changes caused by the 2024 Noto Peninsula earthquake in Japan, Science Advances, 10, eadp9193(2024).

■後藤秀昭・中埜貴元・小山拓志・山中蛍(2020):1:25,000　活断層図「下梨」, 国土地理院.

■後藤秀昭・岡田篤正・熊原康博・堤浩之・山中崇希(2019):1:25,000　活断層図「白川村」, 国土地理院.

■後藤秀昭・岡田真介・楮原京子・杉戸信彦・平川一臣(2015):1:25,000　都市圏活断層図「高岡」, 国土地理院.

■ Goto, H., Yamanaka, T., Makita, T., Iwasa, I., Ogura, T., Kagohara, K., Kumahara, Y., Suzuki, Y., Yasuhiro S., Matta, N., Aoki, T., Mori, W., Haranishi, K., Nakata, T.(2025):Coast uplifted by nearby shore-parallel active submarine faults during the 2024 Mw 7.5 Noto Peninsula earthquake, Geomorphology, 493, 110069, https://doi.org/10.1016/j.geomorph.2025.110069.

■Hiramatsu, Y., Sawada, A., Kobayashi, W., Ishida, S., Hamada, M.(2019):Gravity gradient tensor analysis to an active fault: a case study at the Togi-gawa Nangan fault, Noto Peninsula, central Japan. Earth, Planets and Space, 71:107,8.

■廣内大助・澤 祥・杉戸信彦・鈴木康弘・松多信尚(2018):1:25,000　活断層図「大町　改訂版」, 国土地理院.

■廣内大助・澤祥・松多信尚・安江健一(2020):1:25,000　活断層図「信濃池田　改訂版」, 国土地理院.

■北陸農政局計画部(1980):地盤沈下調査・邑知平野地区調査報告書(168p), 調査資料集(499p), 付図(2 葉).

■星住英雄・宝田晋治・宮縁育夫・宮城磯治・山崎雅・金田泰明・下司信夫 (2023):阿蘇カルデラ阿蘇4火砕流堆積物分布図, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

■本多亮・澤田明宏・古瀬慶博・工藤健・田中俊行・平松良浩(2012):金沢大学重力データベースの公表, 測地学会誌, 58, 4, 153-160.

■池田安隆・今泉俊文・東郷正美・平川一臣・宮内崇裕・佐藤比呂志(編)(2002):第四紀逆断層アトラス, 東京大学出版会.

■池田安隆・澤祥・中田高・松多信尚(2003):1:25,000　都市圏活断層図「伊那」, 国土地理院.

■今泉俊文・澤祥・東郷正美・池田安隆(1998):1:25,000　都市圏活断層図「甲府」, 国土地理院.

■今泉俊文・宮内崇裕・堤浩之・中田高(編)(2018):活断層詳細デジタルマップ[新編], 東京大学出版会.

■井上大栄・宮越勝義・上田圭一・宮脇明子・松浦一樹(2002):2000年鳥取県西部地震震源域の活断層調査, 地震2, 54, 557-573.

■井上卓彦・村上文敏・岡村行信・池原研(2007):2007年能登半島地震震源域の海底活断層, 東京大学地震研究所彙報, 82, 301-312.

■井上卓彦・岡村行信(2010):能登半島北部周辺20万分の1海域地質図及び説明書, 海陸シームレス地質情報集「能登半島北部沿岸域」, 数値地質図S-1, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

■井上卓彦・尾崎正紀・岡村行信(2010):能登半島北部域20万分の1海陸シームレス地質図及び断面図, 海陸シームレス地質情報集「能登半島北部沿岸域」, 数値地質図S-1, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

■石田聡史・宮本慎也・吉田進(2018):志賀原子力発電所前面海域における海底重力探査の概要, 電力土木2018年11月号, 398, 110-114.

■石田聡史・木村慎吾・野原幸嗣・浜田昌明・高山陶子・吉田崇博・山口弘幸・平松良浩(2024):航空レーザ計測データを用いた令和6年能登半島地震に伴う地形変化の特徴, 日本地震学会2024年度秋季大会, S03P-06 .

参考文献

黒下線は査読付きの論文を示す。

■石川県(1997):平成8 年度地震調査研究交付金 森本断層系に関する調査　成果報告書, 165p.

■石川県(1998):平成9 年度地震関係基礎調査交付金 森本・富樫断層帯に関する調査　成果報告書, 156p.

■石川県(1999):平成10 年度地震関係基礎調査交付金 森本・富樫断層帯に関する調査　成果報告書, 94p.

■石川県(2012):石川県津波浸水想定区域図の作成について

■岩崎貴哉(2008):　新潟県中越沖地震から1年-[その3](最終回)　新潟県中越沖地震の余震分布と震源断層, 地震本部ニュース2008年12月号, 10-12.

■地震調査委員会(2004a):跡津川断層帯の長期評価について, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2004b):庄川断層帯の長期評価について, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2005a):邑知潟断層帯の長期評価について, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2005b):牛首断層帯の長期評価について, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2007a):魚津断層帯の長期評価について, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2007b):山形盆地断層帯の長期評価の一部改訂について, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2008a):平成19年(2007年)新潟県中越沖地震の評価(主に断層面に関する評価), 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2008b):砺波平野断層帯・呉羽山断層帯の評価(一部改訂), 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2009):福井平野東縁断層帯の長期評価の一部改訂について, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2010):「活断層の長期評価手法(暫定版)」報告書, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2011):新庄盆地断層帯の長期評価の一部改訂について, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2013a):森本・富樫断層帯の長期評価の一部改訂について, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2013b):佐賀平野北縁断層帯の長期評価, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2015):糸魚川-静岡構造線断層帯の長期評価(第二版), 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2021):全国地震動予測地図2020年版　地図編, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2024a):日本海側の海域活断層の長期評価ー兵庫県北方沖～新潟県上越地方沖-(令和6年8月版), 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2024b):令和6年能登半島地震の評価, 令和6年2月9日, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2024c):2024年8月の地震活動の評価, 令和6年9月10日, 地震調査研究推進本部.

■地震調査委員会(2025):日本海中南部の海域活断層の長期評価 (第一版) ー近畿地方・北陸地域北方沖- , 地震調査研究推進本部.

■上嶋正人・木川栄一・駒澤正夫(2002):能登半島東方ブーゲー重力異常図, 海洋地質図, no. 59 (CD),産業技術総合研究所地質調査総合センター.

■海上保安庁水路部(1982):昭和56年日本海上保安庁水路部の測量, 七尾湾, 第6334号, 7-S.

■金田平太郎・岡田篤正・岡田真介・小山拓志・宮内崇裕(2019):1:25,000　活断層図「立山」, 国土地理院.

■気象庁:潮汐・海面水位に関する診断表、データ, https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/shindan/index_tide.html.

■紬野 義夫・坂本 亨・石田 志朗(1961):北陸東部の新第三紀地史に関する一試論, 槇山次郎教授記念論文集, 83-95.

■紬野 義夫(編)(1965):能登半島の地質, 能登半島学術調査書, 第1部, 石川県, 84 p, 付図(7 万5 千分の1 能登半島の地質図, 断面図ほか).

■紬野義夫(1981):5 万分の1 表層地質図「氷見」及び同説明書(各論 Ⅱ表層地質図), 土地分類基本調査「氷見」, 石川県, 21ー31.

■紬野義夫(1993):石川県地質誌新版・石川県地質図(10万分の1)説明書, 石川県・北陸地質研究所.

■片川秀基・大村一夫・中村俊夫(1995):邑知潟平野北西縁のリニアメントと断層, 第四紀研究, 34, 9-18.

■加藤碩一・杉山雄一(編)(1985):50万分の1活構造図「金沢」, 地質調査所.

参考文献

黒下線は査読付きの論文を示す。

■活断層研究会（編）（1991）：新編日本の活断層－分布図と資料－，東京大学出版会.

■勝又護・徳永規一（1971）：震度Ⅳの範囲と地震の規模および震度と加速度の対応，験震時報，第36巻，第3，4号，1-8.

■木村敏雄・恒石幸正（1978）：太田陽子・松田時彦・平川一臣著「能登半島の活断層」に対して，第四紀研究，17（1），39-42.

■小林知勝・宗包浩志・石本正芳(2025)：人工衛星から視る令和6年能登半島地震の地殻変動と断層運動,活断層研究, 62, 11-15.

■小池一之・町田洋（編）（2001）：日本の海成段丘アトラス，東京大学出版会.

■国土地理院（2006）：<http://vldb.gsi.go.jp/sokuchi/gravity/grv_serach/gravity.pl>，（参照2006-12-21）.

■国土地理院（2025）：http://maps.gsi.go.jp，（参照2025-10-28）.

■熊原康博・石村大輔・金田平太郎・小山拓志（2020）：1:25,000　活断層図「白鳥」，国土地理院.

■熊原康博・岡田篤正・後藤秀昭・堤浩之・松多信尚（2019）：1:25,000　活断層図「飛騨古川」，国土地理院.

■藏下英司・酒井慎一・津村紀子・篠原雅尚（2025）：令和6年能登半島地震震源域最西端における海陸統合地震観測，日本地球惑星科学連合2025年大会，SSS12-P11.

■Kusumoto, S.(2016)：Dip distribution of Oita-Kumamoto Tectonic Line Located in central Kyushu, Japan, estimated by eigenvectors of gravity gradient tensor, Earth Planets and Space, 68:1,153.

■町田洋・松田時彦・梅津正倫・小泉武栄（編）（2006）：日本の地形5 中部，東京大学出版会.

■町田洋・新井房夫（2011）：新編火山灰アトラス[日本列島とその周辺]（第2刷），東京大学出版会.

■松多信尚・石村大輔・楮原京子・後藤秀昭・廣内大助（2018）：1:25,000　活断層図「白馬岳　改訂版」，国土地理院.

■松多信尚・岡田篤正・岡田真介・澤祥・平川一臣・廣内大助・八木浩司（2016）：1:25,000　都市圏活断層図「鶴来」，国土地理院.

■松多信尚・澤祥・鈴木康弘・中埜貴元・廣内大助（2021）：1:25,000　活断層図「諏訪　改訂版」，国土地理院.

■松田時彦(1975)：活断層から発生する地震の規模と周期について，地震 第2輯，28，269-283.

■松田時彦（1990）：最大地震規模による日本列島の地震分帯図，地震研究所彙報，65，289-319.

■松田時彦・塚崎朋美・萩谷まり（2000）：日本陸域の主な起震断層と地震の表－断層と地震の地方別分布関係－，活断層研究，19，33-54.

■水野清秀・下川浩一・吾妻崇・杉山雄一・片川秀基・柴田俊治・吉田進・浜田昌明（2003）：浅層反射法地震探査とボーリングによる邑知潟断層帯南縁部の地下構造調査，活断層・古地震研究報告，3，33-46.

■宮下由香里・吉岡敏和・桑原拓一郎・苅谷愛彦，藤田浩司・千葉達朗(2003)：牛首断層南西部地域の活動履歴調査（2）－トレンチ調査結果（速報）－，活断層・古地震研究報告，3，63-71.

■宮下由香里・吉岡敏和・桑原拓一郎・斉藤勝・小林健太・苅谷愛彦，藤田浩司・千葉達朗 (2004a)：牛首断層南西部地域の活動履歴調査（3）－牛首・水無トレンチ調査結果－，活断層・古地震研究報告，4，113-130.

■宮下由香里・吉岡敏和・二階堂学・高瀬信一・橘徹(2004b)：牛首断層北東部地域の活動履歴調査－上白木峰トレンチ調査結果－，活断層・古地震研究報告，4，131-142.

■宮内崇裕・岡田篤正・金田平太郎・澤祥・中埜貴元（2019）：1:25,000　活断層図「有峰湖」，国土地理院.

■文部科学省研究開発局・国立大学法人京都大学防災研究所（2023）：森本・富樫断層帯における重点的な調査観測　令和4年度成果報告書.

■文部科学省研究開発局・国立大学法人京都大学防災研究所（2024）：森本・富樫断層帯における重点的な調査観測　令和5年度成果報告書.

■文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所（2015）：日本海地震・津波調査プロジェクト　平成26年度　成果報告書.

■文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所（2016）：日本海地震・津波調査プロジェクト　平成27年度　成果報告書.

■文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所（2017）：日本海地震・津波調査プロジェクト　平成28年度　成果報告書.

■文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所（2020）：富士川河口断層帯における重点的な調査観測　平成29年～令和元年度　成果報告書.

■文部科学省研究開発局・国立大学法人京都大学防災研究所（2023）：森本・富樫断層帯における重点的な調査観測　令和4年度　成果報告書.

■文部科学省研究開発局・国立大学法人京都大学防災研究所（2024）：森本・富樫断層帯における重点的な調査観測　令和5年度　成果報告書.

■森宏・阿部信太朗・青柳恭平・大上隆史 (2019)：1993年北海道南西沖地震震源域南部の地質構造と震源断層の関係，地震 第2輯，71，233-241.

参考文献

黒下線は査読付きの論文を示す。

■村松郁栄(1969):深度分布と地震のマグニチュードの関係, 岐阜大学教育学部研究報告, 自然科学, 第4巻, 第3号, 168-176.

■村田泰章・宮川歩夢・駒澤正夫・名和一成・大熊茂雄・上嶋正人・西村清和・岸本清行・宮崎光旗・志知龍一・本多亮・澤田明宏(2018): 金沢地域重力図(ブーゲー異常), 重力図, no. 33, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

■中埜貴元・石村大輔・後藤秀昭・山中崇希(2020):1:25,000 活断層図「白山」, 国土地理院.

■中埜貴元・山中蛍・楮原京子・金田平太郎・澤祥(2023):1:25,000 活断層図「韮崎 改訂版」, 国土地理院.

■中田高・今泉俊文(編)(2002):活断層詳細デジタルマップ, 東京大学出版会.

■那須信治(1949):福井地震に伴った断層に就て, 昭和23 年福井地震調査研究速報, 日本学術会議・福井地震調査研究特別委員会, 69-71.

■Nasu, N.,(1950):Investigation of the Seismic Fault., Tsuya, H., ed, "The Fukui Earthquake of June 28, 1948, Report of the special committee for the study of the Fukui Earthquake", 112-123.

■日本第四紀学会(編)(1987):日本第四紀地図, 東京大学出版会.

■日本第四紀学会(2010):第四紀と更新世の新しい定義と関連する地質時代・年代層序の用語について, http://quaternary.jp/news/teigi09.html.

■日本海における大規模地震に関する調査検討会(2014):日本海における大規模地震に関する調査検討会報告書.

■日本海における大規模地震に関する調査検討会 海底活断層ワーキンググループ(2014):日本海における大規模地震に関する調査検討会 海底活断層ワーキンググループ 報告書.

■日本水路協会 (2011) : 海底地形デジタルデータM7000シリーズ, M7011.

■日本水路協会 (2016) : 海底地形デジタルデータM7000シリーズ, M7012.

■岡村行信(2002):20万分の1能登半島東方海底地質図及び同説明書, 海洋地質図, no.59(CD), 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

■岡村行信(2007a):20 万分の1能登半島西方海底地質図及び同説明書, 海洋地質図, no.61(CD), 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

■岡村行信(2007b):能登半島及びその周辺海域の地質構造発達史と活構造, 活断層・古地震研究報告, No.7, P.197-207.

■岡村行信(2007c):能登半島周辺の地質構造と地震との関係, 活断層研究センターニュース, 66, 1-3.

■大竹政和・平朝彦・太田陽子編(2002):日本海東縁の活断層と地震テクトニクス, 東京大学出版会.

■太田陽子・国土地理院地理調査部(1997):「能登半島」1:100,000, 地殻変動土地条件図, 国土地理院技術資料, D.1-No.347, 国土地理院.

■太田陽子・松田時彦・平川一臣(1976):能登半島の活断層, 第四紀研究, 15, 109-128.

■太田陽子・平川一臣(1979):能登半島の海成段丘とその変形, 地理学評論, 52-4, 169-189.

■邑知潟土地改良区(2024):令和6年能登半島地震被害状況, https://www.outigata.or.jp/, 2024年11月13日閲覧.

■尾崎正紀(2010):能登半島北部の20万分の1地質図及び説明書, 海陸シームレス地質情報集「能登半島北部沿岸域」, 数値地質図S-1, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

■尾崎正紀・井上卓彦・高木哲一・駒澤正夫・大熊茂雄(2019):20万分の1地質図幅「輪島」(第2版), 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

■Peng, Z., Lei, X., Wang, Q.Y., Wang, D., Mach, P., Yao, D., Kato, A., Obara, K., Campillo, M.(2025):The evolution process between the earthquake swarm beneath the Noto Peninsula, central Japan and the 2024 M 7.6 Noto Hanto earthquake sequence, Earthquake Research Advances, 5, 100332.

■坂本 亨・今井 功・水野 篤行・角 靖夫・井上 正昭(1959):富山積成盆地南縁部の新生界, 地質調査所月報, 10,75-82.

■桜井操・佐藤任弘・田口広・永野真男・内田摩利夫(1971):能登半島西方大陸棚の海底地形と地質構造, 地質学雑誌, 77, 10, 645-651.

■産業技術総合研究所(2005):産総研TODAY, 産業技術総合研究所, Vol.5, No.7.

■産業技術総合研究所(2008a):森本・富樫断層帯の活動性および活動履歴調査「基盤的調査観測対象断層帯の追加・補完調査」成果報告書, No. H19-3.

■産業技術総合研究所(2008b):福井平野東縁断層帯の活動性および活動履歴調査「活断層の追加・補完調査」成果報告書, No.H19-8, p29.

■産業技術総合研究所(2011):邑知潟断層帯の活動性および活動履歴調査「活断層の追加・補完調査」成果報告書, No.H22-2.

■産業技術総合研究所地質調査総合センター(2013):日本重力データベースDVD版, 数値地質図P-2, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

参考文献

黒下線は査読付きの論文を示す。

■産業技術総合研究所地質調査総合センター：活断層データベース〈https://gbank.gsj.jp/activefault/〉（参照2021-4-21）.

■佐藤比呂志（2024）：能登半島周辺のテクトニクスと震源断層，日本地震学会広報誌「なゐふる」，No.138，4-5.

■佐藤比呂志・岩崎貴哉・金沢敏彦・宮崎真一・加藤直子・酒井慎一・山田知朗・宮内崇裕・伊藤谷生・平田直(2007a)：反射法地震探査・余震観測・地殻変動から見た2007 年能登半島地震の特徴について，東京大学地震研究所彙報，82，369-379.

■佐藤比呂志・阿部進・斉藤秀雄・加藤直子・伊藤谷生・川中卓(2007b)：二船式による2007年能登半島地震震源域の反射法地震探査，東京大学地震研究所彙報，82，275-299.

■澤田明宏・平松良浩・小林航・浜田昌明（2021）：重力異常解析による眉丈山第2断層の断層構造の推定，Japan Geoscienece Union Meeting 2021，SSS10-P05.

■Sawaki, Y., Shiina, T., Sagae, K., Sato, Y., Horikawa, H., Miyakawa, A., Imanishi, K., Uchida, T.(2025)：Fault Geometries of the 2024 Mw 7.5 Noto Peninsula Earthquake From Hypocenter-Based Hierarchical Clustering of Point-Cloud Normal Vectors, Journal of Geophysical Research: Solid Earth, 130, 4.

■清水文健・宮城豊彦・井口隆・大八木規夫（2001）：地すべり地形分布図 第12 集「金沢・七尾・輪島」，防災科学研究所研究資料，210，24 葉.

■下川浩一・水野清秀・杉山雄一・片川秀基・柴田俊治（2002）：石川県羽咋市付近における邑知潟断層帯の反射法地震探査，活断層・古地震研究報告，2，69-79.

■Shinohara, M., Hino, R., Takahashi, T., Obana, K., Kodaira, S., Azuma, R., Yamada, T., Akuhara, T., Yamashita, Y., Kurashimo, E., Murai, Y., Isse, T., Nakahigashi, K., Baba, H., Ohta, Y., Ito, Y., Yakiwara, H., Nakatani, Y., Fujie, G., Sato, T., Shiobara, H., Mochizuki, K., Sakai, S., The R/V Hakuho-maru KH-24-JE01 and KH-24-JE02C shipboard science parties（2025）：Precise aftershock activity in the marine source region of the 2024 Noto-Hanto earthquake by rapid response observation using ocean bottom seismometers, Earth, Plamets and Space, 77:43.

■Siddall, M., Chappell, J., Potter E. K.（2006）: Eustatic sea level during past interglacials, Sirocko, F., Litt, T., Claussen, M., Sanchez-Goni, M. F. editors. The climate of past interglacials, Elsevier, Amsterdam, 75-92.

■杉戸信彦・池田安隆・今泉俊文・堤浩之・東郷正美（2010）：1:25,000　都市圏活断層図「邑知潟」，国土地理院.

■杉戸信彦・石村大輔・澤祥・鈴木康弘・山中蛍（2022）：1:25,000　活断層図「茅野　改訂版」，国土地理院.

■杉戸信彦・水野清秀・堤浩之・吾妻崇・下川浩一・吉岡敏和（2004）：邑知潟断層帯・石動山断層の活動履歴調査（その1／水白地区），活断層・古地震研究報告，4，85-101.

■杉戸信彦・岡田篤正・熊木洋太・田力正好・中田高（2019）：1:25,000　都市圏活断層図「船津」，国土地理院.

■杉山雄一・粟田泰夫・佃 栄吉（1991a）：御母衣断層系の完新世断層活動と1586 年天正地震ートレンチ掘削調査による検討ー，地震学会講演予稿集，260-260.

■杉山雄一・粟田泰夫・佃 栄吉（1991b）：御母衣断層系の完新世断層活動と1586 年天正地震ートレンチ掘削調査による検討ー，地震，第2輯，44，283-295.

■杉山雄一・粟田泰夫・佃 栄吉（1993a）：1990 年御母衣断層系・三尾河断層（寺河戸地区）トレンチ調査，活断層研究，11，71-77.

■杉山雄一・粟田泰夫・佃 栄吉（1993b）：1990 年御母衣断層系・白川断層（木谷地区）トレンチ調査，活断層研究，11，65-70.

■鈴木宇耕（1979）：東北裏日本海域の石油地質，石油技術協会誌，44，5.

■鈴木康弘・千田昇・廣内大助・松多信尚（2020）：1:25,000　活断層図「松本　改訂版」，国土地理院.

■鈴木康弘・渡辺満久（2024a）：富来川南岸断層に沿う地震断層の発見，日本地理学会災害対応委員会，http://disaster.ajg.or.jp/files/202401_Noto011.pdf.

■鈴木康弘・渡辺満久（2024b）：令和6年能登半島地震における富来川南岸断層の活動とその意義，日本地球惑星科学連合2024 年大会予稿集，HDS09-10.

■鈴木康弘・渡辺満久（2024c）：令和6年能登半島地震をめぐる予測の課題，科学，2024年7月号，pp.639-645.

■先名重樹(2025)：令和6年能登半島地震における液状化地点分布と特徴，地盤工学会災害調査論文報告集，3，1，137-150.

■高橋秀暢・青柳恭平・木村治夫（2024）：稠密地震観測に基づく2024年能登半島地震の余震分布，日本地震学会2024年度秋季大会，S22P-01.

■宝田晋治・西原歩・星住英夫・山崎雅・金田泰明・下司信夫（2022）：姶良カルデラ入戸火砕流堆積物分布図，産業技術総合研究所 地質調査総合センター.

■高山陶子・船越和也・千葉達郎（2021）：3-②　2時期の航空レーザ計測による平成28年熊本地震の変位分析，写真測量とリモートセンシング，Vo.60-5，pp244-247.

■Takeuchi, A., Hasbaator, O., Takebe, A. (2003)：Recurrence interval of big earthquakes along the Atotsugawa fault system, central Japan: Results of seismo-geological survey., Geophysical Research Letters, Vol.30,No.6,8011,doi:10.1029/2002GL014957.

■竹内 章・和田博夫・三雲 健・神嶋利夫・中村俊夫・酒井英男（1990）：跡津川断層縦走．地質学会第97 年年会見学旅行案内書，85-110.

■竹内誠・長森英明・古川竜太・及川輝樹・坂野靖行・宮川歩夢（2023）：20万分の1地質図幅「富山」（第2版），産業技術総合研究所地質調査総合センター.

参考文献

黒下線は査読付きの論文を示す。

■田力正好・岡田篤正・杉戸信彦・中田高・山中崇希(2019):1:25,000　活断層図「白木峰」, 国土地理院.

■田中隆(1979):北陸・山陰沖の堆積盆地の分布と性格, 石油技術協会誌, 44, 5 .

■The Gravity Research Group in Southwest Japan (2001): Gravity measurements and database in southwest Japan, Gravity Database of Southwest Japan (CD-ROM), Bull. Nagoya University Museum, Special Rep., No.9.

■遠田晋次・粟田泰夫(2007):能登半島地震は長期予測可能であったか, 日本地球惑星科学連合2007 年大会予稿集, Z255-P003.

■東郷正美・池田安隆・今泉俊文・澤祥(1998):1:25,000　都市圏活断層図「金沢」, 国土地理院.

■東郷正美・岡田篤正・堤浩之・石山達也・小野塚良三(2001):1:25,000　都市圏活断層図「福井」, 国土地理院.

■徳山英一・本座栄一・木村政昭・倉本真一・芦寿一郎・岡村行信・荒戸裕之・伊藤康人・徐垣・日野亮太・野原壮・阿部寛信・坂井真一・向山建二郎(2001):日本周辺海域中新世最末期以降の構造発達史, 海洋調査技術, 13-1, 27-53.

■富山大学 地域地盤環境研究所 (2011):沿岸海域における活断層調査 呉羽山断層帯(海域部) 成果報告書.

■富山県(1999):平成10年度地震関係基礎調査交付金　砺波平野断層帯に関する調査　成果報告書, 120p.

■富山県(2000a):平成11 年度地震関係基礎調査交付金　砺波平野断層帯に関する調査　成果報告書, 173p.

■富山県(2000b):砺波平野断層帯に関する調査, 第4 回活断層調査成果報告会予稿集, 科学技術庁, 69-78.

■堤浩之・石山達也・杉戸信彦・中田高・平川一臣(2010):1:25,000　都市圏活断層図「邑知潟西南部」, 国土地理院.

■堤浩之・岡田篤正・後藤秀昭・澤祥・杉戸信彦・東郷正美・宮内崇裕(2008):1:25,000　都市圏活断層図「高山西南部」, 国土地理院.

■堤浩之・東郷正美・渡辺満久・中村洋介(2002):1:25,000　都市圏活断層図「富山」, 国土地理院.

■堤浩之・東郷正美・今泉俊文・中村洋介・金田平太郎・廣内大助(2003):1:25,000　都市圏活断層図「砺波」, 国土地理院.

■渡辺満久・中村優太・鈴木康弘(2015):能登半島南西岸変動地形と地震性隆起, 地理学評論, 88-3, 235-250.

■Wessel, P., Smith, W.H.F.(1998): New, improved version of the generic mapping tools released. Eos. Trans. AGU 79, 579.

■Yamada, T., Ohta, Y., Nishimura, T., Yoshida, K., Hiramatsu, Y., Kinoshita, Y. (2025):Coseismic slip distribution of the 2024 Noto Peninsula earthquake deduced from dense global navigation satellite system network and interferometric synthetic aperture radar data: effect of assumed dip angle, Earth Planets Space, 77:19, 1-16.

■山本博文・上嶋正人・岸本清行(2000):20万分の1　ゲンタツ瀬海底地質図及び同説明書, 海洋地質図, 50, 地質調査所.

■Yamamoto, A., Shichi, R., Kudo, T.(2011): Gravity database of Japan (CD-ROM), Earth Watch Safety Net Research Center, Chubu Univ., Special Publication, No.1.

■吉見雅行・丸山正(2024):第九報　2024年能登半島地震の緊急調査報告(陸域に出現した地表変状の現地調査), 産業技術総合研究所地質総合センター, https://www.gsj.jp/hazards/earthquake/noto2024/noto2024-09.html.

■吉岡敏和・粟田泰夫・下川浩一・杉山雄一・伏島祐一郎(編)(2005):全国主要活断層活動確率地図及び説明書, 構造図(14), 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

巻末資料

設置変更許可申請以降に公表された知見

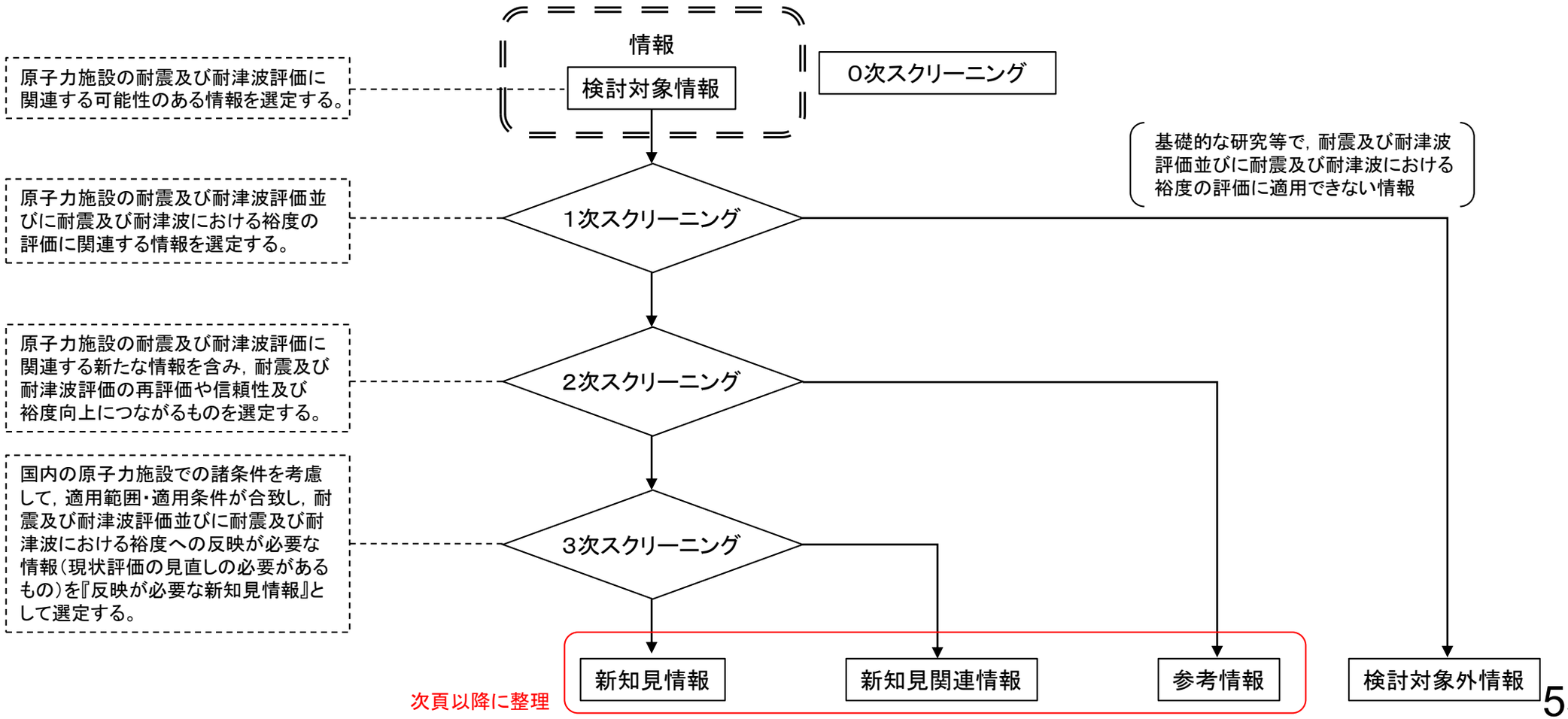
〇設置変更許可申請（2014年8月）以降に公表された最新知見については，以下のプロセスで文献調査を行った。
〇調査の結果，参考情報，新知見関連情報及び新知見情報に分類された知見のうち，公的機関による報告書，査読付き論文を中心に次頁～P.562に整理した。敷地周辺断層の評価に関連する知見として90件，令和6年能登半島地震に関連する知見として76件確認している（2025年10月時点，引き続き情報を収集）。
〇なお，令和6年能登半島地震に係る主な報告会等の一覧はP.563，564に整理した。

【主な情報収集範囲】

〇各検討項目に関連し，「複数の専門家による客観的な評価が掲載されている国内外の最新の文献・論文を扱う学会」及び「公的機関」

- 日本地震学会
- 日本第四紀学会
- 日本海洋学会
- 地盤工学会
- 日本地球惑星科学連合
- 地震調査研究推進本部
- 経済産業省
- 海上保安庁
- 日本地震工学会
- 日本地質学会
- 日本火山学会
- 土木学会
- 歴史地震研究会
- 地震予知連絡会
- 産業技術総合研究所
- 中央防災会議等
- 日本活断層学会
- 日本地理学会
- 日本計算工学会
- 日本コンクリート工学会
- 海外学術論文
- 環境省
- 気象庁

【最新知見の調査プロセス】
〇広く「活断層」に関連する知見を収集
〇収集した知見に対し，陸域の活断層のうち志賀サイトに関連する知見を絞り込み
〇過去に説明済みの評価に，反映が必要となる知見を抽出



敷地周辺断層の評価に関連する知見（1／4）

No.	文献名
1	Ishikawa, T., Hirono, T., Matsuta, N., Kawamoto, K., Fujimoto, K., Kameda, J., Nishio, Y., Maekawa, Y., Honda, G.(2014)：Geochemical and mineralogical characteristics of fault gouge in the Median Tectonic Line, Japan: evidence for earthquake slip, Earth, Planets and Space,Vol.66:36.
2	木村治夫・松浦旅人・林 泰幸・市川清士(2014)：下北半島尻屋崎の海成段丘における地中レーダー探査，地学雑誌,Vol.124,No.1,p.101-126.
3	日本海における大規模地震に関する調査検討会(2014)：日本海における大規模地震に関する調査検討会報告書.
4	日本海における大規模地震に関する調査検討会　海底活断層ワーキンググループ(2014)：日本海における大規模地震に関する調査検討会　海底活断層ワーキンググループ　報告書.
5	文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所(2014)：日本海地震・津波調査プロジェクト　平成25年度　成果報告書.
6	竹本仁美・吾妻崇(2014)：花粉化石群集の変動から推定される邑知潟断層帯石動山断層の活動間隔，活断層研究，No.41，p.1-10.
7	内山庄一郎・中田高・井上公・熊原康博・杉田暁・井筒潤・後藤秀昭・福井弘道・鈴木比奈子・谷口薫(2014)：小型UAVとSfMソフトウェアを用いた断層変位地形把握の試み ー根尾谷断層水鳥断層崖を例にー，活断層研究，No.40，pp35-42.
8	後藤秀昭(2015)：SfM(Structure from Motion)-MVS(Multi-Video Stereo)技術を用いた変位地形の数値表層モデルの作成と変位量の計測－1970年代撮影の空中写真およびポールカメラの写真を用いた検討—，活断層研究，No.42，p.73-83.
9	後藤秀昭・岡田真介・楮原京子・杉戸信彦・平川一臣(2015)：1:25,000　都市圏活断層図「高岡」，国土地理院.
10	廣内大助・松多信尚・杉戸信彦・熊原康博・石黒聡士・金田平太郎・後藤秀昭・楮原京子・中田高・鈴木康弘・渡辺満久・澤祥・宮内崇裕・2014年神城断層地震変動地形調査グループ(2015)：糸魚川－静岡構造線北部に出現した2014年長野県北部の地震(神城断層地震)の地表地震断層，活断層研究，No.43，p.149-162.
11	地震調査委員会(2015)：糸魚川-静岡構造線断層帯の長期評価(第二版)，地震調査研究推進本部.
12	小松原 琢(2015)：活断層の変位速度からみた日本弧のプレート配置—特にアムールプレート南東縁に関して—，活断層研究，No.43，p.17-34.
13	丸山正・遠田晋次・小俣雅志・郡谷順英・森良樹(2015)：糸魚川－静岡構造線活断層系松本盆地東縁断層の完新世後半の活動履歴－長野県池田町花見北地点のトレンチ調査－，活断層研究，No.43，p.35-52.
14	Maruyama, S., Hattori, K., Hirata, T., Danhara, T.(2015)：A proposed methodology for analyses of wide-ranged elements in volcanic glass shards in widespread Quaternary tephras, Quaternary International, Vol.397, P.267-280.
15	文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所(2015)：日本海地震・津波調査プロジェクト　平成26年度　成果報告書.
16	杉戸信彦・谷口薫・松多信尚・澤祥・田力正好・野澤竜二郎・皆黒剛(2015)：白馬村北城新田および大出における神城断層の平均変位速度と活動時期の検討，活断層研究，No.43，p.109-118.
17	渡辺満久・中村優太・鈴木康弘(2015)：能登半島南西岸変動地形と地震性隆起，地理学評論，88-3，235-250.
18	Hamada, M., Hiramatsu, Y., Oda, M., Yamaguchi, H.(2016): Fossil tubeworms link coastal uplift of the northern Noto Peninsula to rupture of the Wajima-oki fault in AD 1729. Tectonophysics, 670, 38-47.
19	勝部 亜矢・近藤 久雄・谷口 薫・加瀬 祐子(2016)：2014年長野県北部の地震(Mw6.2)に伴う地表地震断層の分布と変位量，地質学雑誌，第123巻，第1号，p.1-21.
20	松多信尚・岡田篤正・岡田真介・澤祥・平川一臣・廣内大助・八木浩司(2016)：1:25,000　都市圏活断層図「鶴来」，国土地理院.
21	Miyakawa, A. and Otsubo, M.(2016)：Evolution of crustal deformation in the northeast-central Japanese island arc: Insights from fault activity, Island Arc, 26-2, DOI: 10.1111/iar.12179.
22	文部科学省研究開発局・国立大学法人東北大学災害科学国際研究所(2016)：糸魚川－静岡構造線断層帯における重点的な調査観測(追加調査)，平成27年度成果報告書.
23	文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所(2016)：日本海地震・津波調査プロジェクト　平成27年度　成果報告書.
24	日本水路協会 (2016)：海底地形デジタルデータM7000シリーズ，M7012.
25	野徹雄・平松孝晋・佐藤壮・三浦誠一・千葉達朗・上山沙恵子・壱岐信二・小平秀一(2016)：日本海及びその周辺の地形データの統合と赤色立体地図，JAMSTEC Rep. Res. Dev.，22，13-29.

敷地周辺断層の評価に関連する知見（2／4）

No.	文献名
26	相山 光太郎・田中 姿郎・佐々木 俊法（2017）：断層破砕帯の詳細構造解析に基づく断層の活動性の検討：山田断層の例，応用地質，第58巻，第1号，p.2-18.
27	文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所（2017）：日本海地震・津波調査プロジェクト　平成28年度　成果報告書.
28	Ishiyama, T., Kato, N.,Sato, H., Koshiya S., Toda S., Kobayashi, K. (2017)：Geometry and slip rates of active blind thrusts in a reactivated back-arc rift using shallow seismic imaging: Toyama basin, central Japan, Tectonophysics, 718, 72-82.
29	地震調査委員会（2017a）：長尾断層帯の長期評価（一部改訂），地震調査研究推進本部.
30	地震調査委員会（2017b）：日出生断層帯の長期評価（第一版），地震調査研究推進本部.
31	地震調査委員会（2017c）：万年山－崩平山断層帯の長期評価（第一版），地震調査研究推進本部.
32	小林 航・浜田 昌明・山口 弘幸・高山 陶子・石神 慎太郎・平松 良浩（2017）：能登半島沿岸の海食崖に分布するタフォニ，地形，第38巻，第3号，p.213-233.
33	Kusumoto, S.（2017）：Eigenvector of gravity gradient tensor for estimating fault dips considering fault type, Earth and Planetary Science, 4:15, DOI 10.1186/s40645-017-0130-0.
34	Okada, M., Suganuma, Y., Haneda, Y., Kazaoka, O.（2017）：Paleomagnetic direction and paleointensity variations during the Matuyama-Brunhes polarity transition from a marine succession in the Chiba composite section of the Boso Peninsula, central Japan, Earth, Planets and Space , 69：45.
35	粟田泰夫（2018）：ステレオ等高線地形解析図による高解像度DEMの可視化，活断層・古地震研究報告，No.17，p.117-136.
36	廣内大助・澤 祥・杉戸信彦・鈴木康弘・松多信尚（2018）：1:25,000　活断層図「大町　改訂版」，国土地理院.
37	今泉俊文・宮内崇裕・堤浩之・中田高（編）（2018）：活断層詳細デジタルマップ［新編］，東京大学出版会.
38	石田聡史・宮本慎也・吉田進（2018）：志賀原子力発電所前面海域における海底重力探査の概要，電力土木2018年11月号，398，110-114.
39	松多信尚・石村大輔・楮原京子・後藤秀昭・廣内大助（2018）：1:25,000　活断層図「白馬岳　改訂版」，国土地理院.
40	村田泰章・宮川歩夢・駒澤正夫・名和一成・大熊茂雄・上嶋正人・西村清和・岸本清行・宮崎光旗・志知龍一・本多亮・澤田明宏（2018）：金沢地域重力図（ブーゲー異常），重力図，no. 33，産業技術総合研究所地質調査総合センター.
41	田中 義浩・亀高 正男・岡崎 和彦・鈴木 一成・瀬下 和芳・青木 和弘・島田 耕史・渡邊 貴央・中山 一彦（2018）：断層面の形態観察に基づく断層活動性評価手法の検討，応用地質，第59巻，第1号，p.13-27.
42	後藤秀昭・岡田篤正・熊原康博・堤浩之・山中崇希（2019）：1:25,000　活断層図「白川村」，国土地理院.
43	後藤憲央,佐々木俊法（2019）：河成段丘面の比高分布から推定される伏在断層の活動性―2008年岩手・宮城内陸地震震源域直上の磐井川を例に―，第四紀研究，Vol.58，no.5，p.315-331.
44	Hiramatsu, Y., Sawada, A., Kobayashi, W., Ishida, S., Hamada, M.（2019）：Gravity gradient tensor analysis to an active fault: a case study at the Togi-gawa Nangan fault, Noto Peninsula, central Japan. Earth, Planets and Space, 71:107,8.
45	金田平太郎・岡田篤正・岡田真介・小山拓志・宮内崇裕（2019）：1:25,000　活断層図「立山」，国土地理院.
46	国立研究開発法人 産業技術総合研究所（2019）：内陸及び沿岸海域の活断層調査　平成30年度の調査　1. 糸魚川－静岡構造線断層帯(中北部区間)（長野県），地震調査研究推進本部.
47	国立研究開発法人 産業技術総合研究所（2019）：内陸及び沿岸海域の活断層調査 成果報告書 概要版，地震調査研究推進本部.
48	熊原康博・岡田篤正・後藤秀昭・堤浩之・松多信尚（2019）：1:25,000　活断層図「飛騨古川」，国土地理院.
49	宮内崇裕・岡田篤正・金田平太郎・澤祥・中埜貴元（2019）：1:25,000　活断層図「有峰湖」，国土地理院.
50	文部科学省研究開発局・国立研究開発法人　産業技術総合研究所（2019）：活断層帯から生じる連動型地震の発生予測に向けた活断層調査研究　平成30年度　成果報告書.

敷地周辺断層の評価に関連する知見（3／4）

No.	文献名
51	森宏・阿部信太朗・青柳恭平・大上隆史 (2019)： 1993年北海道南西沖地震震源域南部の地質構造と震源断層の関係，地震 第2輯，71，233-241.
52	能登半島中部西海岸活断層研究グループ（2019）：段丘・海食微地形・化石からみる能登半島志賀町中部西海岸地域の後期更新世～完新世地殻変動，地球科学，vol.73，p.205-221.
53	尾崎正紀・井上卓彦・高木哲一・駒澤正夫・大熊茂雄（2019）：20万分の1地質図幅「輪島」（第2版），産業技術総合研究所地質調査総合センター.
54	杉戸 信彦・古澤 明・澤 祥・田力 正好・谷口 薫・渡辺 満久・鈴木 康弘（2019）：山梨県南アルプス市築山における糸魚川-静岡構造線断層帯南部区間の平均変位速度，地学雑誌，第128巻，第3号，p.453-464.
55	杉戸信彦・岡田篤正・熊木洋太・田力正好・中田高（2019）：1:25,000　都市圏活断層図「船津」，国土地理院.
56	田力正好・岡田篤正・杉戸信彦・中田高・山中崇希（2019）：1:25,000　活断層図「白木峰」，国土地理院.
57	柳田 誠,青柳 恭平,下釜 耕太,岡崎 和彦,佐々木 俊法（2019）：2008年岩手・宮城内陸地震の震源域における活構造評価，地学雑誌，第129巻，第1号，p.89-122.
58	Fujiwara, S., Nakano, T., Morishita, Y.（2020）：Detection of triggered shallow slips caused by large earthquakes using L-band SAR interferometry, Earth, Planets and Space　2020 72:119.
59	後藤秀昭・中埜貴元・小山拓志・山中蛍（2020）：1:25,000　活断層図「下梨」，国土地理院.
60	廣内大助・澤祥・松多信尚・安江健一（2020）：1:25,000　活断層図「信濃池田　改訂版」，国土地理院.
61	熊原康博・石村大輔・金田平太郎・小山拓志（2020）：1:25,000　活断層図「白鳥」，国土地理院.
62	文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所（2020）：富士川河口断層帯における重点的な調査観測　平成29～令和元年度　成果報告書.
63	中埜貴元・石村大輔・後藤秀昭・山中崇希（2020）：1:25,000　活断層図「白山」，国土地理院.
64	宍倉　正展・越後　智雄・行谷　佑一（2020）：能登半島北部沿岸の低位段丘および離水生物遺骸群集の高度分布からみた海域活断層の活動性，活断層研究，No.53，p.33-47.
65	鈴木康弘・千田昇・廣内大助・松多信尚（2020）：1:25,000　活断層図「松本　改訂版」，国土地理院.
66	林崎 涼・鈴木 毅彦（2021）：光ルミネッセンス年代測定法を用いた武蔵野台地西部における礫層の堆積年代測定，地理学評論，第95巻，第1号，p.25-41.
67	Iwamori, A., Takagi, H., Asahi, N., Sugimori, T., Nakata, E., Nohara, S., Ueta, K.（2021）：Quantitative determination of the lowest density domain in major fault zones via medical X-ray computed tomography, Progress in Earth and Planetary Science (2021), 8:54.
68	地震調査委員会（2021）：全国地震動予測地図2020年版　地図編，地震調査研究推進本部.
69	狩野 謙一・宮坂晃・山本 玄珠・楠 賢司（2021）：諏訪盆地南西側斜面の下部更新統塩嶺累層安山岩溶岩のK-Ar年代，地学雑誌，第130巻，第5号，p.615-632.
70	木村治夫・近藤久雄・小鹿浩太・川崎悠介・吉見瑶子・黒澤英樹（2021）：糸魚川-静岡構造線断層帯松本盆地東縁断層北部におけるS波浅層反射法地震探査，活断層研究，No.54，p.23-38.
71	松多信尚・澤祥・鈴木康弘・中埜貴元・廣内大助（2021）：1:25,000　活断層図「諏訪　改訂版」，国土地理院.
72	文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所（2021）：日本海地震・津波調査プロジェクト　令和2年度　成果報告書.
73	中嶋 健・吉川 幸佑・興津 修（2021）：富山トラフと周辺日本海の地質構造と堆積盆形成テクトニクス，地質学雑誌，Vol.127，No.3，p.165-188.
74	産業技術総合研究所地質調査総合センター：活断層データベース〈https://gbank.gsj.jp/activefault/〉（参照2021-4-21）.
75	澤田明宏・平松良浩・小林航・浜田昌明（2021）：重力異常解析による眉丈山第2断層の断層構造の推定，Japan Geoscienece Union Meeting 2021，SSS10-P05.

敷地周辺断層の評価に関連する知見（4／4）

No.	文献名
76	高山陶子・船越和也・千葉達郎（2021）：3-② 2時期の航空レーザ計測による平成28年熊本地震の変位分析，写真測量とリモートセンシング，Vo.60-5，pp244-247.
77	竹内 章（2021）：富山トラフおよび周辺海域のネオテクトニクス，地質学雑誌，Vol.127，No.3，p.145-164.
78	加瀬祐子（2022）：動力学的震源モデルに基づく糸魚川－静岡構造線断層帯の連動性の検討，活断層・古地震研究報告，No.22，p. 1-15.
79	Nakajima, J.（2022）：Crustal structure beneath earthquake swarm in the Noto peninsula, Japan, Earth, Planets and Space (2022) 74:160.
80	澤田明宏・石田聡史・小林航・野原幸嗣・平松良浩（2022）：能登半島西方海域における3次元地質構造モデル，日本海域研究，53，41-50.
81	杉戸信彦・石村大輔・澤祥・鈴木康弘・山中蛍（2022）：1:25,000 活断層図「茅野 改訂版」，国土地理院.
82	宝田晋治・西原歩・星住英夫・山崎雅・金田泰明・下司信夫 (2022)： 姶良カルデラ入戸火砕流堆積物分布図，産業技術総合研究所 地質調査総合センター.
83	藤原 明・渡辺 俊樹・東中 基倫・阿部 進・伊藤 谷生・狩野 謙一・佐藤 剛・阿部 信太郎・津村 紀子・岩崎 貴哉・武田 哲也・山本 玄珠・佐藤 比呂志・石山 達也・小田原 啓・原田 昌武・小森 次郎（2023）：富士川河口断層帯から糸魚川-静岡構造線に至る伊豆弧衝突帯北西部の地殻構造―統合的地震探査FIST2012の成果―，地学雑誌，第133巻，第1号，p.23-48.
84	星住英雄・宝田晋治・宮縁育夫・宮城磯治・山崎雅・金田泰明・下司信夫 (2023)：阿蘇カルデラ阿蘇4火砕流堆積物分布図，産業技術総合研究所地質調査総合センター.
85	文部科学省研究開発局・国立大学法人京都大学防災研究所（2023）：森本・富樫断層帯における重点的な調査観測 令和4年度成果報告書.
86	中埜貴元・山中蛍・楮原京子・金田平太郎・澤祥（2023）：1:25,000 活断層図「韮崎 改訂版」，国土地理院.
87	竹内誠・長森英明・古川竜太・及川輝樹・坂野靖行・宮川歩夢（2023）：20万分の1地質図幅「富山」（第2版），産業技術総合研究所地質調査総合センター.
88	山中 蛍・後藤 秀昭（2023）：糸魚川－静岡構造線活断層系白州断層の平均変位速度と完新世後半の古地震，地理学評論， 第96巻，第4号，p.291-315.
89	Aochi, A.（2024）：Dynamic rupture inversion on the M5.9 pre-event before the 2024 M7.6 Noto-Peninsula, Japan, earthquake, Earth, Planets and Space (2024) 76:148
90	文部科学省研究開発局・国立大学法人京都大学防災研究所（2024）：森本・富樫断層帯における重点的な調査観測 令和5年度成果報告書.

令和6年能登半島地震に関する知見（1／3）

No.	文献名
1	防災科学技術研究所（2024）：強震波形記録を用いた令和6年（2024年）能登半島地震（1月1日16時10分，M7.6）の震源インバージョン解析，2024年2月29日改訂，https://www.kyoshin.bosai.go.jp/kyoshin/topics/noto_20240101/inversion/inv_index.html.
2	Fujii, Y. and Satake, K.(2024)：Slip distribution of the 2024 Noto Peninsula earthquake (MJMA 7.6) estimated from tsunami waveforms and GNSS data, Earth Planets Space, 76:44, 1-12.
3	福島洋・石村大輔・高橋直也（2024）：令和6年能登半島地震（M7.6）のSAR画像解析による地盤変動の特徴，https://yofuku.github.io/files/column_20240109_2024Noto.html.
4	Fukushima,Y., Ishimura, D., Takahashi, N., Iwasa, Y., Malatesta, L., Takahashi, T., Tang, C., Yoshida, K., Toda, S.（2024）：Landscape changes caused by the 2024 Noto Peninsula earthquake in Japan, Science Advances, 10, eadp9193(2024).
5	二木敬右・米山望・吉池朋洋（2024）：令和6年能登半島地震津波の波源推定，自然災害科学，Vol.43，No.3，679-688.
6	Guo, Y., Miyakoshi, K., Sato, T.(2024)：Kinematic source rupture on listric faults for the 2024 Noto Peninsula, Japan, earthquake (Mw 7.5) estimated from near-field strong-motion waveforms, Earth Planets Space, 76:177, 1-19.
7	石田聡史・木村慎吾・野原幸嗣・浜田昌明・高山陶子・吉田崇博・山口弘幸・平松良浩（2024）：航空レーザ計測データを用いた令和6年能登半島地震に伴う地形変化の特徴，日本地震学会2024年度秋季大会，S03P-06 .
8	石村大輔・遠藤晋次（2024）：近年の内陸大地震にみる地表地震断層の解釈に関する課題，日本活断層学会2024年度秋季学術大会予稿集，19-20.
9	石山達也・廣内大助・松多信尚・立石良・安江健一（2024）：令和6年能登半島地震（M7.6）で生じた海岸隆起【速報その3】，東京大学地震研究所，https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/news/20465/.
10	地震調査委員会（2024a）：日本海側の海域活断層の長期評価－兵庫県北方沖～新潟県上越地方沖-（令和6年8月版），地震調査研究推進本部.
11	地震調査委員会（2024b）：令和6年能登半島地震の評価，令和6年2月9日，地震調査研究推進本部.
12	地震調査委員会（2024c）：2024年8月の地震活動の評価，令和6年9月10日，地震調査研究推進本部.
13	地震調査委員会（2024d）：2024年4月の地震活動の評価，令和6年5月13日，地震調査研究推進本部.
14	地震調査委員会（2024e）：2024年11月の地震活動の評価，令和6年12月10日，地震調査研究推進本部.
15	海上保安庁（2024a）：能登半島沖の海底で約3メートルの隆起を確認，令和6年2月8日，https://www.kaiho.mlit.go.jp/info/kouhou/r6/k240208/k240208.pdf.
16	海上保安庁（2024b）：珠洲市北方沖においても海底で約4メートルの隆起を確認，令和6年6月11日，https://www.kaiho.mlit.go.jp/info/kouhou/r6/k240611_2/k240611_2.pdf.
17	海上保安庁（2024c）：珠洲市北東沖等において海底隆起を確認～海上保安庁と北陸電力が地形解析で連携～，令和6年12月10日，https://www.kaiho.mlit.go.jp/info/kouhou/r6/k241210/k241210.pdf.
18	小林航・石田聡史・野原幸嗣・浜田昌明・平松良浩・山口弘幸・吉田崇博・高山陶子（2024）：令和6年能登半島地震による能登半島沿岸部の地震時隆起量，日本地球惑星科学連合2024年大会，U15-P81
19	国土地理院（2024a）：2024年1月1日令和6年能登半島地震の震源断層モデル（暫定），2024年2月29日，https://www.gsi.go.jp/common/000255958.pdf.
20	国土地理院（2024b）：令和6年能登半島地震に伴う地殻変動（第5報），2024年2月15日，https://www.gsi.go.jp/common/000255675.pdf.
21	国土地理院（2024c）：「だいち2号」観測データの解析による令和6年能登半島地震に伴う地殻変動（2024年1月19日更新），https://www.gsi.go.jp/uchusokuchi/20240101noto_insar.html.
22	Kutschera, F., Jia, Z., Oryan, B., Wong, J.W.C., Fan, W., Gabriel, A.A.(2024)：The Multi-Segment Complexity of the 2024 MW 7.5 Noto Peninsula Earthquake Governs Tsunami Generation, Geophysical Resaerch Letters, 51, 21.
23	京都大学（2024a）：強震波形記録による令和6年能登半島地震の震源過程（暫定），2024年1月15日，https://sms.dpri.kyoto-u.ac.jp/topics/2024noto_source_20240115.pdf.
24	京都大学（2024b）：令和6年能登半島地震の強震動特性（2），2024年2月9日，https://sms.dpri.kyoto-u.ac.jp/topics/2024noto_gm3_20240209.pdf.
25	Liu, C., Bai, Y., Lay, T., He, P., Wen, Y., Wei, X., Xiong, N., Xiong, X.(2024)：Shallow crustal rupture in a major MW 7.5 earthquake above a deep crustal seismic swarm along the Noto Peninsula in western Japan, Earth and Planetary Science Letters, 648, 119107.

令和6年能登半島地震に関する知見（2／3）

No.	文献名
26	Ma, Z., Zeng, H., Luo, H., Liu, Z., Jiang, Y., Aoki, Y., Wang, W., Itoh, Y., Lyu, M., Cui, Y., Yun, S.H., Hill, E.M., Wei, S.(2024)：Slow rupture in a fluid-rich fault zone initiated the 2024 Mw 7.5 Noto earthquake, Science, 385, 866-871.
27	丸山正・吉見雅行・吾妻崇（2024）：令和6年（2024年）能登半島地震で石川県珠洲市若山町の若山川沿いに出現した地表変状の特徴，活断層・古地震研究報告，No.24，pp.1-23.
28	Masuda, H., Sugawara, D., Cheng, A.C., Suppasri, A., Shigihara, Y., Kure, S., Imanishi, F.(2024)：Modeling the 2024 Noto Peninsula earthquake tsunami: implications for tsunami sources in the eastern margin of the Japan Sea, Geoscience Letters, 11:29.
29	Okada, T., Savage, MK., Sakai, S., Yoshida, K., Uchida, N., Takagi, R., Kimura, S., Hirahara, S., Tagami, A., Fujimura, R., Matsuzawa, T., Kurashimo, E., Hiramatsu, Y.（2024）：Shear wave splitting and seismic velocity structure in the focal area of the earthquake swarm and their relation with earthquake swarm activity in the Noto Peninsula, central Japan, Earth, Planets and Space (2024) 76:24.
30	Okuwaki, R., Yagi, Y., Murakami, A., Fukahata, Y.(2024)：A Multiplex Rupture Sequence Under Complex Fault Network Due To Preceding Earthquake Swarms During the 2024 Mw 7.5 Noto Peninsula, Japan, Earthquake, Geophysical Resaerch Letters, 51, 11.
31	邑知潟土地改良区（2024）：令和6年能登半島地震被害状況，https://www.outigata.or.jp/，2024年11月13日閲覧.
32	産業技術総合研究所（2024a）：第十報　2024年能登半島地震の緊急調査報告（令和6年（2024年）能登半島地震に伴う海底活断層の変位）， 産業技術総合研究所（2024b）：第十一報　2024年能登半島地震の緊急調査報告（令和6年（2024年）能登半島地震に伴う海底活断層の上下変位）， 佐藤比呂志（2024）：能登半島周辺のテクトニクスと震源断層，日本地震学会広報誌「なゐふる」，No.138，4-5. 佐藤浩・宇根寛（2024）：令和6年能登半島地震に関るSAR干渉画像の判読からとらえた位相不連続，日本地理学会災害対応委員会，http://disaster.ajg.or.jp/files/202401_Noto006.pdf. 白濱吉起・石山達也・立石良・安江健一（2024）：令和6年能登半島地震（M7.6）に伴い若山川沿いに生じた地表地震断層【速報】，東京大学地震研究所，https://www.eri-tokyo.ac.jp/news/20465/. 白濱吉起（2024）：能登半島北部谷底平野に現れた背斜状の地表変状，日本活断層学会2024年度秋季学術大会予稿集，99-100. 鈴木康弘・渡辺満久（2024a）：富来川南岸断層に沿う地震断層の発見，日本地理学会災害対応委員会，http://disaster.ajg.or.jp/files/202401_Noto011.pdf. 鈴木康弘・渡辺満久（2024b）：令和6年能登半島地震における富来川南岸断層の活動とその意義，日本地球惑星科学連合2024 年大会予稿集，HDS09-10. 鈴木康弘・渡辺満久（2024c）：令和6年能登半島地震をめぐる予測の課題，科学，2024年7月号，pp.639-645.
41	Takagi, H., Siddiq, N.L., Tanako, F., Rosa, De La Rosa, D.P.B.(2024)：Locally amplified tsunami in Iida Bay due to the 2024 Noto Peninsula Earthquake, Ocean Engineering, 307, 118180.
42	高橋秀暢・青柳恭平・木村治夫（2024）：稠密地震観測に基づく2024年能登半島地震の余震分布，日本地震学会2024年度秋季大会，S22P-01.
43	塚脇真二（2024）：令和6年能登半島地震の土砂災害とその応用地質学的な特徴，防災学術連携体 令和6年能登半島地震三ヶ月報告会，セッション2「地形変化と土砂災害について」.
44	Xu, L., Ji, C., Meng, L., Ampuero, J.P., Yunjun, Z., Mohanna, S., Aoki, Y.(2024)：Dual-initiation ruptures in the 2024 Noto earthquake encircling a fault asperity at a swarm edge, Science, 385, 6711, 871-876.
45	Yamanaka, Y., Matsuba, Y., Shimozono, T., Tajima, Y.(2024)：Nearshore Propagation and Amplification of the Tsunami Following the 2024 Noto Peninsula Earthquake, Japan, Geophysical Resaerch Letters, 51, 19.
46	安江健一・平松良浩・杉戸信彦・向吉秀樹・立石良・道家涼介・白濱吉起・小川智史・廣瀬健大朗・山崎伶士・原田隼輔・牧野美月・小林雅広・若林耕一朗・島田昌弥・沢田優菜・天児幹治・宇治拓海・近藤梨紗・澤田渚・瀬能正太郎・白銀美里（2024）：令和6年能登半島地震に伴い若山川沿いに出現した断層の掘削調査（速報），日本活断層学会2024年度秋季学術大会予稿集，83-84.
47	吉田一希（2024）：石川県珠洲市若山町に出現した上下変位を伴う戦場の地表変状（速報），国土地理院地理地殻活動研究センター，https://web1.gsi.go.jp/common/000254854.pdf.
48	Yoshida, K., Endo, R., Iwahashi, J., Sasagawa, A., Yarai, H., (2024)：Aerial SfM-MVS Visualization of Surface Deformation along Folds during the 2024 Noto Peninsula Earthquake(Mw7.5), Remote Sensing, 16, 2813.
49	Yoshida, K., Takagi, R., Fukushima, Y., Ando, R., Ohta, Y., Hiramatsu, Y.（2024）：Role of a Hidden Fault in the Early Process of the 2024 Mw7.5 Noto Peninsula Earthquake, Geophysical Resaerch Letters, 51, 16.
50	吉見雅行・丸山正（2024）：第九報　2024年能登半島地震の緊急調査報告（陸域に出現した地表変状の現地調査），産業技術総合研究所地質総合センター， https://www.gsj.jp/hazards/earthquake/noto2024/noto2024-09.html.

令和6年能登半島地震に関する知見（3／3）

No.	文献名
51	Ando, R., Fukushima, Y., Yoshida, K., Imanishi K.(2025)：Nonplanar 3D fault geometry controls the spatiotemporal distributions of slip and uplift: evidence from the Mw 7.5 2024 Noto Peninsula, Japan, Earthquake, Earth Planets Space, 77:53, 1-17.
52	Chen, Y., Li, J., Lu, K., Hu, T.(2025)：Coseismic slip model and ear l y post-seismic deformation processes of the 2024 M7.5 Noto Peninsula, Japan earthquake r e vealed by InSAR and GPS observations, Geophys. J. Int. (2024) 240, 1048-1063.
53	Enomoto, R., Kaneko, Y., Tang, C.H., Fukushima, Y., Goto, H., Miyazaki, S.(2025)：Multi-fault segment complexity and multi-rupture episodes during the 2024 Mw 7.5 Noto Peninsula earthquake, Earth Planets Space, 77:83, 1-14.
54	原子力規制庁　地震・津波研究部門(2025)：2024年1月1日に発生した能登半島地震の知見の収集結果，令和7年3月27日，https://www.da.nra.go.jp/view/NRA100008938?contents=NRA100008938-002-010.
55	Goto, H., Yamanaka, T., Makita, T., Iwasa, I., Ogura, T., Kagohara, K., Kumahara, Y., Suzuki, Y., Yasuhiro S., Matta, N., Aoki, T., Mori, W., Haranishi, K., Nakata, T.(2025)：Coast uplifted by nearby shore-parallel active submarine faults during the 2024 Mw 7.5 Noto Peninsula earthquake, Geomorphology, 493, 110069, https://doi.org/10.1016/j.geomorph.2025.110069.
56	平松良浩・石田聡史・上山エイジ・野原幸嗣・田中康久・川崎慎治・佐藤比呂志(2025)：能登半島西方沖の羽咋沖西断層周辺における臨時地震観測と震源再決定，日本地震学会2025年秋季大会，S10-03.
57	平松良浩・澤田明宏(2025)：石川県西方沖の2024年M6.6の地震に関する地震活動と重力異常に基づく断層構造，日本地球惑星科学連合2025年大会，SSS14-P02.
58	地震調査委員会(2025a)：日本海中南部の海域活断層の長期評価（第一版）－近畿地方・北陸地域北方沖－，地震調査研究推進本部.
59	地震調査委員会(2025b)：「令和6年能登半島地震」に関する「地震調査委員長見解」，令和7年1月15日，地震調査研究推進本部.
60	Kobayashi, H., Watanabe, T., Koketsu, K.(2025)：Rupture process of the 2024 Noto Peninsula earthquake inferred from strong motion, teleseismic, and geodetic data, Earth Planets Space, 77:104, 1-13.
61	小林知勝・宗包浩志・石本正芳(2025)：人工衛星から視る令和6年能登半島地震の地殻変動と断層運動,活断層研究, 62, 11-15.
62	Komura, K., Yamada, A., Sakakura, N., Kimura, S., Ishida, S., Nohara, K., Takayama, T., Yoshida, T.(2025)：Coseismic Deep-Seated Gravitational Slope Deformations Triggered by the 2024 Mw 7.5 Noto Peninsula Earthquake, the Seismic Record, 5(1), 107-117.
63	藏下英司・酒井慎一・津村紀子・篠原雅尚(2025)：令和6年能登半島地震震源域最西端における海陸統合地震観測，日本地球惑星科学連合2025年大会，SSS12-P11.
64	Mohanna, S., Meng, L., Ho, C.T., An, C., Xu, L.(2025)：The 2024 Noto earthquake and tsunami: insights from the static and adjoint state inversion methods, Earthquake, Earth Planets Space, 77:130, 1-12.
65	Nakao, K., Ichimura, T., Munekane, H., Kobayashi, T., Hori, T., Fujita, K.(2025)：Simultaneous Bayesian estimation of multisegment fault geometry and complex slip distribution: application to the 2024 Noto Peninsula earthquake, Geophysical Journal International, 242, 2, ggaf231.
66	Peng, Z., Lei, X., Wang, Q.Y., Wang, D., Mach, P., Yao, D., Kato, A., Obara, K., Campillo, M.(2025)：The evolution process between the earthquake swarm beneath the Noto Peninsula, central Japan and the 2024 M 7.6 Noto Hanto earthquake sequence, Earthquake Research Advances, 5, 100332.
67	Sawaki, Y., Shiina, T., Sagae, K., Sato, Y., Horikawa, H., Miyakawa, A., Imanishi, K., Uchida, T.(2025)：Fault Geometries of the 2024 Mw 7.5 Noto Peninsula Earthquake From Hypocenter-Based Hierarchical Clustering of Point-Cloud Normal Vectors, Journal of Geophysical Research: Solid Earth, 130, 4.
68	先名重樹(2025)：令和6年能登半島地震における液状化地点分布と特徴，地盤工学会災害調査論文報告集, 3, 1, 137-150.
69	Shiina, T., Horikawa, H., Sawaki, Y., Sagae, K., Imanishi, K.(2025)：Aftershock distribution of the 2024 Noto Peninsula Earthquake, Japan, determined using a 3D velocity structure and uncertainty quantification, Earth Planets Space, 77:94, 1-13.
70	Shinohara, M., Hino, R., Takahashi, T., Obana, K., Kodaira, S., Azuma, R., Yamada, T., Akuhara, T., Yamashita, Y., Kurashimo, E., Murai, Y., Isse, T., Nakahigashi, K., Baba, H., Ohta, Y., Ito, Y., Yakiwara, H., Nakatani, Y., Fujie, G., Sato, T., Shiobara, H., Mochizuki, K., Sakai, S., The R/V Hakuho-maru KH-24-JE01 and KH-24-JE02C shipboard science parties(2025)：Precise aftershock activity in the marine source region of the 2024 Noto-Hanto earthquake by rapid response observation using ocean bottom seismometers, Earth, Plamets and Space, 77:43.
71	Suito,H.(2025)：Postseismic deformation model of the 2024 Noto Peninsula earthquake, central Japan, Earth Planets Space, 77:100.
72	Tagami, A., Okada, T., Savage, K.N., Chamberlain, C., Matsuzawa, T., Fujimura, R., Tateiwa, K., Yoshida, K., Takagi, R., Kimura, S., Hirahara, S., Yamada, T., Ohta, Y.(2025)：Evaluation of the favorability of faults to slip: the case of the 2024 Noto Peninsula earthquake, Earth Planets Space, 77:107, 1-19.
73	Takagawa, T., Chida, Y., Fujiki, T., Kawaguchi, K.(2025)：High-resolution source inversion of 2024 Noto Peninsula earthquake tsunami with modeling error corrections, Scientific Report, 15, 1.
74	Yamada, T., Ohta, Y., Nishimura, T., Yoshida, K., Hiramatsu, Y., Kinoshita, Y. (2025)：Coseismic slip distribution of the 2024 Noto Peninsula earthquake deduced from dense global navigation satellite system network and interferometric synthetic aperture radar data: effect of assumed dip angle, Earth Planets Space, 77:19, 1-16.
75	Yamaya, L., Kubo, H., Shiomi, K., Kimura, T.(2024)：Aftershock characteristics of the 2024 Noto Peninsula earthquake (Mw7.5) through centroid moment tensor analysis using a 3-D seismic velocity structure model, Earth, Planets and Space (2024) 77:67.
76	吉田邦一(2025)：2024年11月26日石川県西方沖の地震の震源過程，日本地震学会2025年秋季大会，P15-07.

令和6年能登半島地震に係る主な報告会等（1／2）

○ 知見収集の対象とした令和6年能登半島地震に係る主な報告会等の一覧を下表，次頁に示す。

知見収集の対象とした主な報告会等の一覧※

学会・研究機関等	報告会等	時期
地震調査研究推進本部	令和6年能登半島地震の評価	2024年1月2日
	令和6年能登半島地震の評価	2024年1月15日
	令和6年能登半島地震の評価	2024年2月9日
	2024年1月の地震活動の評価	2024年2月9日
	2024年2月の地震活動の評価	2024年3月11日
	2024年3月の地震活動の評価	2024年4月9日
	2024年4月の地震活動の評価	2024年5月13日
	2024年5月の地震活動の評価	2024年6月11日
	2024年6月の地震活動の評価	2024年7月9日
	日本海側の海域活断層の長期評価 －兵庫県北方沖～新潟県上越地方沖－（令和6年8月版）	2024年8月2日
	2024年7月の地震活動の評価	2024年8月9日
	2024年8月の地震活動の評価	2024年9月10日
	2024年9月の地震活動の評価	2024年10月9日
	2024年10月の地震活動の評価	2024年11月12日
	2024年11月の地震活動の評価	2024年12月10日
	2024年12月の地震活動の評価	2025年1月15日
	「令和6年能登半島地震」に関する「地震調査委員長見解」	2025年1月15日
	2025年1月の地震活動の評価	2025年2月12日
	2025年2月の地震活動の評価	2025年3月11日
	2025年3月の地震活動の評価	2025年4月9日
	2025年4月の地震活動の評価	2025年5月13日
	2025年5月の地震活動の評価	2025年6月10日
	日本海中南部の海域活断層の長期評価（第一版）	2025年6月27日
	2025年6月の地震活動の評価	2025年7月9日
	2025年7月の地震活動の評価	2025年8月12日
	2025年8月の地震活動の評価	2025年9月9日
地震予知連絡会	第242回地震予知連絡会	2024年2月29日
	第243回地震予知連絡会	2024年5月22日
	第244回地震予知連絡会	2024年8月29日
	第245回地震予知連絡会	2024年11月18日
	第246回地震予知連絡会	2025年2月27日
	第247回地震予知連絡会	2025年5月20日
	第248回地震予知連絡会	2025年8月19日
防災学術連携体	緊急報告会「令和6年能登半島地震の概要とメカニズム」	2024年1月19日
	令和6年能登半島地震1ヶ月報告会	2024年1月31日
	令和6年能登半島地震3ヶ月報告会	2024年3月25日
	令和6年能登半島地震7ヶ月報告会	2024年7月30日
	阪神・淡路大震災30年，社会と科学の新たな関係	2025年1月7日
日本地球惑星科学連合	2024年大会	2024年5月26～31日
	2025年大会	2025年5月25～30日

学会・研究機関等	報告会等	時期
日本地震学会	オンライン談話会－2024年能登半島地震－	2024年2月2日
	オンライン談話会－2024年能登半島地震－	2024年2月8日
	オンライン談話会－2024年能登半島地震－	2024年2月15日
	オンライン談話会－2024年能登半島地震－	2024年2月28日
	2024年秋季大会	2024年10月21～23日
	2025年秋季大会	2025年10月20～22日
日本地震工学会	第18回年次大会	2024年12月4～5日
	阪神・淡路大震災から30年 －地震工学の再定義と今後のアジェンダ－	2025年1月24日
土木学会	令和6年能登半島地震（M7.6）に関する速報会	2024年1月9日
	令和6年能登半島地震津波に関する調査報告会	2024年1月27日
	第49回海洋開発シンポジウム	2024年6月24～26日
	第79回年次学術講演会	2024年9月5～6日
	第44回地震工学研究発表会	2024年9月10～11日
	第71回海岸工学講演会	2024年11月6～8日
	第80回年次学術講演会	2025年9月8～12日
日本建築学会	日本建築学会大会[関東]	2024年8月27～30日
	第52回地盤震動シンポジウム	2024年11月29日
日本原子力学会	2024年春の年会	2024年3月26～28日
	2024年秋の年会	2024年9月11～13日
日本免震構造協会	令和6年能登半島地震免震建物調査報告会	2024年4月4日
日本ジオパーク学術支援連合	「令和6年能登半島地震緊急オンライン学習会」	2024年1月28日
日本地理学会	春季学術大会　緊急シンポジウム「令和6年能登半島地震」	2024年3月19～21日
	「地理学は能登半島地震をどのように捉えるか」	2024年8月30日
	2024年秋季学術大会	2024年9月14～16日
	2025年春季学術大会	2025年3月19～21日
	2025年秋季学術大会	2025年9月20～21日
日本第四紀学会	令和6年能登半島地震に関するシンポジウム	2024年7月7日
	2024年大会	2024年8月29日～9月2日
	2025年大会	2025年8月28日～9月1日
日本地質学会	関東支部2024年度講演会	2024年4月20日
	令和6年能登半島地震による地殻変動と地盤災害	2024年5月12日
	中部支部2024年支部年会	2024年6月22～23日
	第131年学術大会	2024年9月8～10日
	第132年学術大会	2024年9月14～16日
日本活断層学会	2024年度秋季学術大会	2024年11月2～4日
日本自然災害学会	第43回日本自然災害学会学術講演会	2024年9月19～20日
日本堆積学会	日本堆積学会2024年大会	2024年4月20～22日
日本応用地質学会	中部支部　令和6年度講演会	2024年5月22日
	2025年度研究発表会	2025年10月8～10日

※上記の主な報告会等のほか，各機関のホームページ等で発表される情報や論文についても収集を行っている。

令和6年能登半島地震に係る主な報告会等（2／2）

知見収集の対象とした主な報告会等の一覧※

学会・研究機関等	報告会等	時期
地盤工学会	震災速報会	2024年2月19日
	第59回地盤工学研究発表会	2024年7月23～26日
	地盤工学会と富山県との災害協定に基づく研修会	2024年8月28日
	2024年度地盤工学に関わる実務者報告会：石川地区	2024年9月13日
	第64回地盤工学シンポジウム	2024年11月26日
物理探査学会	第150回学術講演会	2024年6月4～6日
	第151回学術講演会	2024年12月4～6日
写真測量学会	令和6年度年次学術講演会	2024年5月23～24日
東京地学協会	特別講演会2024	2024年6月15日
歴史地震研究会	第41回歴史地震研究会	2024年9月13～15日
東北大学	令和6年能登半島地震に関する速報会	2024年1月9日
	令和6年能登半島地震に関する報告会	2024年5月8日
東京大学	令和6年能登半島地震ワークショップ	2024年3月12日
	2024年公開講義	2024年8月6日
	能登の海底で何が起こったのか？学術研究船「白鳳丸」による緊急調査航海でわかったこと	2024年12月21日
	海と地球のシンポジウム	2025年3月12～13日
名古屋大学	2023年度年次報告会	2024年3月21日
	第12回減災連携研究センターシンポジウム	2024年6月21日
京都大学	報告会「令和6年能登半島地震災害を理解する」	2024年1月28日
	令和5年度　京都大学防災研究所　研究発表講演会	2024年2月21～22日
	地震リスク評価高度化研究分野 成果報告会	2024年3月21～22日
	第61回自然災害科学総合シンポジウム	2024年9月21日
	令和6年度　京都大学防災研究所　研究発表講演会	2025年2月20～21日
原子力規制委員会	第71回技術情報検討会	2025年3月27日
	第5回原子炉安全専門審査会及び核燃料安全専門審査会 地震・津波部会	2025年6月20日
産業技術総合研究所	第340回活断層・地震研究セミナー「2024年（令和6年）能登半島地震で石川県珠洲市若山町の若山川沿いに出現した地表変状の特徴」	2024年11月22日
	第348回活断層・地震研究セミナー「2024年能登半島地震の特異な破壊過程と広域地質災害」	2025年2月28日
防災科学技術研究所	令和5年度 第4回 災害レジリエンス共創研究会 「令和6年能登半島地震」報告会	2024年3月5日
海上保安庁	令和6年度海洋情報部研究成果発表会	2025年1月30日
国土地理院	第187回国土地理院地理地殻活動研究センター談話会	2025年2月21日
応用地質㈱	OYOフェア2024	2024年7月30日

※上記の主な報告会等のほか，各機関のホームページ等で発表される情報や論文についても収集を行っている。

余白